宮城県文化財調査報告書第24集

東北自動車道関係遺跡発掘調査概報

(刈田郡蔵王町地区)

昭　和　46　年　3　月

宮 城 県 教 育 委 員 会
日　本　道　路　公　団

東北自動車道関係遺跡発掘調査概報

（刈田郡蔵王町地区）

序

長い間、「白河以北一山百文」といわれた東北地方も、これまで蓄積してきた人的、物的資源を最大限に発揮するための開発事業が本格的に進行している。

本県においても、仙台新港、仙台空港、東北縦貫道、東北新幹線等々の開発事業が活発に進められ、面目を一新する日も遠いことではない。

然し、1960年代の開発が経済の成長のみに重点がおかれて、物質的な繁栄をもたらしたものの、一面において、自然や文化財の破壊、公害問題、社会連体性の欠如等、人間の生活環境をむしろ悪化するような現象を生じていることは、反省されなければならないと思う。そういう意味で、東北自動車道関係遺跡発掘調査は、開発と文化財保護の接点として、重要な意味をもっている。

この調査は日本道路公団の委託を受け昭和44年度から実施しているが、本年度は蔵王町地区11ヶ所の遺跡について調査を行ない、多くの貴重な資料が発見されたことは喜びにたえない。

調査に当られた担当者、参加者のご努力に対し、敬意を表するとともに、日本道路公団、蔵王町当局、ならびに地元有志の方々から寄せられたご厚意とご協力に対し深く感謝の意を表する。

昭　和　46　年　3　月

宮城県教育庁社会教育課長　　今　野　　勲

目　　次

Ⅰ　発掘に至るまでの経過……1
Ⅱ　蔵王町における東北自動車道周辺の遺跡……5
Ⅲ　各遺跡の発掘調査概報……7
（一）宮城館跡……7
（二）欠遺跡……15
（三）持長地遺跡……21
（四）二屋敷遺跡……29
（五）下原田遺跡……43
（六）東山遺跡……51
（七）大山遺跡……69
（八）塩沢北遺跡……77
（九）伊原沢下遺跡……89
（十）大橋遺跡……91
（十一）赤鬼上遺跡……105
Ⅳ　図　　版……111

Ⅰ　発掘に至るまでの経過

国土開発縦貫自動車道建設法（昭和32年法律第68号）にもとづいて、全国主要幹線道路網が計画されたが、その中で東北自動車道も産業、経済開発の大動脈として建設されることとなつた。

この開発計画によつて、埋蔵文化財の包蔵する数多くの遺跡が破壊される心配もでてきたので、遺跡の分布図を日本道路公団に提示し、計画の段階でこうした場所をさけてほしい旨の申し入れを行なつた。

昭和42年には、予定路線の発表が目前に迫つていたため、宮城県教育委員会社会教育課内に新らたに埋蔵文化財担当部門を設け、志間がそれらの対策に当ることになつた。

昭和42年5月13日、まず、白石市、蔵王町間を皮切りにして予定路線が第１表のように相ついで発表された。そして42年度国庫補助事業として仙台地方以南の東北自動車道関係遺跡分布調査費100万円が計上されたこともあつて、早速5月23日東北自動車道遺跡緊急調査対策委員会を発足させ対応策を講ずることになつた。つぎに委員名をあげると

東北大学文学部教授	伊　東　信　雄	（考古）	宮城県文化財専門委員
元東北大学工学部教授	小　倉　　強	（建築）	宮城県文化財専門委員
東北大学工学部教授	佐　藤　　巧	（建築）	宮城県文化財専門委員
東北大学教養部教授	高　橋　富　雄	（歴史）	
東北大学助教授	芹　沢　長　介	（考古）	
東北学院大学助教授	加　藤　　孝	（考古）	
東北大学工学部講師	坂　田　　泉	（建築）	
宮城県第二女子高校教諭	氏　家　和　典	（考古）	
宮城県塩釜女子高校教諭	後　藤　勝　彦	（考古）	
一迫町長崎診療所長	興　野　義　一	（考古）	
東北大学助手	工　藤　雅　樹	（考古）	
郷土史家	片　倉　信　光		

の12名で、この委員会の協議、決定にもとづいて、下記の調査補助員が選ばれ、路線の周辺約１㎞範囲に分布する遺跡の再踏査と新しい遺跡の発見につとめることになり、志間は路線敷内を精査することにした。調査補助員の氏名、担当地域を記すと

白石市、蔵王町地内　中橋彰吾、宮地祐一、高橋辰男、森谷祐堂

村田町地内　　丹羽道博、日和田公三、佐々木安彦

仙台市地内　　大岡　忠、長尾文次郎

で、その結果、新たにみつかつた遺跡は47か所におよび、そのうち道路敷内には、23

か所が所在することが判明した。

昭和43年2月－3月にかけて、これらの遺跡の規模、性格などを把握し、発掘費の積算の基礎資料を得るために各委員が担当して試掘調査を実施した。

43年度には、さらに仙台以北の分布調査を行なつたがこれと併行して白石市湯ノ倉館の測量と試掘調査を行なつた。

その間、中心杭打ち、幅杭うちの作業が順調に行なわれたが、用地買収の段階でかなり難航をみたが、昭和44年10月には、柴田郡村田町、12月には刈田郡蔵王町地内の用地買収が妥結し、着工を待つばかりの段階となった。それで、着工が早いと目される蔵王町下原田、二屋敷、持長地の三遺跡の発掘調査について日本道路公団と委託契約を結び、昭和45年2月20日から調委を実施した。

路線発表年月日	通過市町村
昭和42 5 13	白石市～蔵王町
9 12	白石市越河福島県境付近
11 6	村田町～名取川右岸
44 6-23	仙台市名取川左岸～泉町（国道４号線交叉点付近）
5 28	仙台市～村田町の一部
45 5 16	泉町～金成町
1125	金成町～岩手県境付近

通過市町村道路敷キロ数

白石市	18.2キロ	蔵王町	10.3キロ
村田町	9.9キロ	名取市	1.6キロ
仙台市	10.4キロ	宮城町	5.4キロ
泉町	9.0キロ	富谷町	6.8キロ
大和町	5.7キロ	大衡村	4.1キロ
三本木町	6.3キロ	古川市	14.8キロ
高清水町	2.5キロ	一迫町	1.7キロ
築館町	7.2キロ	志波姫町	4.1キロ
若柳町	4.9キロ	金成町	9.2キロ

全長 1 3 2.1 Km

第１表　東北縦貫自動車道予定路線

ところが、遺跡の規模が予想した以上に大きかつたり、複雑な遺構であつたばかりでなく、調査体制、経費などの面でも制約がある上に、年度末ぎりぎりの調査でもあつたので、一たん調査を打切り、45年度初頭に再度調査を実施したい旨、日本道路公団の関係者と話合いをもち、承認をえ、4月5日から第２次調査にとりかゝつた。

ところで、これまでの調査は、殆んど東北自動車道遺跡緊急調査対策委員を中心とし、考古学研究の学生などの協力に依存する形で行なわれていたが、最早、そうした手段ではこれらの遺跡は処理しきれない状態におかれていたので、昭和45年4月、社会教育課文化財係として藤沼技師、白鳥嘱託が増員配属されたので、これを契機として、県教育委員会の直営事業として発掘を実施する方針をたてた。

5月23日、蔵王町下原田遺跡の現場において東北自動車道起工式が行なわれ、つづいて、宮地区から松川橋までを第１次施行区間として入札されることになり、工事は48年完工をめざし急ピツチで進められることになった。発掘もそれに歩調をあわせて、土曜、日曜も返上し、総力を結集して調査にあたつた。そして45年度は蔵王町内の調査を主とし南から順次11遺跡の調査を行なう計画をたてた。昭和45年度日本道路公団から委託をうけた金額

は9,946万円である。

こうした発掘調査の期間中に蔵王町宮と円田の両地区において、遺跡説明会を実施し、一般人を対称に埋蔵文化財に対する理解、認識を深めてもらうような計画をもつた。

なお、この発掘が、数々の成果を収めて、予定通り終了することができたのも、調査に当つた委員、補助員、地元作業員の協力によるところと感謝すると共に、蔵王町、蔵王町教育委員会、蔵王町公民館、蔵王町立円田中学校、同宮中学校の各位から絶大なご援助があつたこと、また、蔵王町経済課佐々木勇蔵、公民館長庄司襲雄、社会教育主事小紫　敏、東根公民館分館長三沢安平、円田中学校長広岡二郎の各氏からの有形無形のご厚志をうけたほか、つぎの、我妻末雄、佐藤正夫、平間あさ子、村上耕一、大沼虎次郎、斎藤勘十郎、平間喜三太、佐藤繁治、佐藤良三、三浦敬喜、佐藤伸吉、斎藤一二の各氏の絶大なご協力のあつたこともあわせ記して感謝の微意を表します。

（志　間　泰　治）

第１図　蔵王町における東北自動車道周辺の遺跡分布図

1　宮城館跡　2　欠遺跡　3　持長地遺跡　4　二屋敷遺跡　5　下原田遺跡　6　東山遺跡
7　大山遺跡　8　塩沢北遺跡　9　伊原沢下遺跡　10　大橋遺跡　11　赤鬼上遺跡　12　内親館
13　明神裏遺跡・古墳　14　山家館　15　鉾付神社古墳　16　天王古墳　17　宋膳堂古墳
18　中屋敷古墳　19　台西遺跡　20　都囲遺跡　21　鍛冶沢遺跡

Ⅱ　蔵王町における東北自動車道周辺の遺跡

白石市から国道４号線を北上して蔵王町宮に入ると、両側の山地が急にせり出し迫つてくる。右手にそびえ立つのが根城館（または内親館という）で、左側には、宮城館跡が相対峙してみられ、かつては奥州街道筋の防衛上の一要衝であつたろうことは容易に想像される。

東北自動車道は、この宮城館の西端を斜に横切つて、式内社刈田嶺神社（または白鳥神社とも呼ぶ）の傍をかすめる。縄文式早期の明神裏遺跡、明神裏古墳のあるのもこの付近である。道路は、森の川のつくる低地帯を北上する。ここで、東側の欠遺跡を僅か削り、やがて持長地遺跡のある丘陵を横断し、二屋敷遺跡に達する。

この遺跡は、松川のつくる河岸段丘上にみられる広い面積を占める遺跡であるが、道路はこれらを二分してゆるく東にカーブし、やがて遠刈田街道（国道４号線から蔵王町宮で分岐し蔵王エコーラインに通ずる県道）と立体交叉する。ここは、バスストップの予定地となつているが、この地点に下原田遺跡が所在する。

ここを過ぎると、このすぐ東地点で蔵王山から流れ下る松川を跨ぎ対岸の猫田地区に入る。そこで再び方向を北に転じ、町内最大の耕地のみられる蔵王町円田盆地に入る。ここで最初の切通しになる丘陵地に東山遺跡があつた。自動車道は、この盆地の東の縁辺の丘陵地舌端を断ち割るように北上をつづける。そのため、損壊される遺跡も極めて多くなる。即ち南から大山、塩沢北、伊原沢下、大橋、赤鬼上の諸遺跡を串ざしにし、柴田郡村田町境に達する。蔵王町内を通過する道路の距離は10.3㎞で、道路の建設によって影響の及んだ遺跡は11箇の多きにのぼるのである。ここでは、これら遺跡の理解を助けるために、周辺の遺跡を概観してみたい。

宮地区は、蔵王山、青麻山の山麓地帯であるため、二屋敷遺跡をはじめとし鍛冶沢、下別当などの大規模な縄文時代の遺跡が多くみられるが、これは、狩猟、採集生活には好条件をそなえた自然環境のととのつた地域であつたからといえる。

一方、円田地区に入ると、盆地周辺の丘陵には、必ずといつてもよい位に弥生式土器、特に円田式と呼ばれる土器片の散布する遺跡が認められる。この付近にはつぎの時代の所産の古墳も数多く存在し、文化の中心は、この地区に集中する感がある。その主なものをあげると、天王、鉾付神社、中屋敷の円墳、八幡山などの小方墳がみられるほか、一辺の長さ27m、円筒埴輪を繞らす蔵王町内最大の宋膳堂方墳が認められる。

これら古墳時代の土器を出す遺跡は、盆地内低地の各所で発見されているが、特に台西遺跡、都囲遺跡、円田中学校校庭遺跡などは過去に多量の土器を出し著名となつたが、これらは土木工事の際の発見であり全貌を明かになし得なかつたが、この付近が当時の集落と考え

て間違いあるまい。

今回、東北自動車道関係遺跡の発掘調査はそうしたことの不備を補い、当地方の歴史、生活、文化など、今までより一層鮮明に、浮彫できたであろうことと自負している。

（志　間　泰　治）

参考文献

宮城県文化財調査報告書第17集「埋蔵文化財緊急調査概報」－東北縦貫自動車道遺跡－

(一)　宮城（みやじょう）館跡

宮　　城　　館　　跡

1　遺跡所在地

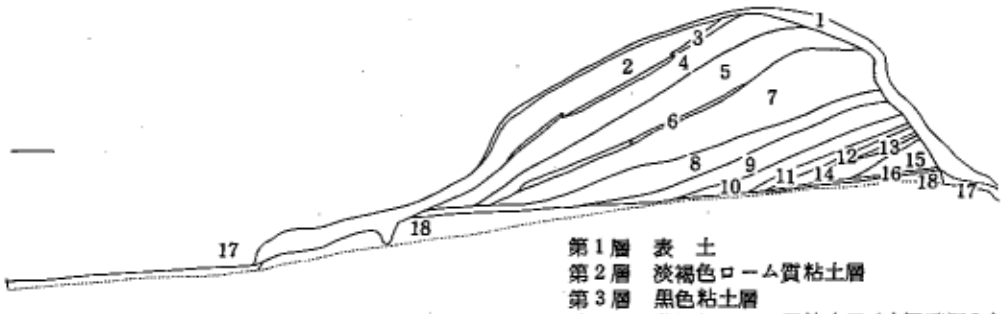
宮城県刈田郡蔵王町宮字神合・台・小屋田

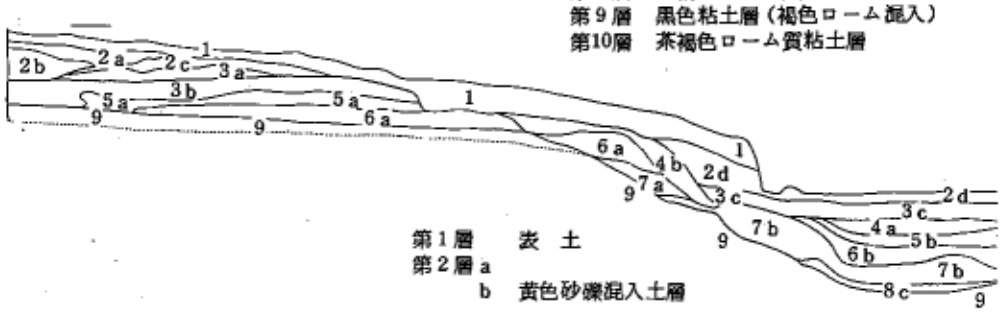
2　調査期日

昭和45年7月19日～31日

3　調査主体者

宮城県教育委員会、日本道路公団





4　調査担当者

宮城県教育庁社会教育課　技術主査　志間泰治

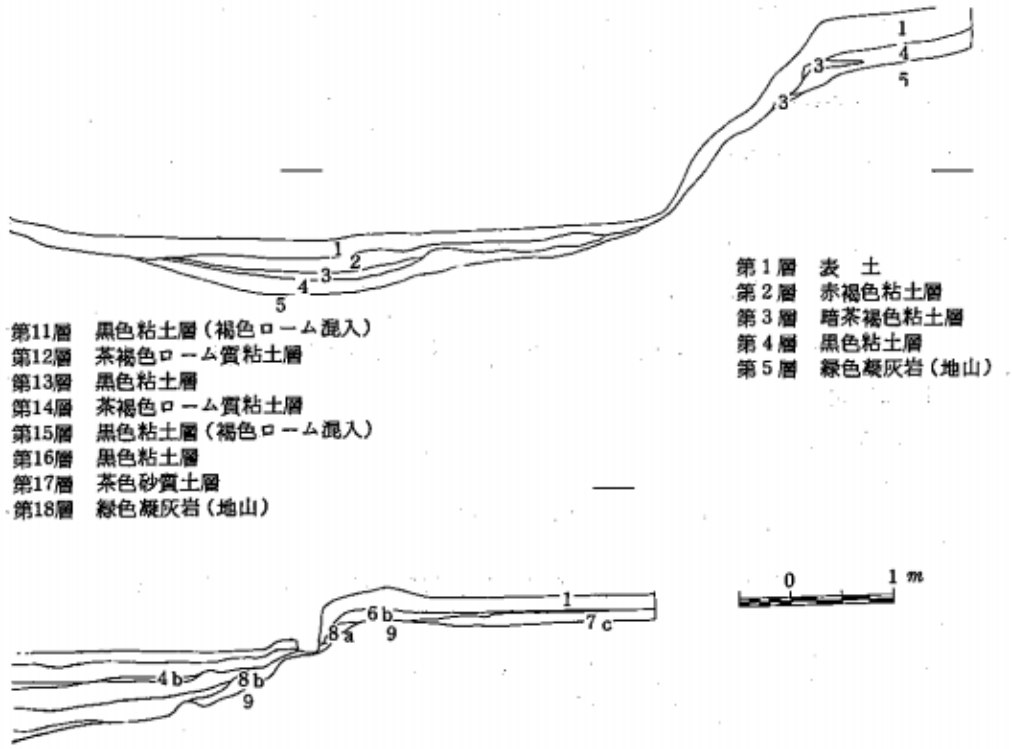
技師　藤沼邦彦

嘱託　白鳥良一

5　調査参加者

東北大学考古学部究室　　西脇俊郎

東北学院大学　　斎藤誠一



第2図　宮城館跡　（上）西土塁空堀断面図

（下）北空堀断面図

６　調査の概要

白石市から国道４号線を北上して刈田郡蔵王町宮に入ると、両側の山地が急にせり出してくる。右手には白石川を距てて根城館（または内親館）の山塊がみられる（第１図）。これと対峙するかのように左手の丘陵を利用して作られた宮城館跡がみられる。かっては奥州街道筋の隘路部にあたっており、防衛上の要衝として、かなり重視されていた地域であったと思われる。それは南北朝時代に、これらの館跡付近を中心に戦が行なわれたとか、伊達政宗が関ヶ原合戦の際、ここに陣をしき、上杉勢のたてこもる白石城を攻めたというような、いい伝えが今も語り継がれ残っていることからも立証できよう。ところで、これらの館跡が記録にでてくるのは、江戸時代になってからである。

仙台領古城書立之覚、苅田郡の項によると

内親村

１　内親城　　東西17間　510坪

南北30間

１　二ノ丸　　東西17間　510坪　1020坪

南北30間

右城主宮内因幡ト申者ニ候宮内権十郎先祖ニ御座候跡城主ノ名相知不申侯是又一族之者ニ御座候

宮　村

１山宮城　　東西

45間ツツ2000令25坪

南北

右此城主右因幡内親ヨリ此城江取移候由ニ候得共城ノ名不相知宮ノ城ト号ス

となっており、

安永年間の刈田郡宮村風土記御用書出の古館の項に

１　古館　　高　15間程

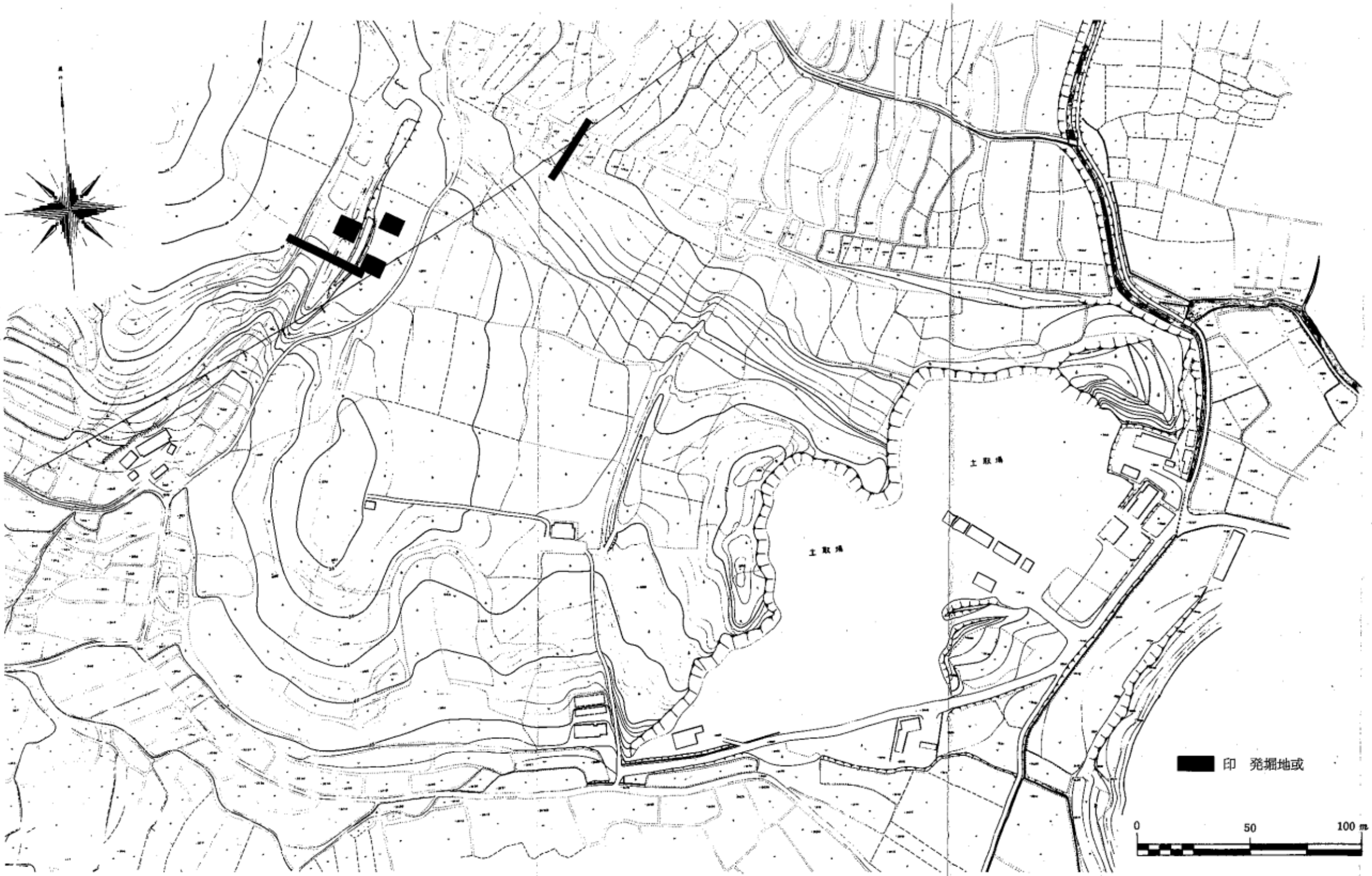
大手　東向

１、本丸　東西12間半　１、二の丸　東西20間

南北30間余　　南北20間

御館主宇田郡駒ヶ嶺村御領主宮内因幡様御先祖御同姓因幡様御住居被成侯由申伝候処右年代相知不申候当時ハ荒地ニ罷成申候事

という記載が見えているが、これによると近世初頭まで使われたが、藩政時代にはもはや館としての機能を失って廃城となっていたといえる。



第3図　宮城館跡地形図

ところで、宮城館跡は、国道に近い位置にあったため、格好の採土場として着目され、大型機械によって工事が行なわれたため、ほんの短時日のうちに本丸跡は壊滅してしまったようである。

勿論こうした工事は、われわれの目にふれる以前に実施されてしまっていたため、記録保存の措置は勿論のこと、写真一枚残らずしまいになったことはかえすがえすも残念というよりほかない。

ここで、現在残っている館の現況を説明しておくと、館は、南北約450～550m、東西730m、平面形は長方形をなす館跡でこれら館の山裾には堀もめぐらされている（第３図）。

風土記書上げに出ている本丸は、採土場となり姿を消したため実態は不明であるが、頂部標高は約60mほどと考えられ、ここには、館跡に特有の多くの階段状の平担な場所があったことが知られる。

丁度、この館の中央部に、本丸と二の丸を界するごとく、南北方向に丘陵の一部を削って急峻な地形をつくり、上部に土塁をもつ箇所が認められるが、ここから西が二の丸と思われる。ここは、西から東にむかって勾配のゆるい斜面を作っている。ここはかなり広い面積を占めていることなどから、武士の調練所としてつかわれたものと思われる。西南隅にある高まりは物見台的役割を果した場所とも思われる。

そしてこの館の西端は、そのまゝ西の山地に続くため、ここを切断し土塁を築き、外敵に備えるといった構造を示しているものと思われる。

東北自動車道は、この館の西部を斜に通過するため、発掘調査を実施し、あわせて館の全地形測量を実施した。

そこで、西端の土塁、空堀の構造をみること、土塁内側に建物跡を検出すること、また、西の空堀を含め、この館の山裾を繞る田形が堀かどうか実態を極めるとともに、土塁の存在の有無を確認することを目的として発掘を実施した。

（1）西土塁と空堀跡（第２図、図版１）

発掘の結果、西の山地と隔絶するため、逆台形状の空堀を作ったもので、この土を利用して幅5.5m　高さ1.8mの土塁を版築したものであることは、土塁の層序を一見して推定できる。ところで、土塁の積土層は凸レンズ状に積上げてはおらず、中心がかたよっているのが認められたがこれは後世、館が廃絶したのち耕作によって削られ堀をうめ整地したものと思われた。空堀の底面は、起伏があり傾斜がかなりきついため、水をたゝえるなどは到底不可能なので、最初から空堀として造られたものであるといえる。なお、この土塁

内側に幅1.5m　高さ30cmほどの平場がみられ、その縁辺に拳大の火山岩塊を積上げた箇所がみられるが、これも、後世に土塁を破壊して造出されたものと思われた。また土塁中央部が一部削平された箇所があったため、何らかの施設あとと考えてここも調査したが、遺構の検出はできず、これまた不明というよりほかない。

（２）館内部の発掘

土塁に接する内側のやゝ平担な畑地の部分に建物跡の存在を予想して発掘したが、ここからは、縄文式土器、弥生式土器（円田式）および土師器、須恵器、常滑系の陶器の細片が数点みつかったほか、円形の鉛製鉄砲玉が一点出土しただけで、時代決定の資料とするにはあまりにも乏しい。勿論、遺構も見当らなかった。

（３）堀跡の発掘（第２図、図版２）

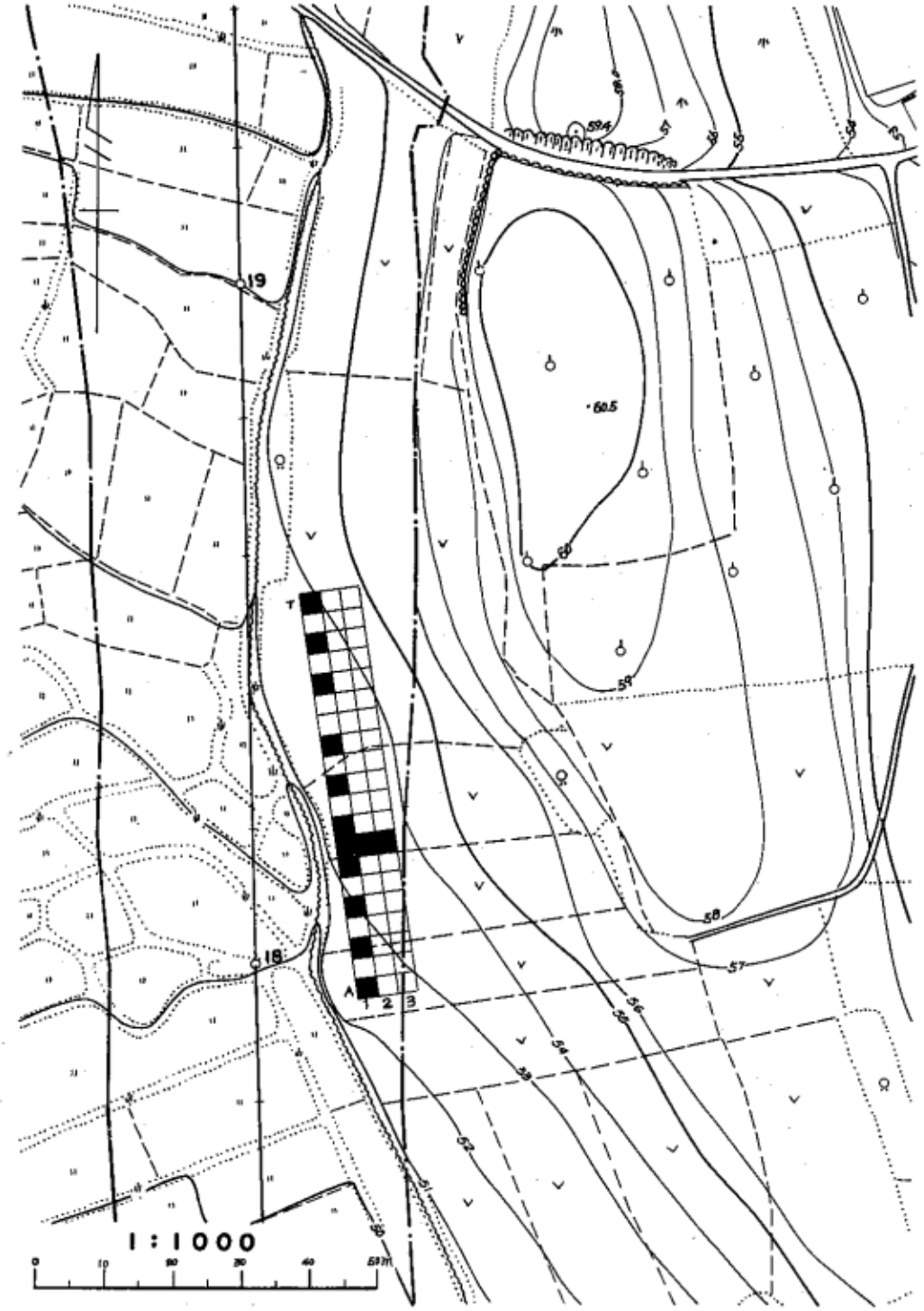
館北側の堀形に残る田面に直交するようにトレンチを設ける。逆台形状に掘り込まれたもので、堀にそって幅5.5mの土塁基底部の残痕が認められた。したがって後世これら土塁の土砂で堀を埋め田を作ったものと想定できた。

以上、発掘した部分は館の一部であるが、館の構造について若干明確にすることができた。築城された年代は文献などからみて中世末から近世初頭の館跡といえるが、今後は考古学上の成果と文献などを対照させながら考証し、研究を進める必要があろうと思われるが、県内の館跡の研究が進んでいない今日、一資料として報告するにとゞめる。

なお、館の地形測量は、日本道路公団の作成した原図をもとにして志間調査員の指導の下で藤波測量調査事務所が補足調査を行ってでき上ったものである。

（志　間　泰　治）

(二)　欠（かけ）　遺　跡



第4図　欠遺跡地形図

欠　　遺　　跡

1　遺跡所在地

宮城県刈田郡蔵王町宮字欠

2　調査期日

昭和45年4月20日～25日

3　調査主体者

宮城県教育委員会、日本道路公団

4　調査担当者

宮城県教育庁社会教育課　技術主査　志間泰治

技師　藤沼邦彦

嘱託　白鳥良一

5　調査参加者

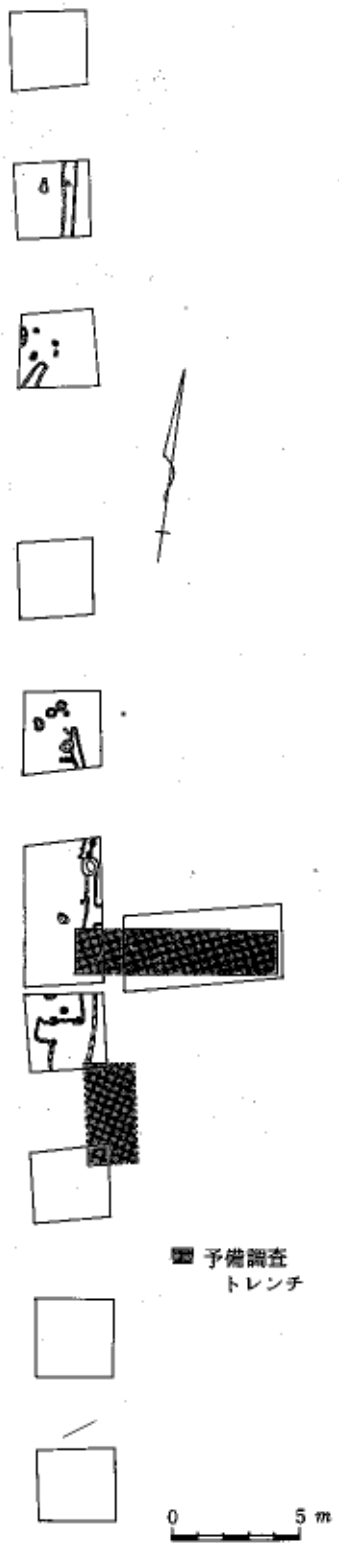
東北大学考古学研究室　　岩本圭輔・加藤道男

6　調査の概要

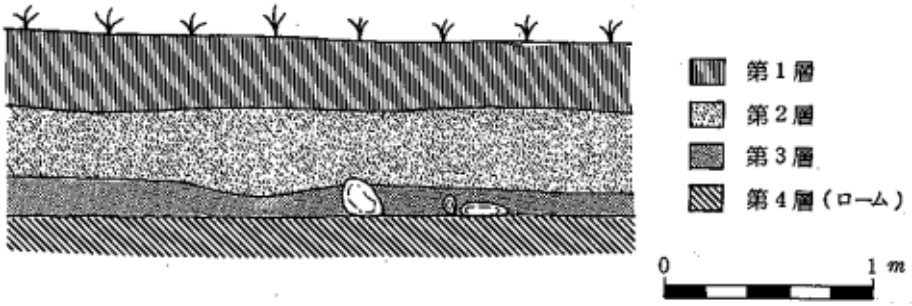
（1）遺跡の立地

欠遺跡は蔵王山の東南麓に位置し、蔵王山麓に源を発して蔵王町宮付近で白石川に合流する松川が形成した河岸段丘上に立地する（第１図）。この河岸段丘は海抜約60m、西側の水田面との比高約10mで、南北に延びる小丘陵となっており、通称「長峯（ながみね）」と呼ばれている。丘陵の東側は一段低い段丘で、水田が開けている（第４図）。

遺跡はこの長峯丘陵の西斜面に形成されたもので、丘陵上の畑地及び果樹園一帯に縄文式土器や土師器の破片が散布している。蔵王町宮の刈田嶺神社はこの丘陵の南端に位置し、神社の北西部には縄文早期の土器を出土する明神裏遺跡がある。また後述の持長地遺跡は欠遺跡の北方200mの地点で、やはり長峯丘陵上に位置し、欠遺跡とはほぼ一連の遺跡となっている。



第５図　欠遺跡平面図



第６図A　欠遺跡層位図（Ｐ区東壁）

（２）調査経過

まず南北60m、東西９mの範囲に３m方眼のグリッドを設定し、13区117㎡を発掘した。Ｐ１区付近での層序は第１層、耕土（約35cm）、第２層黒土層（約30cm）、第３層黒褐色粘土層（約15cm）で３層認められ、表土から約80cmで段丘礫を含む地山に到っている。第２層はパサパサした感じの柔かな層で土質も一定せず、深耕によって攪乱を受けた形跡がある。第３層は粘土質の堅い層で段丘礫を若干含んでおり、地山への漸移層にあたる（第６図A）。遺物は１～３層にわたって土器や石器が断片的に出土しただけである。層序、出土遺物は他の地点でもほぼ同様で、いずれの区にも良好な遺物包含層は認められなかった。Ｈ２、Ｈ３区では試掘トレンチと重複した。

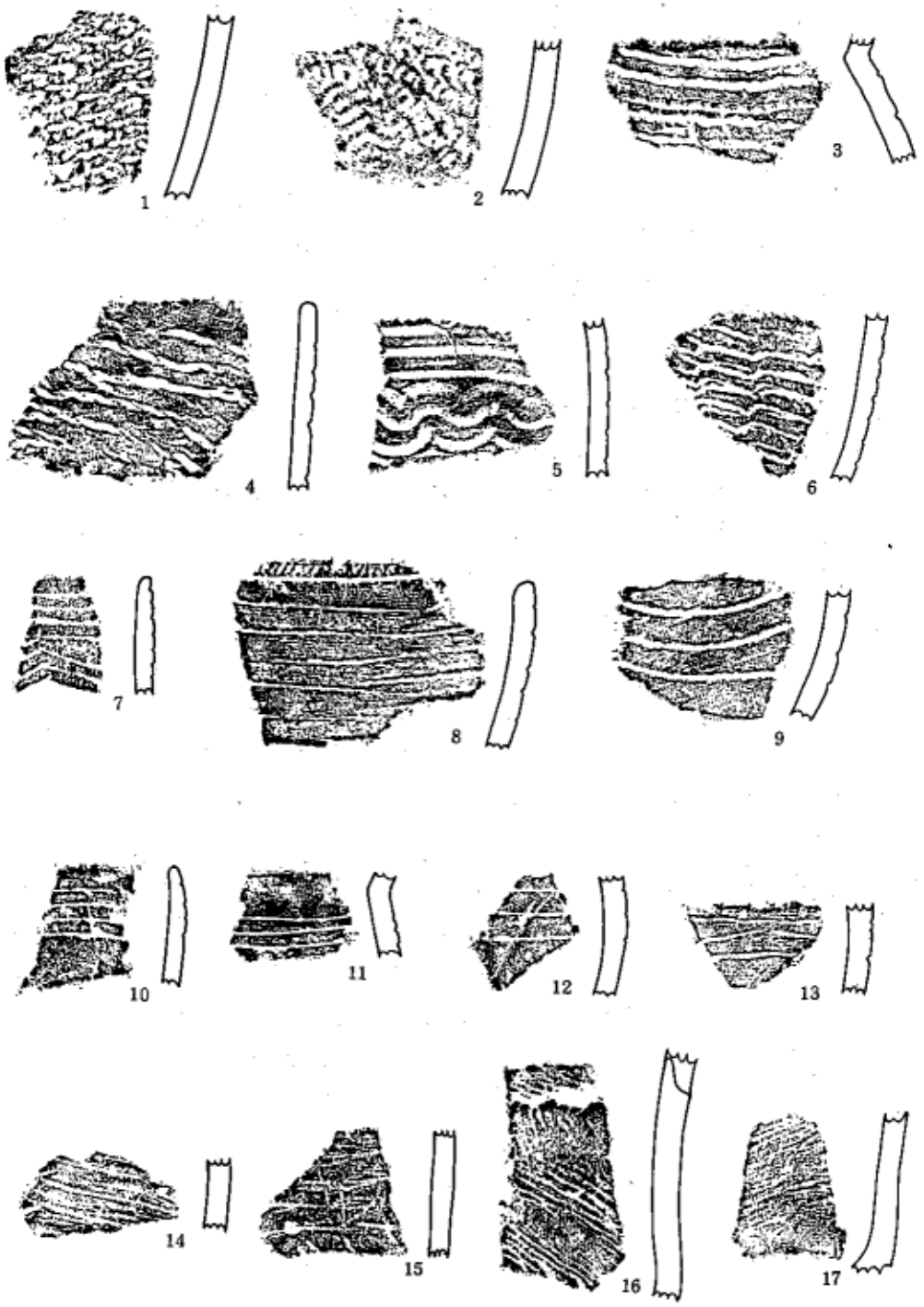
遺構としてはG１、Ｈ１、Ｉ１、Ｋ１、Ｐ１、Ｒ１の各区で地山に掘り込まれた幅約30～40cm、深さ約10～20cmの南北方向に走る溝と、それに関連があると思われるピットが検出された（第５図、図版３下）。この溝及びピットの埋土は第２層の土質に似ており、中から縄文式土器と土師器の小破片が少数出土した。後世のものと思われるが時期、性格ともに不明である。

（３）出土遺物（第６図B、図版４）

全体的に遺物は少なく、縄文式時代前期、中期の土器、弥生後期の土器、土師器、須恵器、石斧片、石鏃、不定形石器などが少数出土しただけである。区や層による遺物の出土状況の違いはほとんど認められなかった。

A、縄文式時代の遺物（図版４）

土器は小破片のみで全体の器形を推定し得るものはほとんどない。大部分のものは胎土に繊維を含み、口縁部や体部に斜行縄文、羽状縄文、ループ文、撚糸文、竹管支、などが施文されている。斜行縄文には単節のものと複節のものが見られるが前者が圧倒的に多い。また羽状縄文の中には結束された原体によるものも少数ある。撚糸文では連続



第6図B 欠遺跡出土土器　1～6．縄文式土器
7～17．弥生式土器

Ｓ字状撚糸文、網目状撚糸文、不整撚糸文などが見られるが、原体については今のところまだ充分な吟味をしていない。竹管文は櫛歯状の施文工具で平行または波状に文様を描いたものや、沈線の中に節をつくっているものがあり、これらの文様は口縁部に集約されている。縄文前期・大木１～２Ａ式に相当するものであろう。

これら胎土に繊維が含まれている土器の他に、繊維を含まず、太い沈線で囲まれた磨消縄文をもつ土器が少数見られた。小破片のため器形や全体の文様構成はわからないが中期大木９式に相当するものと見られる。

石器では石斧、石鏃、不定形石器などが少数出土した。

Ｂ、弥生時代の遺物（第６図Ｂ７～17）

弥生式土器が30点ほど出土した。いずれも小破片で、口唇部に縄文がつけられ、体部には条の細い縄文や撚糸文、細く鋭い沈線による同心円文や平行線文などが施文されている。頚部に綾絡文がめぐるものもある。後期の円田式に併行するものと考えられる。

Ｃ、歴史時代の遺物

土師器　出土遺物の中で最も多い。坏では回転糸切底をもち、内面はヘラミガキされ、更に黒色化されているものが多く見られる。高台のつくものもある。甕は長胴形のもののようで、多くは胎土に石英が多量に混入している。

須恵器　全部で26点で、坏、甕、長頚壺などの破片である。破片が小さいため詳細はわからない。

その他この時期のものと思われる砥石が１点出土した。

7　ま　と　め

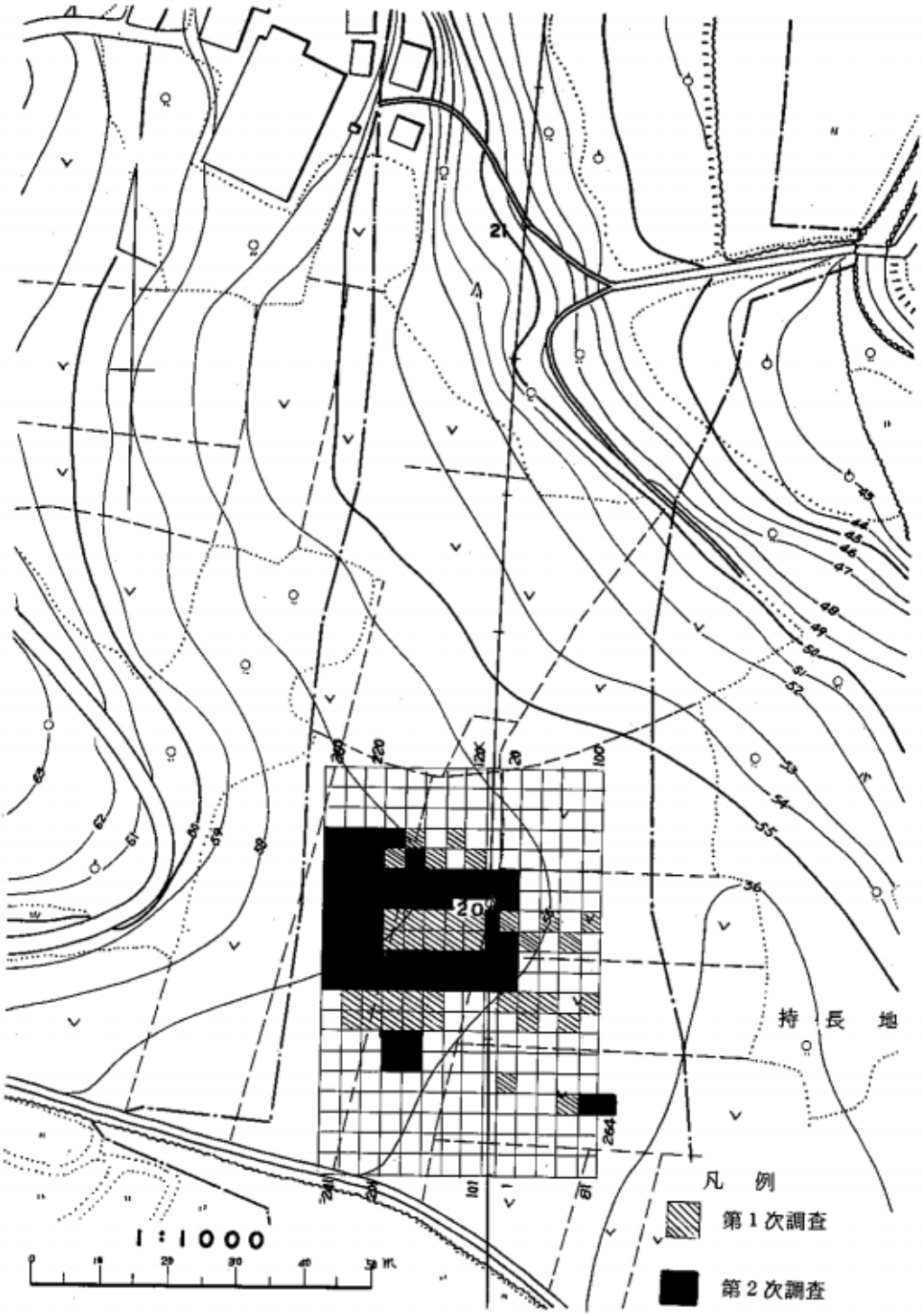
（1）欠遺跡は大部分が深耕によって地山直上まで攪乱されており、良好な遺物包含層は認められなかった。

（2）一部で地山に掘り込まれた溝とピットが検出されたが、時期、性格は不明である。

（3）出土した遺物は縄文前期大木１～２Ａ式、中期大木９式、弥生後期円田式、土師器、須恵器などの土器、石斧、石鏃、不定形石器、砥石などで全体的に数は少ない。

（白　鳥　良　一）

(三)　持長地遺跡（もつちょうじ）



第7図　持長地遺跡地形図

持　長　地　遺　跡　（第２次調査）

１　遺跡所在地

宮城県刈田郡蔵王町宮字持長地

２　調査期日

昭和45年4月26日～5月17日

３　調査主体者

宮城県教育委員会、日本道路公団

４　調査担当者

宮城県塩釜女子高校教諭　　後藤勝彦

宮城県教育庁社会教育課　技術主査　志間泰治

５　調査参加者

東北大学講師　　坂田　泉

宮城県教育庁社会教育課　　藤沼邦彦　白鳥良一

宮城教育大学考古学研究会　　高橋守克・遊佐五郎・土岐山武・千葉宗久・佐藤好一・太田昭夫・七戸貞子・結城紀子・佐藤真理子・跡辺節子・板橋とし子・後藤福子・福永喜美子・石塚恒子・宇田川鈴枝

東北学院大学　　堀野宗俊

立正大学　　阿部恵

６　調査の概要

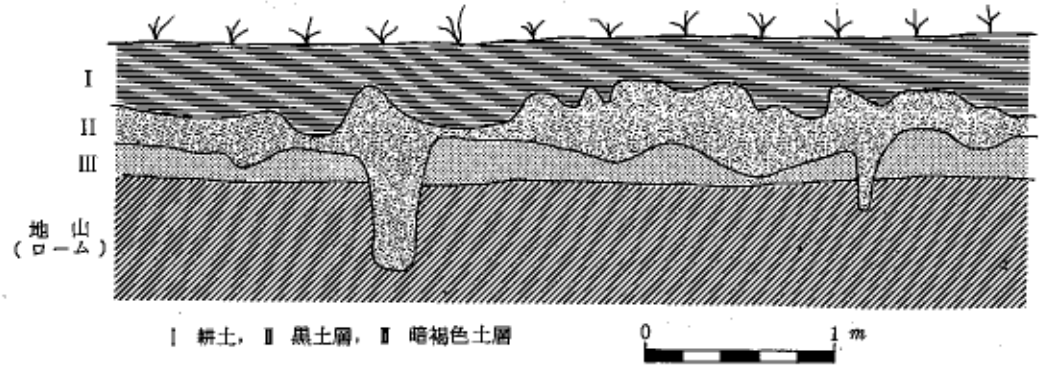
（１）遺跡の立地

持長地遺跡は蔵王山の東にある青麻山（標高799m）から東にのびる丘陵の突端部に位置している。遺跡付近は東西約80m、南北約100mの平坦地になっており、東側は南にのびる長峯丘陵に接している。遺跡の南は谷間を利用した水田が開け、北は急に傾斜して一段低い段丘に接している（第１図）。

持長地遺跡の南約200mには前述の欠遺跡があり、また遺跡の西、丘陵頂部には通称「山家（やんべ）館」と呼ばれている館跡がある。

（２）調査経過

持長地遺跡は昭和45年3月に第１次調査が行なわれた。その結果道路敷中心杭の西側の地域で上層と下層から建物跡らしい柱穴遺構が発見された。しかしこの段階で調査が打切られたため、第２次調査を実施することになった。



第８図　持長地遺跡層位図（第Ⅳグッド南壁）

今回の調査は主として柱穴遺構の性格を調べることと、未調査区域の遺構の確認を目的に行ない、540㎡を発掘した（第７図）。

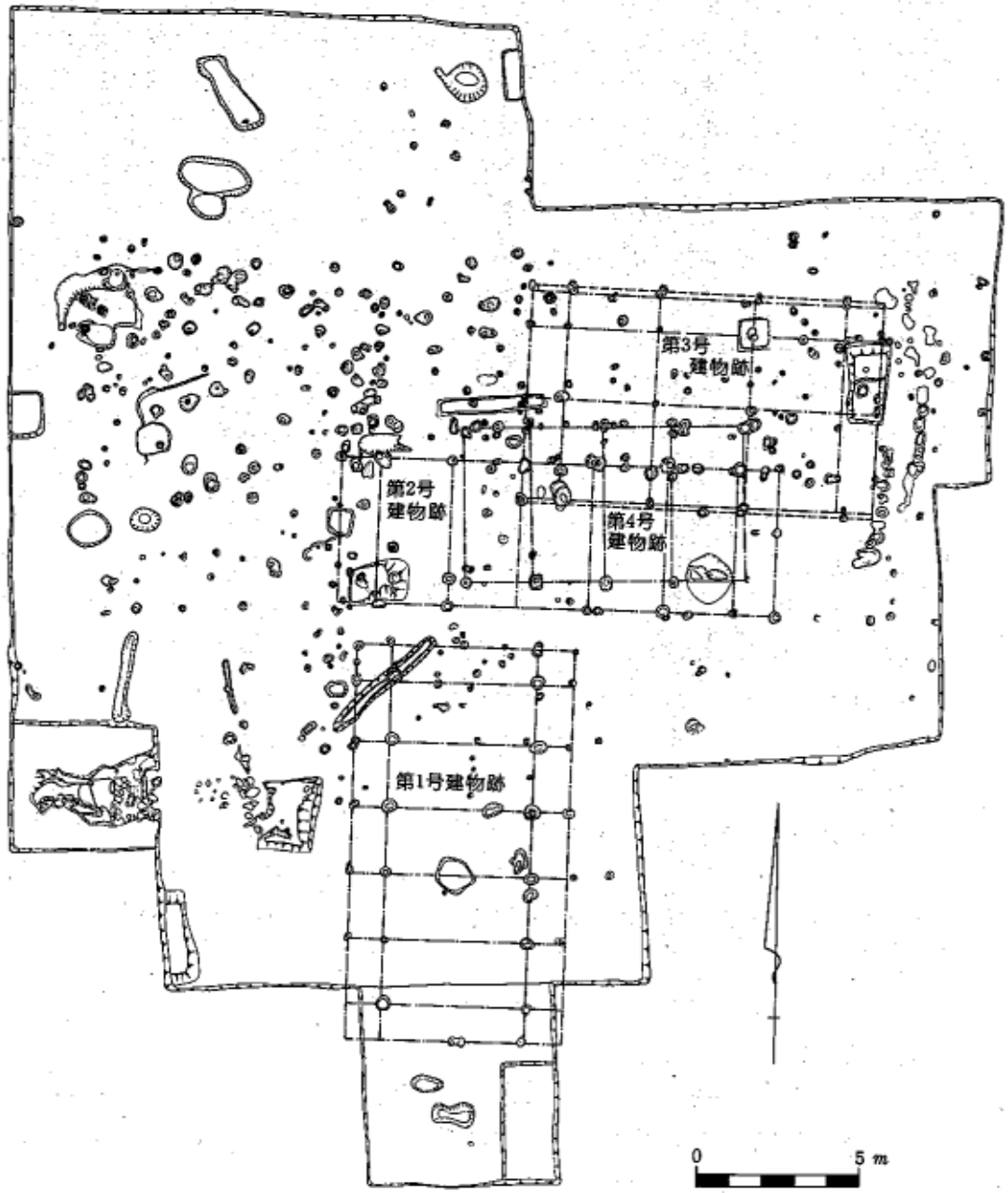
まず第１次調査で検出された柱穴遺構の広がりを見るために遺構が検出された区を中心に発掘区を四方に拡張した。この地区の基本的な層序は、第１層耕土、第２層黒土層、第３層暗褐色土層で地山のローム層に達している（第8図）。地山が北から南へ約５度、西から東へ約３度傾斜しているため、層の厚さは地点によって異なる。

第１次調査で上層（第２層）に見られた柱穴状のピット群は今回の調査でも若干検出したが、耕土直下にあるため攪乱がはげしく性格を明らかにすることはできなかった。

ローム面で検出された柱穴遺構は東西約30m南北約40mの範囲にわたるピット群となっており、300個以上のピットが検出された（第９図）。またこれらのピットは第３層上面からロームに掘りこまれていることも確認された（第８図）。しかし第３層は暗褐色土層で第２層の土質と似ていてピットの検出がむずかしいため、本調査ではピットはすべてローム面で把えた。

ピット中には第２層の土が落ちこんでおり木炭片を含むものも多い。形は円形のものが多く、方形のものも若干見られた。大きさは15～50cm、ローム面からの深さ10～80cmで、大小、深浅さまざまであるが、概ね地山の高い部分では深く、低い部分では浅い。ピットに半分落ち込んだ形で中世の常滑系の陶器が発見され（図版７－１）、ピット内から縄文式土器や内黒土師器の小破片、刀子、鉄鈴、炭化した粟などが出土した。

これらのピットを検討した結果、あるものは規則性をもち、それが建物のプランを示すことが判明し、建物跡が４棟確認された。



第９図　持長地遺跡平面図

またピット群の西側で東西約10m、南北約３mの範囲に舟底形をなした酸化鉄の堆積層が見られ、中に石が数個不規則な状態で落ち込んでいた（図版７上）。

第１次調査でピット群の東の地区でもロームに掘り込まれたピットが２個検出されていたので、これを追求するため東側に２区拡張した。浅いピットが２個発見されたが、これが建物跡と関連があるかどうかはわからなかった。

（２）発見遺構

掘立柱建物跡（第９図、図版６）

発見された４棟の建物跡の規模、構造はほぼ類似し、長方形プランの身舎（もや）に庇（ひさし）がついている。柱穴はすべて円形で径20～40cm、深さ20～50cmである。これらの建物跡については現在実測図の整理検討を行なっている段階なのでここでは略述するにとどめる。

第１号建物跡

発掘区の中央から南の部分で検出された建物跡である。東西２間？（4.4m）×南北５間（10m）で柱間は桁行、梁間ともに1.9～2.2m（ほぼ７尺）である。身舎には四面に庇がめぐっている。

第２号建物跡

第１号建物跡の北側に検出された建物跡である。東西５間（10.9m）×南北4.5mで、柱間は桁行が2.1～2.2m（約７尺）のほぼ等間である。梁には中間に柱穴が見られない西、東の２面に幅1.2m（４尺）の庇がついている。第２号建物跡は西側で第１号建物跡とＬ字形に近接し、東の部分では第３号建物跡、第４号建物跡と重複している。

第３号建物跡

第２号建物跡の北東部で検出された建物跡で、一部第２号建物跡、第３号建物跡と重複している。東西３間（8.5m）×南北２間（5.3m）で柱間は桁行が約2.8m（約9尺）の等間であるが梁間は南側が3.1m（約10尺）、北側が2.2m（約７尺）で対称でない。東、西、北の３面に幅1.1～1.2m（約４尺）の庇がついている。

なおこの建物跡は柱穴が複合し、建て替えがなされた形跡がある。

第４号建物跡

第２号建物跡に大部分が重複し一部が第３号建物跡に重なって検出された。東西４間（8.5m）×南北4.7mの建物跡で、柱間は桁行が約2.1m（７尺）。梁には中間に柱穴が見られない。庇はつかない。

（３）出土遺物

Ａ、旧石器時代の遺物

第３層とローム層の境目付近からナイフ形石器が１点出土しただけである（図版７－２）。

B、縄文時代の遺物

出土した縄文式土器の中で最も古いものは早期末素山上層式に相当する貝殻条痕文土器である。量は少ない。

また胎土に繊維を含み、羽状縄文が施文された前期初頭の土器も少数出土した。

出土遺物の中で最も量の多いのは中期後半の大木９式、大木10式の土器である。完形品や大形の破片がないので器形はわからないが、体部に懸垂文や磨消縄文が施文され、口縁部に渦巻文などの装飾文様が施されているものがある。わずかではあるが後期初頭の土器も出土している。

石器としては石鏃、石匙、石錐、石斧、石皿、くぼみ石などが出土したほか、玦状耳飾が１点発見された。

玦状耳飾（図版７－３）は乳白色を呈した堅い石質で平面形は円に近く、断面はカマボコ形をしている。長さ3.6㎝、巾3.6㎝、厚さ1.2㎝で、形態から見て早期末か前期初頭の土器に伴った可能性が強い。

C、古墳時代の遺物

栗囲式に相当すると思われる体部に段をもつ土師器坏の破片が１点見られる。

D、歴史時代の遺物

土師器

歴史時代の遺物の中では最も量が多い。大部分は坏で中でも内黒糸切底のものが多く見られる。甕の破片は非常に少ない。

須恵器

坏や甕の破片が少数出土しているが良好な資料となるようなものは殆んどない

中世の陶器

中世のものと思われる陶器が若干出土している。大部分は破片が小さく、全体の器形のわかるものは少ない。第３号建物跡東側の柱穴に半分落ちこんだ状態で発見された大形甕の破片は口縁部がN字状に屈曲し、中世末に知多半島周辺で盛んにつくられた常滑系の陶器に酷似している。

その他歴史時代の遺物として鉄斧１点、刀子１点、鉄釘１点、鉄鈴２点、炭化した栗などが出土した。鉄斧は第３層上面から出土したものであり、他の遺物はいずれも柱穴中に落ちこんでいたもので掘立柱の建物跡と密接な関連を持つ遺物である。

７　ま　と　め

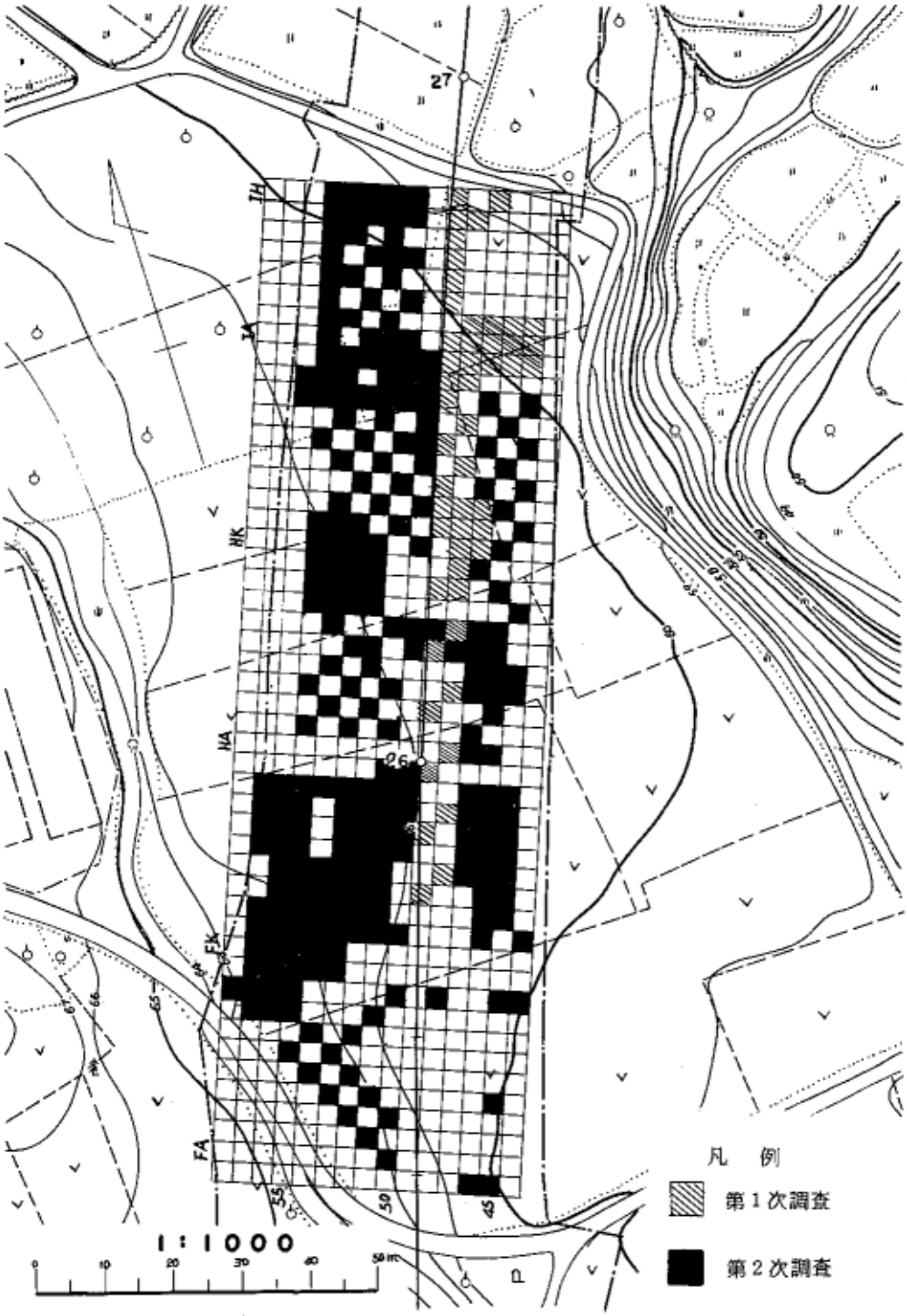
持長地遺跡は旧石器時代がら中世に至るまでかなりの長期間にわたってたびたび生活の場として使用されており、特に中世には掘主柱の建物があったことが今回の調査で明らか

になった。掘立柱の建物跡は現在のところ４棟確認されており、庇がつくものもある。

このような中世の建物跡が発掘された例は県内では数少なく、中世研究の上で貴重な資料である。

（白　鳥　良　一）

(四)　二屋敷（にやしき）遺跡



第10図　二屋敷遺跡地形図

二　屋　敷　遺　跡　（第２次調査）

１　遺跡所在地

宮城県刈田郡蔵王町宮字二屋敷

２　調査期日

昭和45年5月1日～7月31日

３　調査主体者

宮城県教育委員会、日本道路公団

４　調査担当者

宮城県教育庁社会教育課　技術主査　志間泰治
技師　藤沼邦彦
嘱託　白島良一
東北大学大学院博士課程　　林　謙作

５　調査参加者

東北大学考古学研究室　　西脇俊郎・小井川和夫・八巻正文・平口哲夫・木本元治・福田友之・岩渕康治・加藤道男・岡村道雄・小林博明・佐々木いく子・千葉英一
東北大学教養部　　黒川利司・笹原百合子・鈴木喜博
明治大学　　堀越正行・小田野哲憲
国学院大学　　鈴木克彦
福島大学　　日下部善巳
弘前大学　　金子正夫

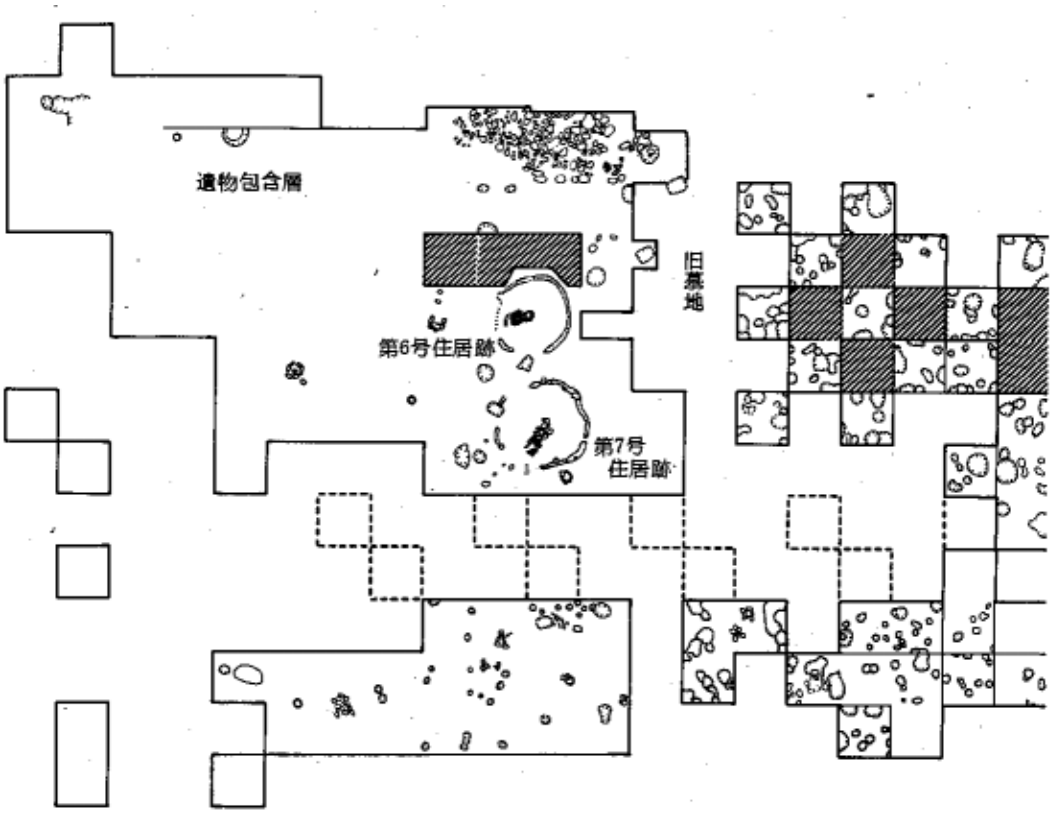
６　調査の概要

（１）遺跡の立地

二屋敷遺跡は、蔵王山の東南麓に位置し（第１図）、蔵王山麓に源を発して蔵王町宮付近で白石川に合流する松川によって形成された河岸段丘上にある。二屋敷遺跡の立地する段丘は、海抜約60m、段丘下の水田面との比高12mで、段丘の北および東は侵蝕谷によって限られ、南および西は一段高い段丘に接している。なお段丘上面には東南方より西北方に向って浅い埋没谷が入り込んでいる。遺物の分布は、北斜面から西南斜面にかけて広がっている。二屋敷遺跡の位置する段丘よりも更に高い段丘上に点々と縄文､弥生時代の土器片が散布する遺跡がある｡これらの中で、二屋敷ほど広い平坦面をもつ立地条件のよいところはみられない。

（２）調査経過

第二次調査の目的は次の四点に集約される。



第11図　二屋敷遺跡平面図

① 遺跡範囲の確認

② 集落立地の正確な理解と把握

③ 未発掘区域の遺構検出と精査

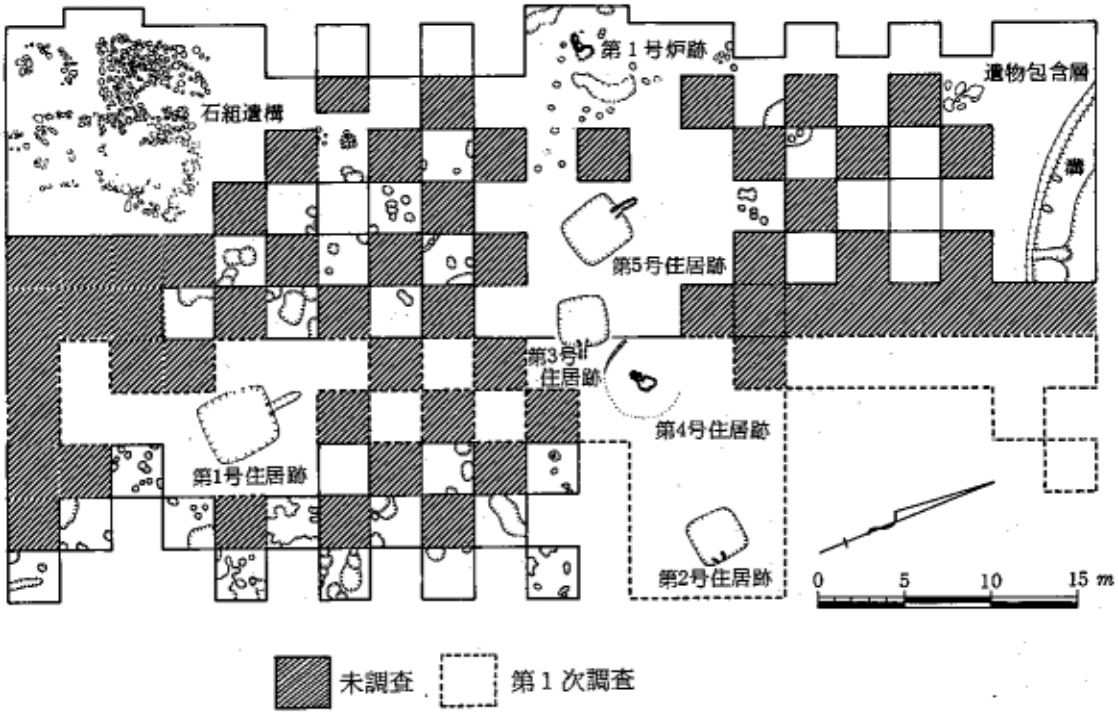
④ 第一次調査の補正

この目的に向って、第一次調査の成果を受け、遺跡中央部、北部、南部の順に約147m×42mの範囲で2196㎡の発掘調査を行った（第10図）。その結果、道路敷内での遺跡の範囲はＩＨとＧＨの約120mの間にほぼ限定され、その中に縄文時代、平安時代の遺構、遺物が多数検出された。その他、近世の墓拡の調査も行った（第11図）。

Ａ　旧石器時代の遺物

二屋敷遺跡に於ける最古の遺物は、旧石器時代のものと思われるチョパーとナイフ形石器（図版19右上）である。わずか２点だけであるので今後の研究が必要であろう。

Ｂ　縄文時代の遺構と遺物



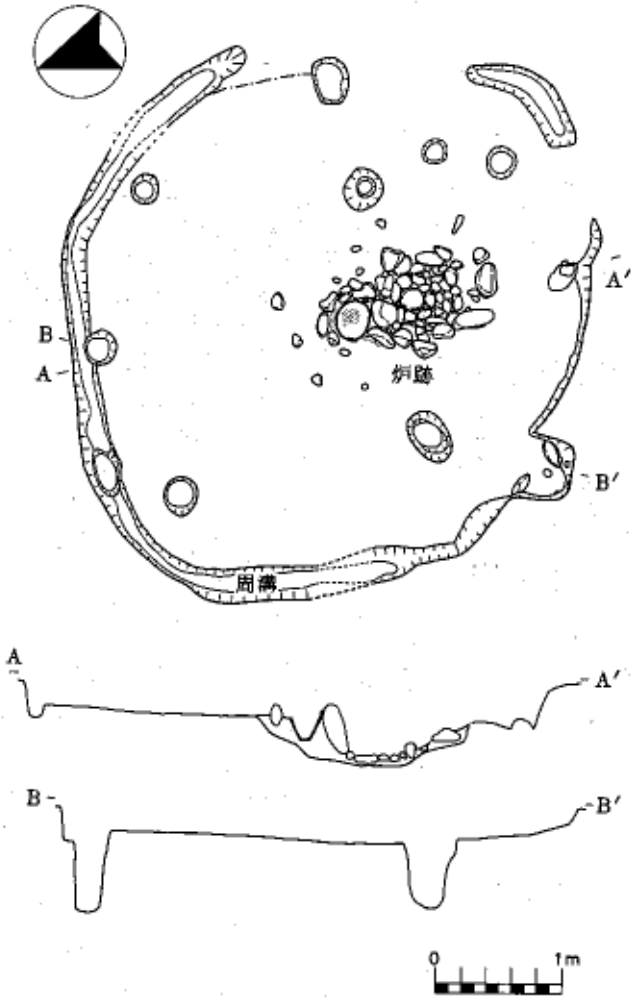
縄文時代の遺物は早期、中期、後期にわたるが、早期の遺物はごく少量で包含層、遺構を伴わない。大部分の遺物は中期末から後期中葉の時期のものである。この時期の遺構（包含層を含む）は、ある程度群として幾つかのブロックにわかれて存在する（第11図）。

①良好な包含層が存在する地区（図版12）。北斜面と南斜面である。北斜面では後期初頭の遺物と東西にはしる溝（後期初頭より新しくはない）が検出された。溝は集落の北限を示すものかも知れない。南斜面は後期初頭の遺物を中心に、中期末の埋甕２個と後期初頭の石組炉１個が発見された。包含層は三層に分れるが、ほぼ同一型式に属する。但し、南斜面の包含層の一部は一段上の平坦地の集落から投げ捨てられて形成された可能性がある。

②大規模な石組遺構群が存在する地区（図版11）。中央部の西端にある。長径約９mの石組を中心に、１m前後の石組が幾つか存在する。石組群が密接していてひとつの石

組と他の石組との境が明確でなく、単位として把えにくい。埋設土器や地下にピットを伴うものなど形態としては変化に富む。中期末から後期初頭にかけてのものである。

③住居跡と炉がまとまって存在する地区（図版８・９）。石組遺構群のある地区と南斜面の包含層のある地区との間にはさまれる。ここでは住居跡でプランのわかったものが２軒と単独の炉跡が６個検出された。住居跡はほぼ円形のプランを示し、土器を埋設した大きな複式炉をもつのが特徴である。時期は中期末（大木10式）に属する。単独出土の炉跡は単式のものである。住居跡の面よりも上の黒土層中に発見されるものが多く、本来は住居跡に伴うものであったかも知れない。後期初頭に属するものが大部分である。



第12図　二屋敷遺跡第６号住居跡

④群としてまとまらず、点在する炉跡（図版10上）・石組（図版10下）・埋甕（図版13）がある。特に埋甕は合計して約10個あるが、群としてまとまって存在するという傾向はないようである。底部に故意の穿孔があるものが２例あるが、埋甕のすべてが同一の性格をもつかどうかは疑問がある。時期は中期末と後期初頭に属する。その他、性格不明のピット群の存在も目立つ（図版10上）。　（藤沼邦彦）

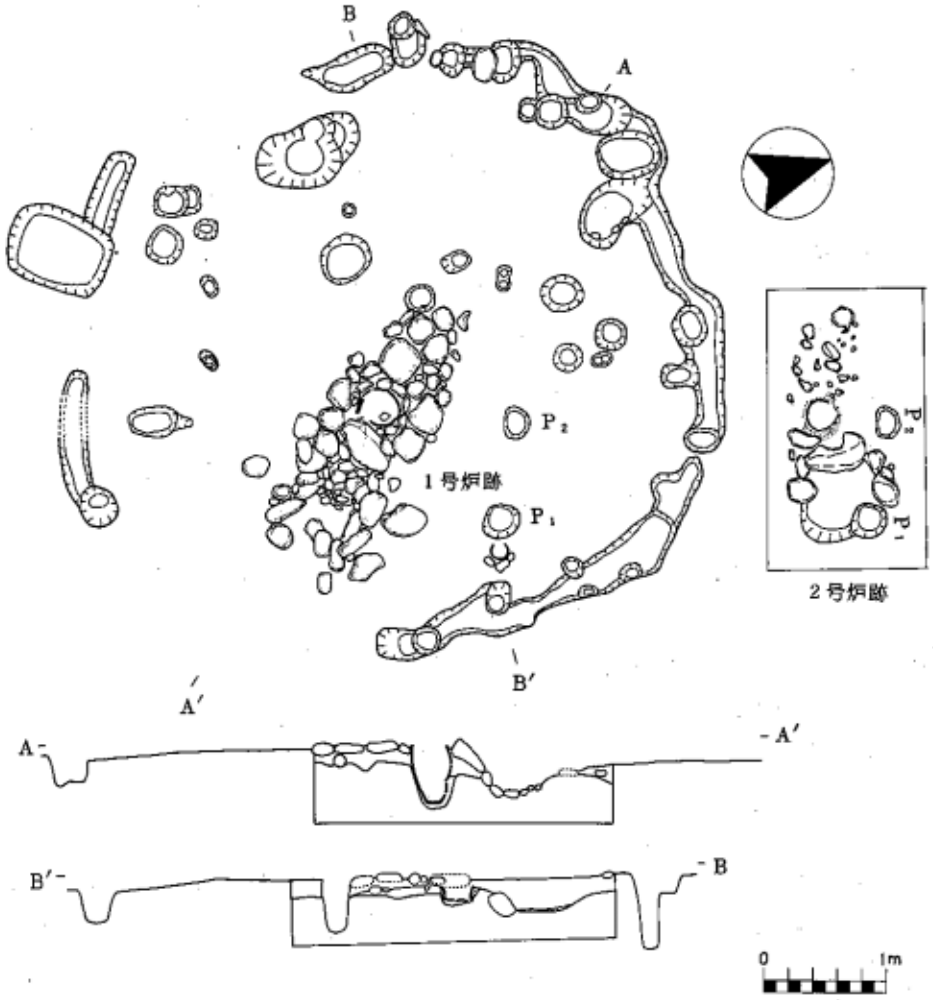
第６号住居跡（第12図、図版８中）

直径約4.1～4.3mのほぼ円形のプランを有する竪穴住居跡で、炉の中軸線は南北線上を通る。黒色土層を掘りこんでつくられているため、壁の判別は不明確であるが、周溝が存在するため、ほぼ正しく把握できる。床面はかたくたたきかためられ、薄い黄色の粘

土による張り床の形跡が認められる。この黄色粘土は住居跡中央部ではさほど顕著でないが、周縁部には比較的厚く残っているため、その存否によって周溝の検出は明瞭になされた。周溝は幅20cm内外、床面からの深さ約10cmのもので住居跡北側半周、東南隅に見い出された。南側では数個の河原石によって遮られ、又東側では黄色粘土が存在しないため、検出が不可能であった。周溝の埋土は、床面に比べてやゝ軟かい黒色土で、底に黄色粘土の落ちこんでいる部分もある。柱穴とみられるピットは中軸線をはさんで東西に約２m間隔で各々二個づつみられるが北東のピットがいくぶん東にずれているため正しい方形とはならない。各ピットの底面における直径と、床面からの深さは、北西ピット20cm・50cm、南西ピット18cm・50cm、北東ピット14cm・36cm、南東ピット12cm、39cmである。他に北及び西端に深さ約27cm、30cm、南東ピットの南に約20cmのピットが検出されている。特に北端ピットはその配置上、前記の４ピットと共に柱穴の一部をなす可能性も考えられる。炉跡は住居跡中央部やゝ南側に構築されている。床面から40cm程掘りくぼめたいわゆる複式炉で、南側に石組部分、北側に石で囲まれた埋甕部分をもちその境には長さ40cm程のだ円形河原石がたてに埋めこまれている。石組部分は長径１m短径80cmの楕円形で周縁を径20cmほどの河原石で囲み、壁、底面にも小さな河原石をはめこんだ念入りなもので底石上面での深さ約30cmである。又使用された石は焼けて赤変している。埋甕は径30cm、器高は口縁部が破損しているため不明であるが、現高24cmである。この炉跡の長さは1.4mである。焼土は埋甕内部および周囲、石組部分北部に認められ厚さは４～６cmである。又南西部に周溝がとぎれ幅約40cmの黄色粘土が周溝から外側に約25cm、床面から７cm程の傾斜をもって張り出す部分があり出入口と考えられる。この住居跡の時期については、住居跡埋土及び床面から出土した土器によって中期末（大木10式期）と考えられる。

第７号住居跡（第13図、図版８上）

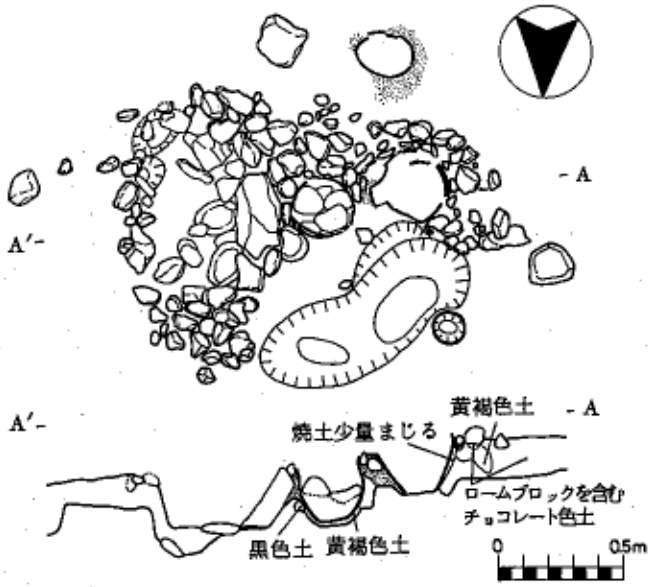
第６号住居跡の東に隣接し、直径5.0～5.3mのほぼ円形のプランを呈し、炉中軸線は北西－南東の線上を通る。第６号住居跡同様壁の存在は不明確であるが、周溝によりプランの大略を把握でき、又床面も第６号住居跡よりはやゝ厚い黄色粘土の張り床によって識別できるが、さほどかたくはない。床面は水平ではなく、中央部で周縁部より４cm程高い。周溝は幅20～30cm、深さ約10cm程で、円形に北側を半周し、南側では部分的に検出された。周溝内には10～20cmの深さでピット状のくぼみが多数みられ、円形といってもかなりの凹凸がある。又住居跡内部にも第６号住居跡にくらべ多くのピットが検出されたが、配置、深さなどから、炉中軸線に沿って北側に２個（1.8m間隔で深さ52cm、56cmのピット）南側に２個（1.8m間隔で深さ45cm、52cmのピット）存在する４個のピットが



第13図　二屋敷遺跡第７号住居跡

一応柱穴と考えられる。両者は2.8m離れて対応している。尚、北西ピットは２個のピットが切りあったものであるが、先後関係は明らかでない。又南西ピットの径が６cmと極めて小さい点に若干の疑念が残る。他に柱穴と考えられる深さのピットが周溝近くに存在する。炉跡（１号炉）は南側に石組部分、北側に埋甕部分をもつ複式炉で平面形は長径約2.5m、短径約1.0mの楕円形を呈し、長径中央部で両者は50×30cmの河原石で仕切られている。石組部分は中央部で20cm程掘りくぼめて小河原石をしきつめ、周囲に大きめの河原石を配し南側は開く。埋甕部分は径30cm、現高50cmの土器の周囲を扁平な大河原

石と小河原石を用いて水平にしきつめ石組部よりもむしろ念入りにつくられているといえる。このように第７号住居跡内の１号炉跡は第６号住居跡の炉跡とは大きさの点でも形態の点でも様相を異にする。又、北東部周溝より約40cm内側に３個の小石に囲まれた径14cmの小埋甕が発見されている。ところで１号炉跡の断面図作成のためこれをとり除いたところ、下から中軸線南側が若干東に寄って２号炉跡が発見された。２号炉跡も長径1.9mほどの複式炉である。石組部分は周縁を河原石で囲っただけのものでる。東側を南東部柱穴が少し切っている。底、壁部は焼けてかたくしまり、又木炭がはりついた状態で検出されたことから、石が抜きとられたのではなく、当初から敷かなかったものと考えられる。埋甕は径30cm、現高20cmで、周囲には小礫が雑然と配置されているが、これは１号炉跡構築の際破壊された可能性が強い。両者の間には焼土が薄く存在するだけで、他の間層はない。この２号炉跡は第７号住居跡と重複した住居跡に付随するものと考えられるがそれに伴う柱穴、周溝等は明らかでない。時期は両者とも出土遺物により縄文中期末の大木10式期のものに相当し、極めて近接した時期の重複と思われる。

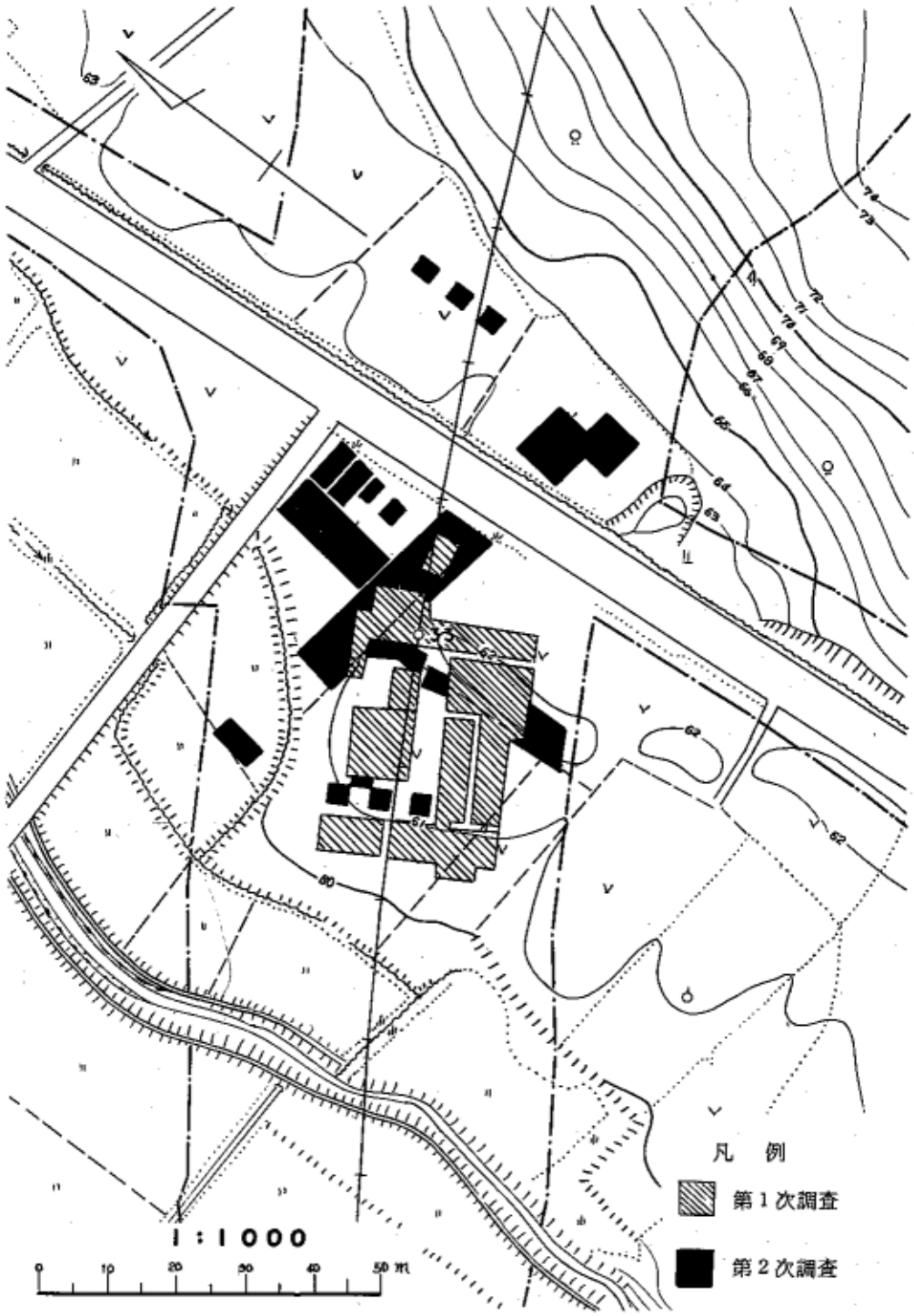


第14図 二屋敷遺跡第１号炉跡

第１号炉跡（第14図、図版８下）

長径1.5m、短径１m程の、周囲を小礫で囲んだ複式炉である。石組部分と埋甕部分は60×50cmの板石で区別される。石組部分周囲を礫で囲んでいるが中央くぼみに敷石はみられない。これは状況から抜きとられていると考えられる。深さ約40cmである。埋甕部分には２個の埋甕がたてに並んで配されている。南側の埋甕には内部に石がつまっており、北側の埋甕は底部がない。石は後に落ちこんだものと解されるもので、両埋甕に先後関係は考えられず、断面にも乱れはない。又南側に約50cm離れて石組を伴わない埋甕が検出されている。炉の埋甕に使用されている土器は大木10式である。この炉跡を伴う遺構については周囲が木や作物の根によって相当荒されているので明らかでない。

（五）　下原田遺跡
しも　はら　だ



第17図　下原田遺跡地形図

下　原　田　遺　跡　（第２次調査）

１　遺跡所在地

宮城県刈田郡蔵王町宮字下原田

２　調査期日

昭和45年4月5日～4月15日

３　調査主体者

宮城県教育委員会　日本道路公団

４　調査担当者

東北学院大学助教授　　加藤孝

宮城県教育庁社会教育課　技術主査　志間泰治

５　調査参加者

宮城県教育庁社会教育課　　藤沼邦彦・白鳥良一

東北学院大学考古学研究部　　野崎準・中川良一・渡辺泰伸・佐藤秀穂・伊藤源治・中村光一・結城慎一・加藤光夫・川村正・小玉敏広・熊谷出

宮城教育大学考古学研究会　　小井川和夫・土岐山武・千葉宗久

６　調査の概要

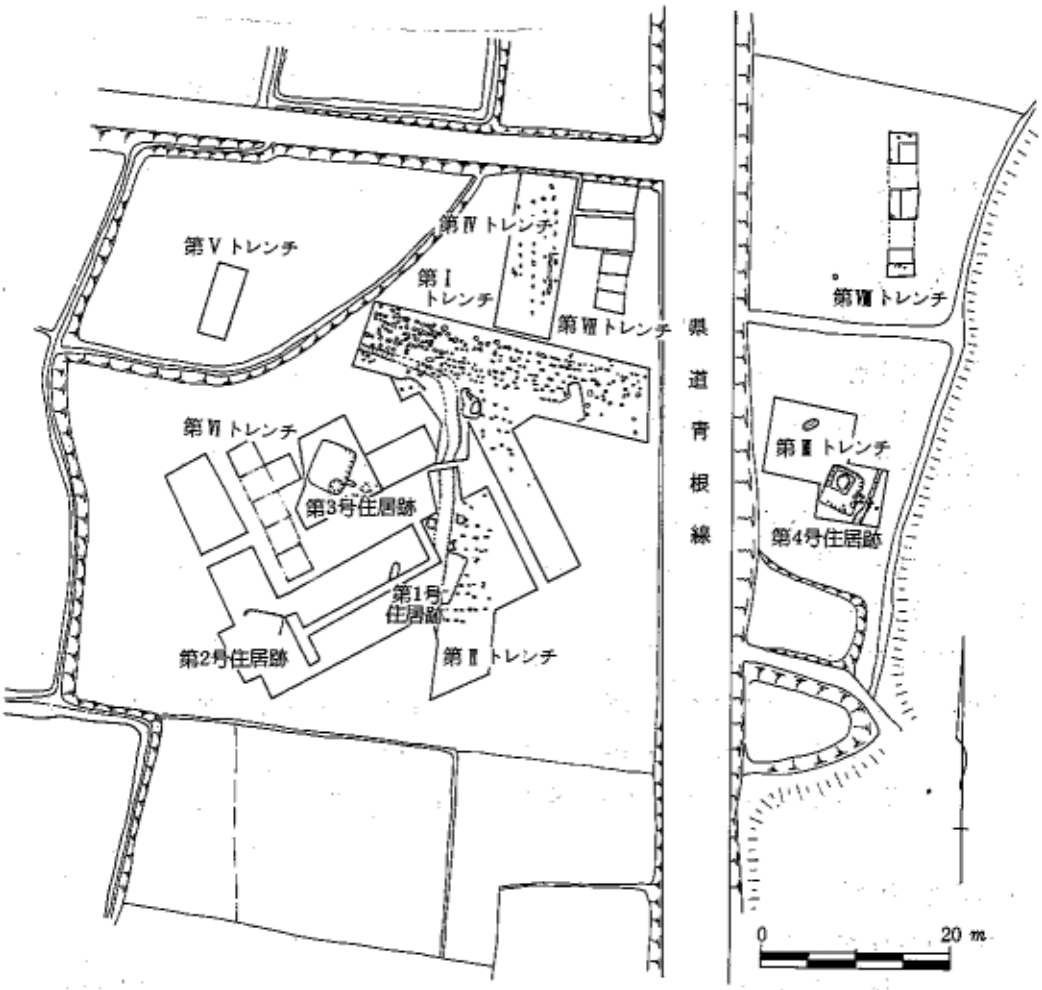
（１）遺跡の立地

下原田遺跡は、蔵王山麓に源を発する松川によって形成された河岸段丘上にある（第１図）。この段丘は附近の水田との比高３～４mという低位なものである。背後に小丘陵をもち、前面（西）には水田が開け、目前には青麻山の雄姿がそびえたつ。土器の散布する面積は約50×100mある。遺跡の中央をつらぬく県道（宮－青根間）によって東西に分断される（第17図）。

（２）調査経過

第２次調査の目的は、第１次調査の際に検出された柵列状ピット群の確認と未調査区域の遺構検出にあった。

この目的にそって、柵列状ピット群の確認のために、第１次調査の旧トレンチを中心に、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ～Ⅶトレンチを、未調査区域の遺構検出のために、第Ⅲ・Ⅷトレンチを設けた（第18図）。そのほか、第１次調査の際に検出された第３号住居跡の補足調査



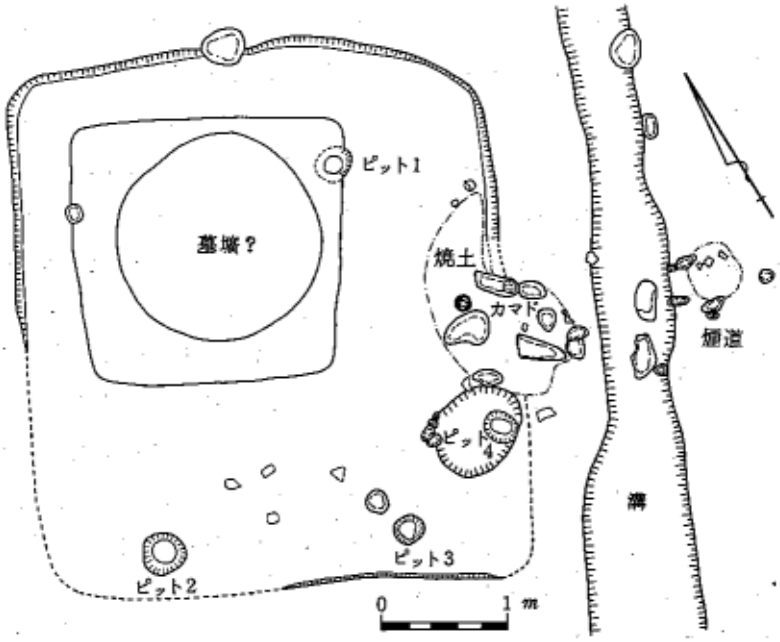
第18図　下原田遺跡平面図

と発掘終了後の工事現場での立会調査とを行なった。

その結果、柵列状ピット群、住居跡、炉跡、焼土などの遺構と土師器、須恵器、鉄製品、炭化米、それに少量の縄文式土器片と石鏃の出土がみられた。以下、各トレンチの概略を述べる。

第Ⅰトレンチ（図版22上）

表土を20～25cmほど下げると暗褐色土層の中に砂っぽい黒土の落ちこみが多数検出された。このピットの形態は、様々で、方形になるもの、楕円形になるもの、溝状に細長くのびるものなどがあるが、方形に近いものが大部分である。暗褐色土層も落ちこみの黒土も、ともにやわらかく色調も似ているので、ピットの輪郭および壁をおさえるのが



第19図　下原田遺跡第４号住居跡

困難であったものが多い。ピットのなかには木の根が検出されたものもある。しかしピット群としては東西に長くのび、５～６列に並んでいるようにも思われる。遺物は須恵器と土師器の細片が若干出土したにすぎない。

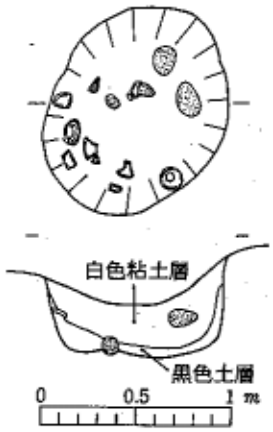
第Ⅱトレンチ

表土下20cmほどでローム層に達した。遺構、遺物の発見はない。

第Ⅲトレンチ

ピット群の東側の地点に設けた。黒土の覆土が非常に厚く60cmになる。この下に黒褐色を呈した層があり、楕円形（80×45cm）の炉跡状遺構があらわれ、炭化した木片が出土した。遺物は少なく、土師器片が若干出土したにすぎない。またトレンチの東南隅に溝状の落ちこみがあるので、これを追求するために拡張したところ、竪穴住居跡が１軒検出された。この住居跡を第４号住居跡とする。

第４号住居跡は、遺構確認面としての暗褐色土層と埋土の黒土層との区別が困難で、壁は部分的にしか検出できなかったが、ほぼ東西3.7m×南4.2の隅丸の方形プランを呈すると推定される（第19図、図版20下）。確認できた部分での壁の床からの高さは６cmである。床面は中央部からカマド周辺にかけて焼土が分布し固いが、壁に近づくにつれや



第20図　第３号住居跡内灰溜

わらかくなり検出が困難であった。柱穴と思われるもの（ピット１～３）は３個しか検出されなかった。床面からの深さは各点46cm、28cm、26cmある。カマドは東壁中央部にあり石組で構成され、煙道をもつ。カマド周辺部には焼土と土器の分布が多かった。煙道は後世の溝のため破壊されていたが、やはり石組のようである。周溝は検出できなかった。カマド右脇には貯蔵穴状のピットがある。

住居跡の床面および埋土からは、土師器の坏（第１類）・甕、須恵器の甕・長頸壺の破片および鉄鏃、鉄釘の出土があった。

また、住居跡内の西北部に、南北約2.2m×東西2.2m、深さ54cmの方形の掘り方がある。内部には舟底状に白色粘土が貼られているので墓壙の可能性がある。内部から土師器の細片が若干出土したのみで、時期については不明である。

第Ⅳトレンチ

表土下30cmで、南北に長くほぼ３列のピット群があらわれた。ここでは、ピットの底面まで掘り下げることはせず、半分の深さでとどめた所、大部分のピットに桑根が検出された。更にこの層を掘り下げた所、破壊された石組炉（あるいはカマドかもしれない）の残欠があらわれた。（図版21中）住居跡に伴うものであるかどうかは確認できなかった。この周辺から土師器坏（第１類）、甕、須恵器甕の破片が出土した。

第Ⅴトレンチ

水田下におけるピット群の追求を目的に設定した。遺構の発見はなく、深さ約110cmで段丘礫層に達した。須恵器・土師器の細片が出土したが、高い所から流れ落ちたものと思われる。

第Ⅵトレンチ

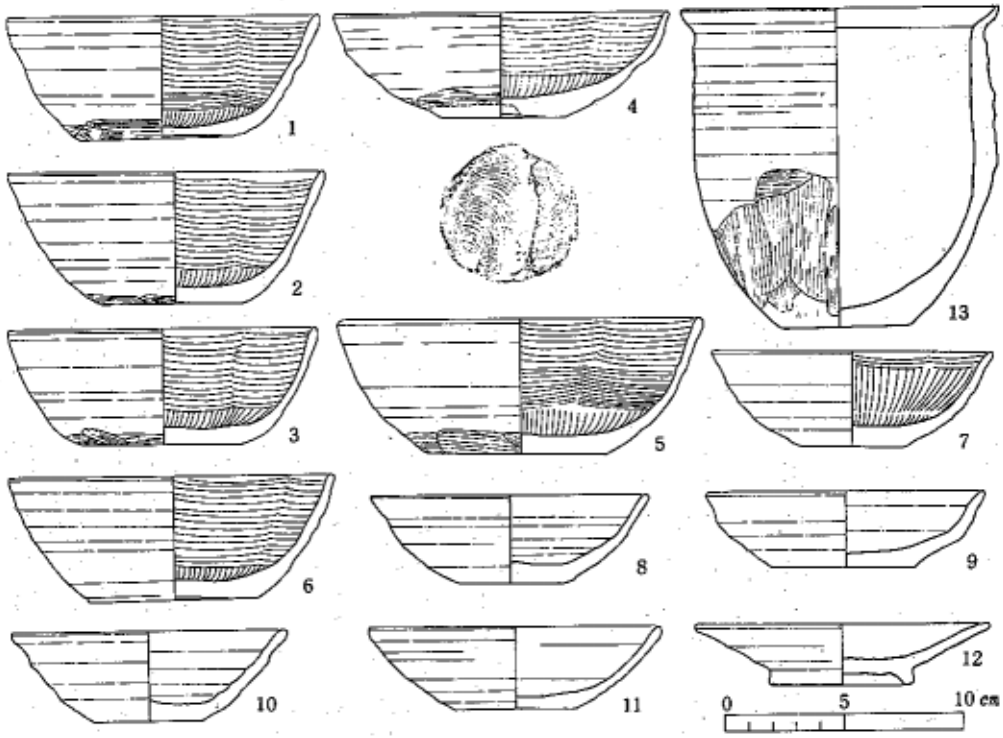
遺構の発見はなく、縄文式時代前・中期の土器破片がごく少量出土したにすぎない。

第Ⅶ・第Ⅷトレンチ

両トレンチともに一部に多量の焼土の堆積があったが、住居跡などの遺構に伴うものではなかった。この焼土周辺から土師器・須恵器の出土がみられた。

第３号住居跡の補足調査（第20図、図版21下）

第１次調査で検出された第３号住居跡の東壁にあるカマド右脇のピットを吟味したところ、焼土、炭化物混りの白色粘土層およびその下の黒色土層埋土がみられ、土師器・



第21図　下原田遺跡出土 土師器

須恵器・鉄製品が入っていた。貯蔵穴あるいは灰溜めと称されるピットであろう。

以上のほかに、工事中に土器の出土を知って立合調査をした。第Ⅷトレンチの附近である。焼土とピットが検出されたが、住居跡に伴うものであったかどうか吟味できなかったのでわからない。遺物には土師器坏、炭化米および２～３㎜の球形の種子がある。

（志間泰治、藤沼邦彦）

（３）出土遺物（第21図、図版22中・下）

土師器（坏・甕）、須恵器（坏・甕・長頸壺）を中心に鉄製品（鉄鏃・鉄釘その他）炭化米などが出土した。これらの整理は充分ついていないので、土師器坏を中心に概略を述べてみたい。土師器坏は調整技法によって分類した。

第１類〔内黒ロクロ坏〕（第21図１～６）

ロクロで調整されている。ロクロからの離しは回転糸切り手法による。内面は黒色化され、ヘラミガキが丹念である。ヘラミガキの方向は体部で口縁と平行し、底部では放射状になる。外面の体下半部は、（ａ）ヘラケズリが行われているもの（第21図１～５）と（ｂ）ないもの（第21図６）に分れる。（ｂ）は数が少なく（ａ）と共伴した。第21図４は第１ａ類で底部の一部が欠損し、内部にもうひとつの回転糸切痕がみられる。類例は東山遺跡にある。

第２類（第21図７）

第１ｂ類と技法的に同じであるが、内面に黒色化がみられない点にちかいがある。あるいは再酸化のために黒色化されていたものが消えたのかもしれない。そうであれば第１ｂ類に属する。１点しかない。

第３類〔非内黒ロクロ坏〕（第21図８～12）

ロクロによって調整され、器面に凹凸がめだつ。ロクロからの離しは回転糸切り手法による。外面の体下半のヘラケズリや内面の黒色化・ヘラミガキなどの再調整は一切省略されている。

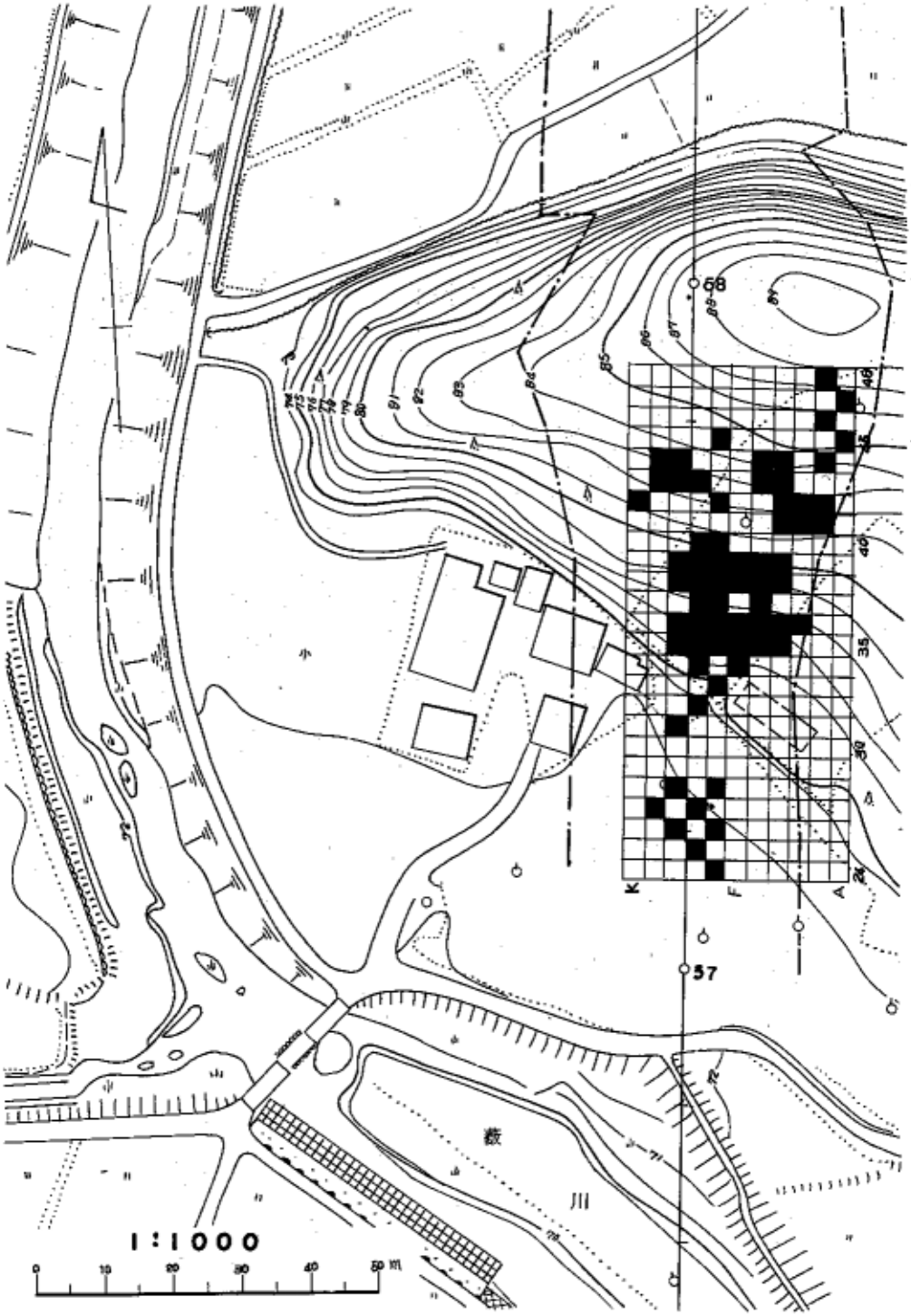
第１類土器は第４トレンチ炉跡付近・第４住居跡床面を中心に、第３類は第３号住居跡のピットを中心に出土した。第３類は器厚を均一化するためのヘラケズリ調整のない点でロクロ操作上の技術において第１類より発達した段階のものと思われ、また内面の黒色化、ヘラミガキは省略されてる点で後世のものに続くものをもっている。従って第３類は第１類と一部重複して用いられることがあっても、編年的には第１類よりも新しい時期のものといってよい。

このことから第３類がまとまって出土したピットを有する第３号住居跡は第１類を床面から出土した第４号住居跡よりも時期的に新しい可能性もある。

これらの土師器の年代は平安時代初頭から中頃にかけてのものであろう。

（藤　沼　邦　彦）

(六)　東（ひがし）　山（やま）　遺　跡



第22図　東山遺跡地形図

東　　山　　遺　　跡

１　遺跡所在地

刈田郡蔵王町矢附字向山

２　調査期日

昭和45年8月25日～9月15日

３　調査主体者

宮城県教育委員会　日本道路公団

４　調査担当者

宮城県教育庁社会教育課　技術主査　志間泰治

技師　藤沼邦彦

嘱託　白鳥良一

５　調査参加者

東北大学考古学研究室　　福田友之・岡村道雄・岩渕康治・小林博明

宮城教育大学考古学研究会　　鈴木惣之助・太田昭夫・土岐山武

東北学院大学　　斉藤誠一

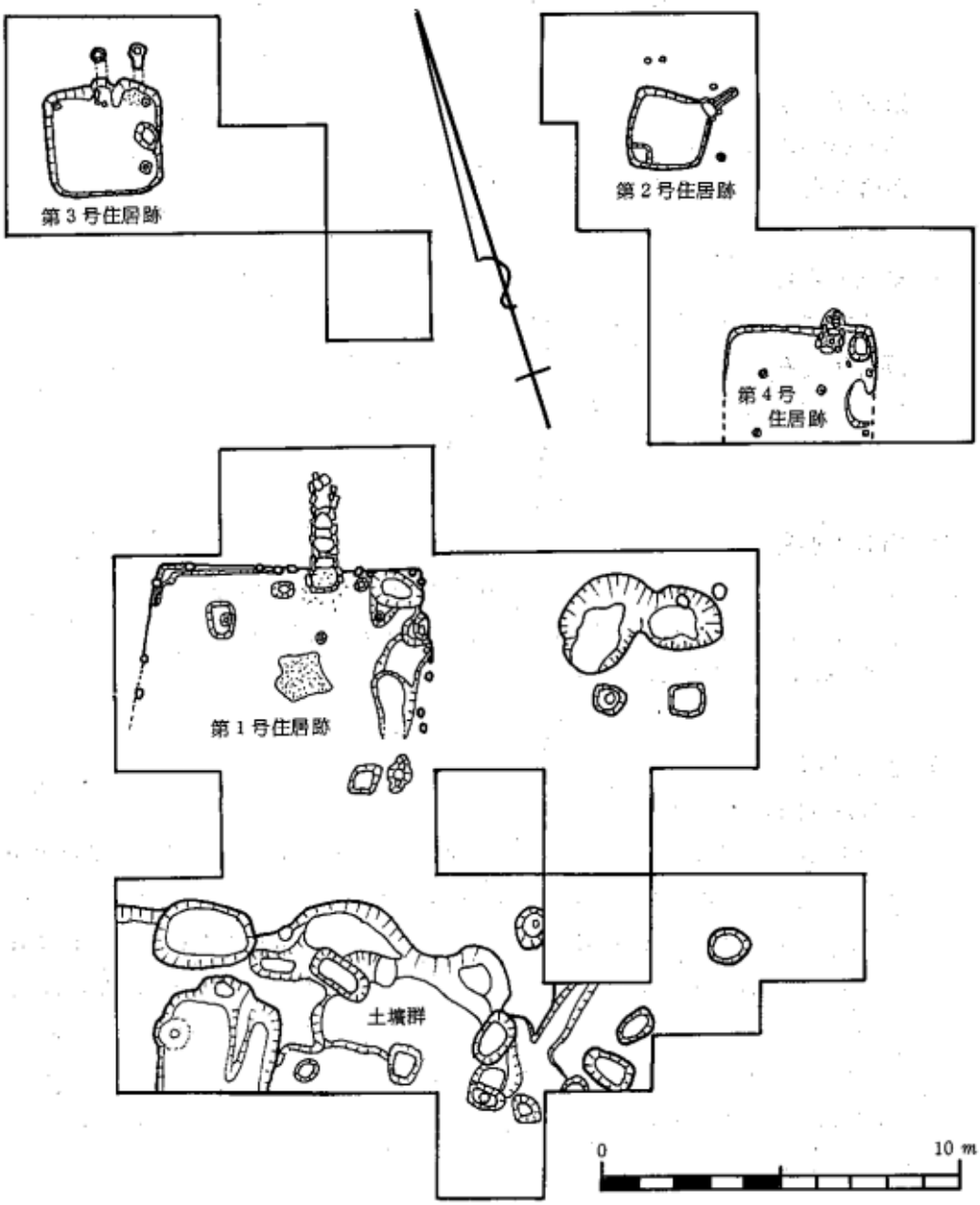
６　調査の概要

（１）遺跡の立地

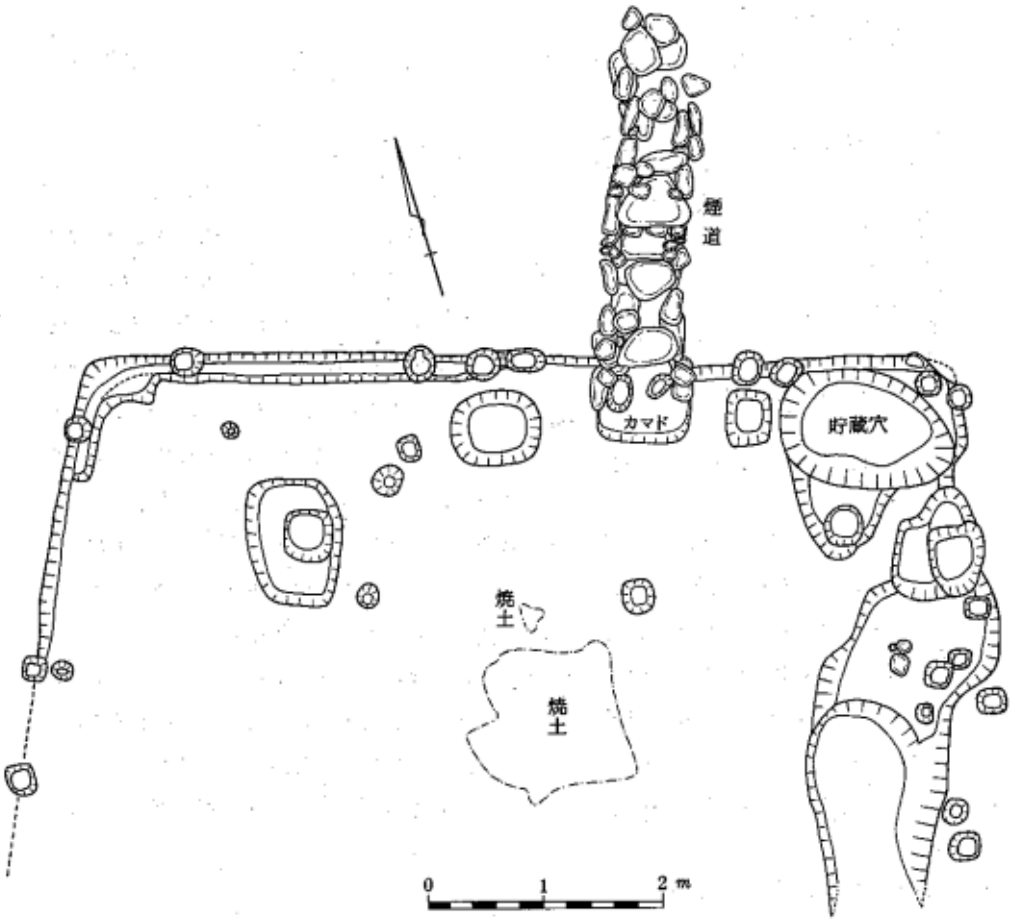
東山遺跡は、村田町沼田付近から蔵王町東根方面にかけて南北に延び、柴田郡と刈田郡の境をなしている標高約170mの愛宕山丘陵から、西の円田盆地につきでた一小丘陵の南斜面、およびその下の平坦地に立地する（第１図）。この小丘陵は附近の水田面との比高約16mで、遺跡のある南斜面は18～20°という強い傾斜をもつ。裏側の北斜面は崖に近く急角度におちる。従って小丘陵上には平坦地はない。南斜面上にたつと、円田盆地から宮にいたる松川沿いの低地一帯が見わたせる地理的位置にあることがわかる。小丘陵下の平坦地は丘陵下を流れている薮川の氾濫を度々うけたらしい（第22図、図版23上）。

（２）調査経過

小丘陵の南斜面とその下の平坦地に南北75m×東西33mの調査区域を設定し、594㎡を発掘調査した。平坦地は表土をはぐと厚い砂層がみられ、その下に暗褐色土層があった。この層は土師器片をふくんでいたが、丘陵南斜面から流入したものであろう。遺構の発見はなかった。厚い砂層は南斜面に遺跡が形成された後の薮川の氾濫によって堆積した



第23図　東山遺跡平面図



第24図　東山遺跡第１号住居跡

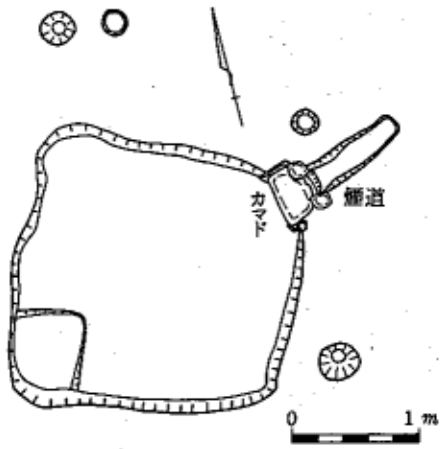
ものと思われる。南斜面は勾配が急なので住居地区としては不適当と考えられたが、中腹に竪穴住居跡４軒（第１号～４号）、その下方にピット、土壙などの遺構が検出された。遺物は主としてピット、土壙から出土し、住居跡からの出土はそれほど多くなかった。遺構以外の地点は表土下がすぐロームで遺物はごく少量しかない。

遺物は土師器（坏・甕）須恵器（坏・甕・長頸壺）が多量に出土し、そのほか鉄製鋤先、土製鈴、少量の縄文早期の土器片の発見があった。

（３）発見遺構

〔Ｉ〕竪穴住居跡

合計４軒ある。大きさは様々であるが、すべて方形に近く、石組のカマドをもつ点



第25図　東山遺跡第２号住居跡

は共通する。煙道の形態は各住居跡ごとに異なる。

第１号住居跡（第24図、図版24）

東西7.5m南北の現長5.5mで方形プランを呈すると思れる。斜面のため南側の1/3は床面まで削られている。現存する壁の床面からの高さは北壁で約40cmある。床面は中央周辺では固いが壁に近い所では軟弱な部分もみられた。柱穴状のピットは20個ほどあるが、これらがすべて柱穴であるかどうかは、いろいろな角度から検討する必要があろう。周溝は北壁部東半にみられたが全体をめぐるものかどうかは不明である。カマドは北壁中央から１mほど東によった所にある。石組で幅80cm奥行き60cmあり、壁の外にある煙道へ連なる。煙道はやはり石組で長さ３m、幅70cmある。河原石を蓋として並べていて、かなりしっかりしたものである。カマド周辺には焼土の分布がみられた。またカマドの東脇即ち住居跡の北東隅には長径1.5m、深さ45cmの楕円形のピットがあり、灰・木炭と共に土師器や須恵器の坏が入っていた。灰溜か貯蔵穴であろう。土師器の坏には「万田」の墨書があった。

遺物はピット内のほかに床面からも少量の土師器（坏）、須恵器（甕・坏）の出土があった。

第２号住居跡（第25図、図版25）

北壁2.1m、東壁2.1mのほぼ方形を呈する小規模な住居である。現存する壁の床面からの高さは、北壁が約30cm、南壁が約10cmである床面はローム面であるが軟弱で検出が困難であった。柱穴は床面に認められず、周囲に検出された４個のピットがその役割を果したものと推される。周溝はない。住居の北東隅には切石を使用したカマドがあり、長さ１mの煙道をもつ。煙道天井部はおちて溝状になっていた。遺物は埋土、床面から少量の土師器片が出土したにすぎない。

第３号住居跡（第26図上、図版26）

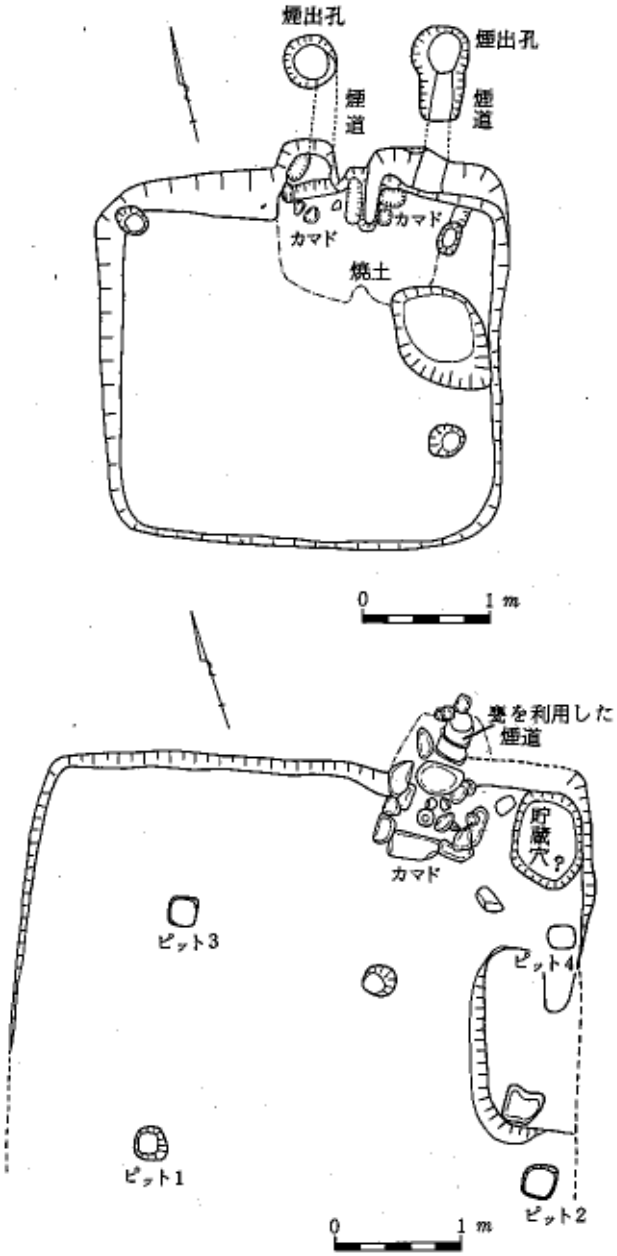
東西約3.2m×南北３mの方形プランを呈する住居跡である。現存する壁の高さは北壁で約50cm、南壁で７cmである。床面は全体に軟弱で検出は困難であった。柱穴は３個確認された。周溝はない。カマドは北壁の中央部と東よりの部分に２個ならんで検出されている。東よりのカマドは同じく石組で構成されたと思れるが、石の抜き取り痕しかない。

従って、中央部のカマドは東側のカマドより後まで長く使用されたものと思れる。各々につく煙道はトンネル式で長さ約１mでゆるい勾配で煙出孔に続く。天井部は保存は良好であった。また東壁に近い所に、長径１m、深さ10cmの浅いくぼみがある。遺物は床面から土師器（高台付坏・坏・甕）、須恵器（甕）の破片が少量出土した。

第４号住居跡

（第26図下、図版27）

東西約4.2m、南北の現長約2.5mで方形のプランを呈する住居跡と思れる。傾斜のため南壁に近い部分は削られている。現存する壁の床面からの高さは約50cmある。カマドは北壁中央やや東よりに位置する。河原石と切石を用いて構築し、煙道をもつ。カマド焚口の部分には焼土が厚く分布し、土師器坏の完形



第26図　東山遺跡第３号住居跡（上）
第４号住居跡（下）

品が出土した。煙道は底を抜いた長胴の甕（土師器）を２個つなぎ合わせてつくられていた。柱穴は４個検出された。床面からの深さは様々で、浅いものは20㎝、深いものは50㎝ある。全体に西によって配置されている。また北東隅には長径70㎝、深さ約30㎝のピットがある。貯蔵穴か灰溜であろう。

遺物はカマド焚口内部、ピット、床面から土師器（坏・甕）が出土した。そのほか煙道に利用されていた甕（土師器）がある。

〔Ⅱ〕土壙群

第１号住居跡の東と南の地域に土壙群（適当な名称でないかも知れない）が検出された。東地域の土壙は楕円形のピットが２個接したもので黒土の埋土から土師器坏（墨書あるものもふくまれる）が多数出土した。南地域は形態、大きさの異なる多数の土壙群が隣接あるいは切合いながら東西に連らなっていた。そのため傾斜地に段落がついている。埋土には炭化物、焼土が多数ふくまれている。遺物の出土量も多く、多数の土師器（坏・甕）、須恵器（坏・甕・長径壺）を中心に灰釉坏、土製鈴、鉄製鋤先が出土した。土師器坏には「万田」・「田万」・「子田」などの墨書がかなりみられる。これらの土壙群の性格は不明であるが、遺物の大多数は上から捨てられたものであろう。（藤沼邦彦・白鳥良一）

（４）出土遺物

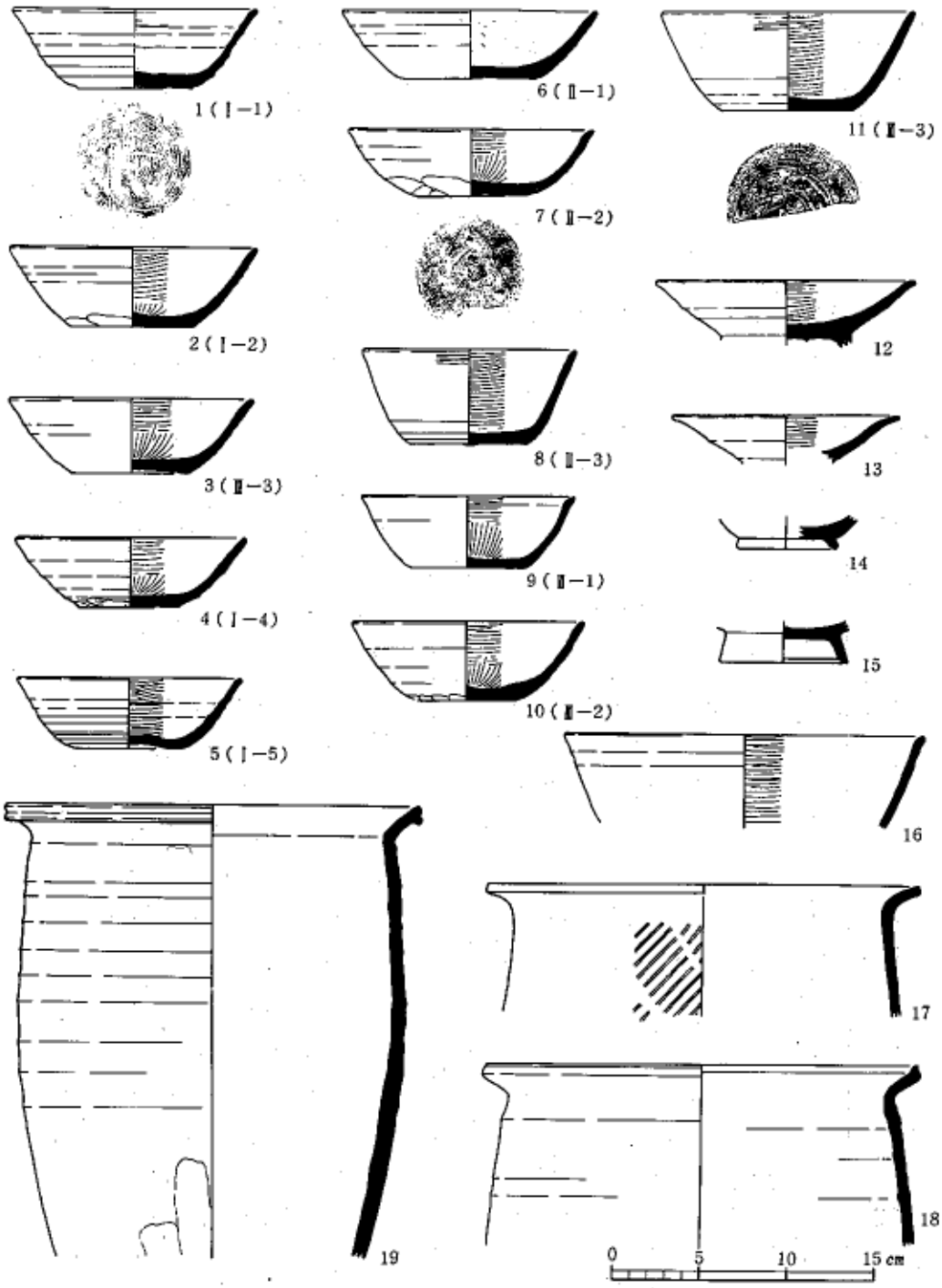
今回の調査で出土した遺物は、縄文式土器８点、土師器2,542点、須恵器699点、土製鈴、鉄鏃、鉄製鋤各１点である。土師器、須恵器については出土状況から同時期の遺物と考えられるので、一括して扱っておきたい。

〔Ⅰ〕土師器

坏（第27図）

完形品（以下図上復元可能なものも含む）69点、底部破片270点、口縁部破片542点、体部破片835点が出土しており、すべてロクロ形成の坏である。これを製作技法中心に分類すると次の様になる。

Ⅰ類　回転糸切り技法によって底部を切り離し、内面にヘラミガキ調整を行った上黒色化するものである。外面再調整の有無により、再調整のないもの（Ⅰ－１類）、体部下端に手持のヘラケズリ調整があるもの（Ⅱ－２類）、底部に手持のヘラケズリ調整があるもの（Ⅰ－３類）、ヘラケズリが底部から体部下端に及ぶもの（Ⅰ－４類）、体部下半部に回転ヘラケズリ調整があるもの（Ⅰ－５類）、回転ヘラケズリが底部から体部下端に及ぶもの（Ⅰ－６類）に細分される。



第27図　東山遺跡出土土師器坏・甕

Ⅱ類　ヘラオコシ技法によってロクロから切り離されている為、底部中央にヘソ状のわずかな高まりを残すもので、この高まりを中心に螺線状の痕跡を確認できる場合もある。内面にはヘラミガキ、黒色化処理が行われている。Ⅰ類と同様外面再調整の有無から、Ⅱ－１～３類に細分される。

Ⅲ類　本来Ⅰ類またはⅡ類に分類されるものであるが、底部全面に手持ちあるい回転のヘラケズリ調整がなされている為、切り離し方法を知り得ないのでⅢ類としておくⅢ－１～３類に細分。

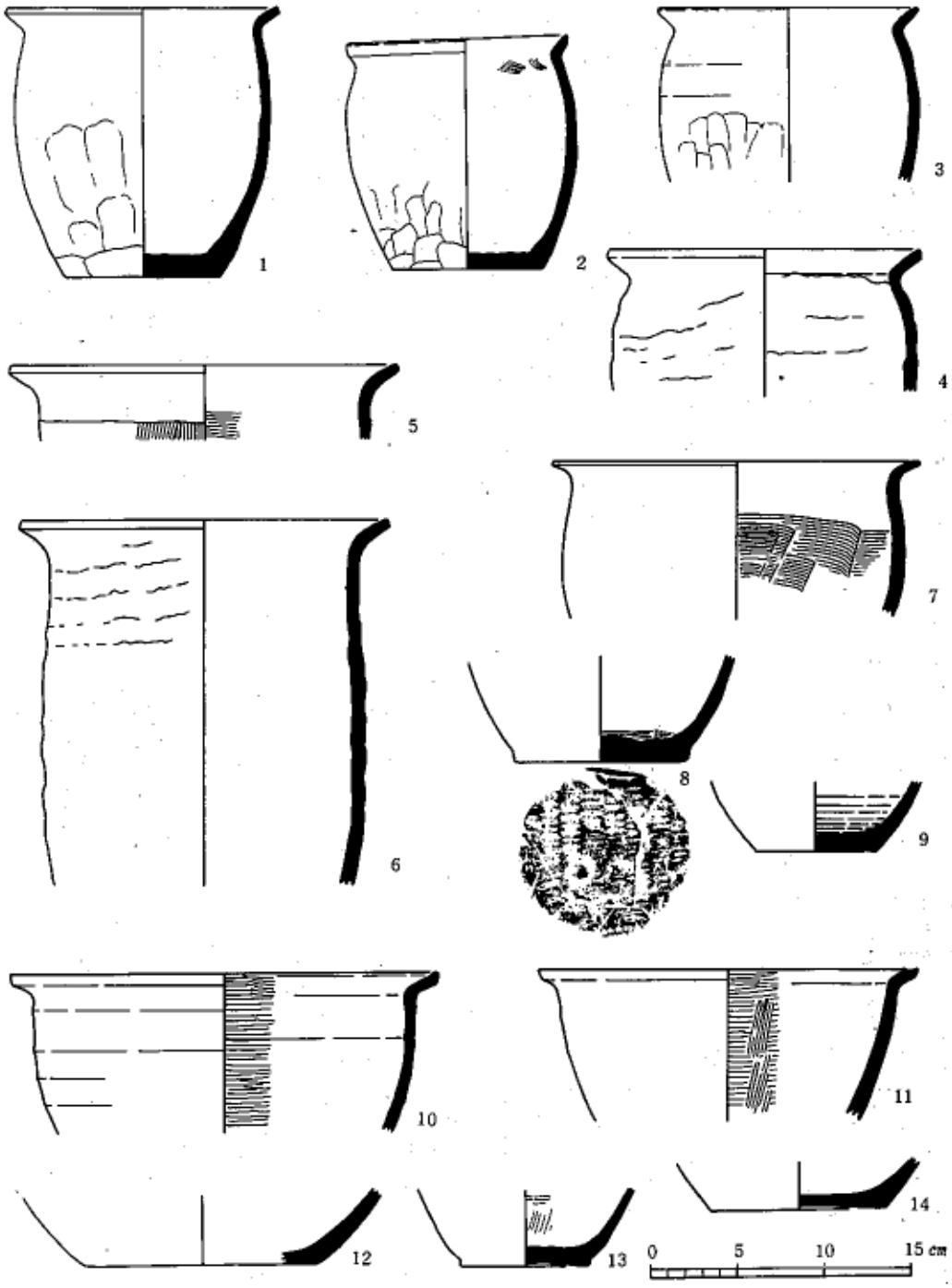
Ⅳ類　内外両面にヘラミガキ、黒色化されているものであるが、体部破片のみのため器形・切離し方法などは不明である。

類別		分類規準						数量	
		切離	再調整				内面	完形品	底部破片
			手持ちヘラケズリ		回転ヘラケズリ				
			体部下端	底部	体部下端	底部			
Ⅰ	1	回転糸切					ヘラミガキ＋黒色化	6(8.7%)	28(10.4%)
	2		有					6(8.7%)	16(5.9%)
	3			有				6(8.7%)	6(2.2%)
	4		有	有				6(8.7%)	26(9.6%)
	5				有			1(1.5%)	0
	6				有	有		1(1.5%)	4(1.5%)
	?							0	15(50.0%)
小計								26(37.7%)	
Ⅱ	1	ヘラオコシ		有				1(1.5%)	
	2		有	有				2(3.0%)	
	3				有	有		3(4.4%)	
	?								
小計								6(8.7%)	0
Ⅲ	1	不明		有				2(3.0%)	9(3.3%)
	2		有	有				27(39.1%)	72(26.7%)
	3				有	有		5(7.3%)	27(10.0%)
	?							3(4.4%)	27(10.0%)
小計								37(53.6%)	135(50.0%)
Ⅳ		?	内外両面ヘラミガキ・黒色化（体部破片３点のみ）						
総計								69	270

第１表　土師器坏分類表

なお内面にヘラミガキ調整を受けながら、黒色化の認められない坏がある。しかしこれはまだらに黒色を呈する坏が見られることから、かって全面に黒色化されていた可能性が考えられる。また内黒の坏を再酸化させると黒色（炭素）がきれいに消えるという実験結果からみて、Ⅰ～Ⅲ類のいずれかが火にかかり変化したものと思われる。

以上の分類基準並びに数量を示したのが第１表である。この表に基づいて土師器坏の特徴をまとめてみると、①すべてロクロにより成形されて内面ヘラミガキ・黒色化されている。②回転糸切り技法とヘラオコシ技法が共存しているが、その比は26：６と糸切り技法によるものが圧倒的に多い。③体部下端或いは底部にヘラケズリ再調整を受けるものが大部分を示める。またその方法として回転ヘラケズリ調整もみられるが、



第28図　東山遺跡出土土師器

手持ちのケズリによるものが非常に多い。と言える。

次に第１表に欠けている観点について坏全体をとうしての観察結果を略述する。

○形態――例外的に直径20cmの坏１点（第27図16）、口径16～19cmの坏数点が見られるが、口径12.5～14cm、底径６～７cm、器高13.5～14cmの坏が大部分である。形態としては、底部からやや急に立上り真すぐのびる口縁部をもつもの（第27図－１）、と底部からややゆるやかに立上り真すぐのびる口縁をもつもの（第27図－７）が多いが、底部から急角度で立上るもの（第27図－８）、口縁端が軽く外反するものなどがわずかに認められる。

○技法――〔成形〕恐らくロクロ水挽きによったものであろう。　〔口縁部外面の再調整〕ほとんどみられないが、Ⅱ－３・Ⅲ－３類の中に巾１cm程のヘラミガキ調整を受けているもの（第27図－８・11）が４点みられる。　〔内面ヘラミガキ〕口縁部のミガキは共通して横方向である。底部のミガキ方をみると、放射状にみがくもの80%、不定方方向のもの10%、一方向のもの８%、同心円状にみがくもの２%となる。ミガキの手順としては口縁部→底部がほとんどである。

○胎土、焼成・色調――微石英粒を含むが、きめのこまかい粘土を使用している。焼成良好で黄褐色を呈する。保存状態も非常によい。

高台付坏

完形品はない。すべて内面にヘラミガキ、黒色化処理を受けている。

Ⅰ類　（第27図－12）口が大きく開き、先端でやや外反する浅い器形の坏である。底部に回転糸切り痕を残し体部下半に回転ヘラケズリ調整を受けている。１点。

Ⅱ類　（第27図－13）器形はⅠ類と類似するが、底部を欠く。３点。

他に高台付坏の破片３点が見られる（第27図－14・15）。

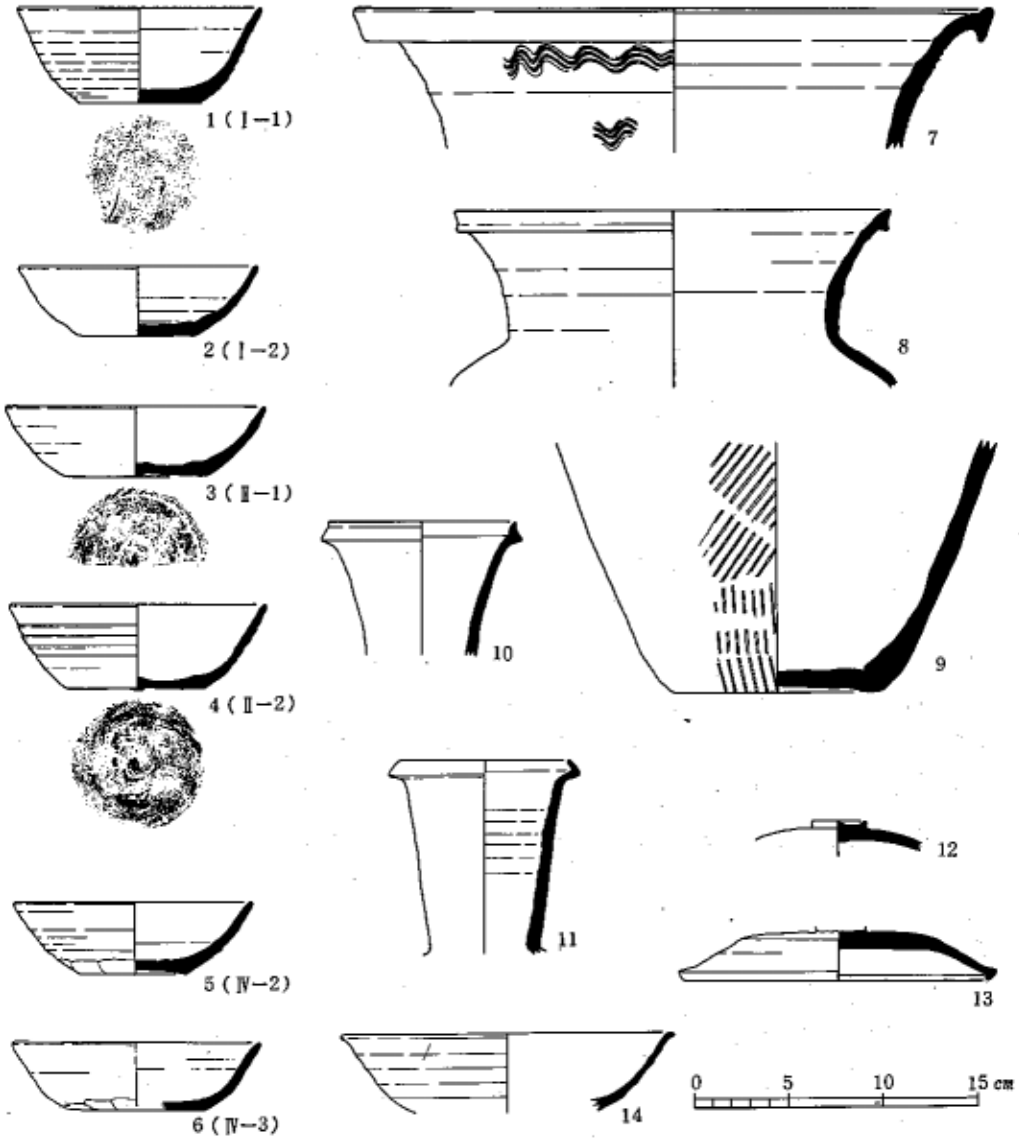
甕

内面黒色化されない甕をⅠ類、ヘラミガキ・黒色化されているものをⅡ類とする。出土点数を（Ⅰ類・Ⅱ類）の順で示すと、完形品（２・０）、口縁部破片（144・９）、体部破片（1,599・８）、底部破片（57・３）、把手（０・１）となる。

底部	数量
回転糸切右回り	6
左回り	5
?	6
	１７（３２.７%）
アンペラ状圧痕	8（１５.４%）
ヘラケズリ	１８（３４.６%）
不明	9（１７.３%）
計	５２

第２表　甕底部破片観察結果

Ⅰ類　ロクロにより調整されている甕（第27図－17～19・第28図１～４）とロクロ調整を受けない甕（第28図５～７）に大別される。前者には大型長胴甕もみられるが、小型の甕が多い。また平行線状の叩き目のある甕１点が認められる



第29図　東山遺跡出土須恵器

（第27図−17）。後者の占める割合は低い。粘土ひも巻き上げ痕を残すもの（第28図−６）刷毛目調整を受けているもの（第28図−５・７）がある。完形品が２点しかないので、底部体部破片ごとの観察結果を示すと第２・３表のようになる。

底部についてみると回転糸切り痕を残すもの（第28図−９）とヘラケズリ調整を受けるものが多い。アンペラ状圧痕を残すもの（第28図−８）は色調・内面刷毛目調整のあることなどから見て、（第28図−８）と組むものわれる。

Ⅰ類全体をとうして、石英粒、砂粒を多く含み、赤褐色または黄褐色を呈するものが大

内面	ロクロ痕	ナデ	刷毛目	不明	計
ロクロ痕	129	13	10	1	153
ナデ	9	10	2	3	24
ヘラケズリ	60	103	11	34	208
刷毛目	4	7	13	1	25
平行線状叩目	1	2		1	4
不明	8	2		12	22
計	211	137	36	52	436

第３表　製体部破片観察結果

部分である。

Ⅱ類　（第28図－10～14）破片のみではっきりしないが、深鉢に近い器形であろう。すべてロクロにより形成されており、内面にヘラミガキ・黒色化調整を行っている。混入物のない緻密な胎土を使用している点でもⅠ類と大きく異なる。底部には回転糸切り痕を残すもの（第28図－13）とヘラケズリ調整によっているもの（第28図－12・14）がある。

〔Ⅱ〕須恵器

坏（第29図－１～13）

完形品24点、底部破片98点、口縁部破片152点、体部破片167点が出土している。土師器坏と同様の方法で分類すると第４表のようになる。Ⅳ類の分類基準は特異であるがこれについては後述する

まずⅠ～Ⅲ類を見ると、土師器坏同様回転糸切り、ヘラオコシ技法ともに認められるが、17：２と糸切りによるものが圧倒的に多い。ヘラケズリ調整を受けるものは非常に少なく、あっても軽く凹凸を調整するだけである。口径13.5cm、底径6.5cm、高さ４cm前後の坏が多い。

Ⅳ類は明るい赤褐色を呈するが、胎土、焼成および内面にヘラミガキ・黒色化の無い点から考えて、土師器とは異なる。器形の点ではⅠ～Ⅱ類の須恵器とほとんど変らない。また明瞭にヘラケズリによって器形を整えているものが主体を占めている。ただし青灰色・灰色を呈する須恵器Ⅰ～Ⅲ類は再調整を行わないものが原則的である。このようにⅠ～Ⅲ類の須恵器とは区別される点もあるが、取りあえず須恵器Ⅳ類としておく。

蓋

完形に近いが硯に転用されている為、つまみが削り取られている。内面はなめらかとなり部分的に墨の痕跡が残っている。蓋としての製作技法をみればロクロ成形後・天井部に回転ヘラケズリ調整し、偏平なつまみをけたものである（第29図－13）。

他の１点も天井部を回転ヘラケズリ調整し、扁平なつまみをなでつけている（第29図－12）。

類別		分類規準					色調	数量	
		切離	再調査					完形品	底部破片
			手持ちヘラズリ		回転ヘラケズリ				
			体部下端	底部	体部下端	底部			
I	1	回転糸切					青灰色	16(66.7%)	71(72.5%)
	2			有				1(4.2%)	1(1.0%)
小計								17(70.8%)	72(73.5%)
II	1	ヘラオコシ						1(4.2%)	0
	2			有				1(4.2%)	0
小計								2(8.4%)	0
III	1	不明			有	有	赤褐色	0	1(1.0%)
	2							0	8(8.2%)
	?			有					7(7.1%)
小計									16(16.0%)
IV	1	回転糸切					灰色	0	3(3.1%)
	2		有					2(8.3%)	0
	3		有	有				2(8.3%)	4(4.1%)
	4	不明		有				0	1(1.0%)
	5				有	有		1(4.2%)	2(2.1%)
小計									10(10.0%)
総計								24	98

第４表　須恵器坏分類表

長頸瓶（第29図－10・11）

２点出土しているが、ともに体部を欠く。うち１点は部分的に暗緑色の釉がかっている（第29図－11）

甕　（第29図－７～９）

口縁部破片16点、底部破片８点、体部破片228点が出土している。体部に平行線状の叩き目のあるものが非常に多く、頸部に櫛描き波状文をほどこしたもの（第29図－７）などが認められる。

〔Ⅲ〕施釉陶器　（第29図－４）

口径175cmで口縁端が軽く外反する。内面にうすく灰釉がかかっている。胎土は灰白色の緻密なもので、焼成も非常に良い。体部下半に回転ヘラケズリ調整が認められる。なお名古屋大学楢崎彰一助教授の鑑定によれば、黒笹90号窯式に属するとの由である。

〔Ⅳ〕墨書土器　（図版28－１～５）

土師器坏69点・高台付坏３点・甕１点、須恵器坏３点の計73点の墨書土器が出土している。

土師器坏　「万田」と記されているものが50点と圧倒的に多く、その他「今万田」４点、「子田」、「田万」各１点、判読できぬもの11点出土している。このうちの78%が底部に、22%が体部に記銘されている。坏の分類との関係を見ると、Ⅰ類が21点、Ⅱ類が３点、Ⅲ類16点、その他は不明である。

土師器高台付坏　「万田」「今万…」　「坐」各１点が出土しており、「坐」が体部に他の２点は底部に記されている。

土師器甕　底部破片に「…田」の墨書がある。器形等は不明である。

須恵器坏　底部に「万田」と記されているものが２点、体部破片に判読できぬ文字の記されているものが１点認められる。「万田」の２点はⅠ－１類、他の１点はⅣ類である。

以上のうち筆跡鑑定に耐えうるもの33点（すべて土師器坏）について、東北大学黒田正典教授の鑑定により、第５表のような結果を得た。Ａ系の坏とは仮称人物Ａによって

	墨書銘	類別	数	小計	総計
A系	万田	Ⅰ－1	3	23	25
		3	1		
		4	3		
		5	1		
		?	1		
		Ⅱ－3	2		
		Ⅲ－2	7		
		3	2		
		?	3		
	今万	Ⅰ－1	1	1	
	子田	Ⅰ－2	1	1	
B系	万	Ⅰ－?	1	3	6
		Ⅲ－?	2		
	万田	Ⅰ－1	1	2	
		Ⅲ－2	1		
	今万田	Ⅰ－?	1	1	
C系	留男	Ⅱ－3	1	1	1
D系		Ⅰ－1	1	1	1

(注)D系はB系に入る可能性あり

第5表　墨書土師器筆跡鑑定結果

墨書されたもので、B以下もこれに準ずる。この表からまず第一に書き手の人数は最高４名と思われ、しかもA系の坏が76％も占めていること、更にA・B系の表から判るように同一人物によって製作技法の異なる土器にも墨書がなされていることが注目される。これは技法の異なる坏がほぼ同時期に使用されていたことを示すものであろう。

〔V〕その他の遺物

縄文早期の破片８点の他、土壙群の中から土製鈴、鉄製鋤先（図版28－６・７）鉄鏃が各１点発見されている。　　（高　野　芳　宏）

7　まとめ

（1）東山遺跡は周囲の見通しがきく丘陵の南斜面に形成されており、今回の調査で４軒の竪穴住居跡が発見された。これらの住居跡は地形、配置状況、出土遺物などから見てほぼ同時期に営なまれ、ひとつの小集落を構成していたものと思われる。また住居跡の立地する場所は勾配のかなり急な斜面で、本来的には住居とすべき適地とは言えず、ここに東山遺跡の性格が示されているものと思われる。

（2）各住居跡は方形プランと石組のカマドを持つ点では共通するが、規模、煙道の構造についてはそれぞれ特徴的である。また丘陵裾部には性格不明の土壙群が検出され、中から多量の遺物が発見された。

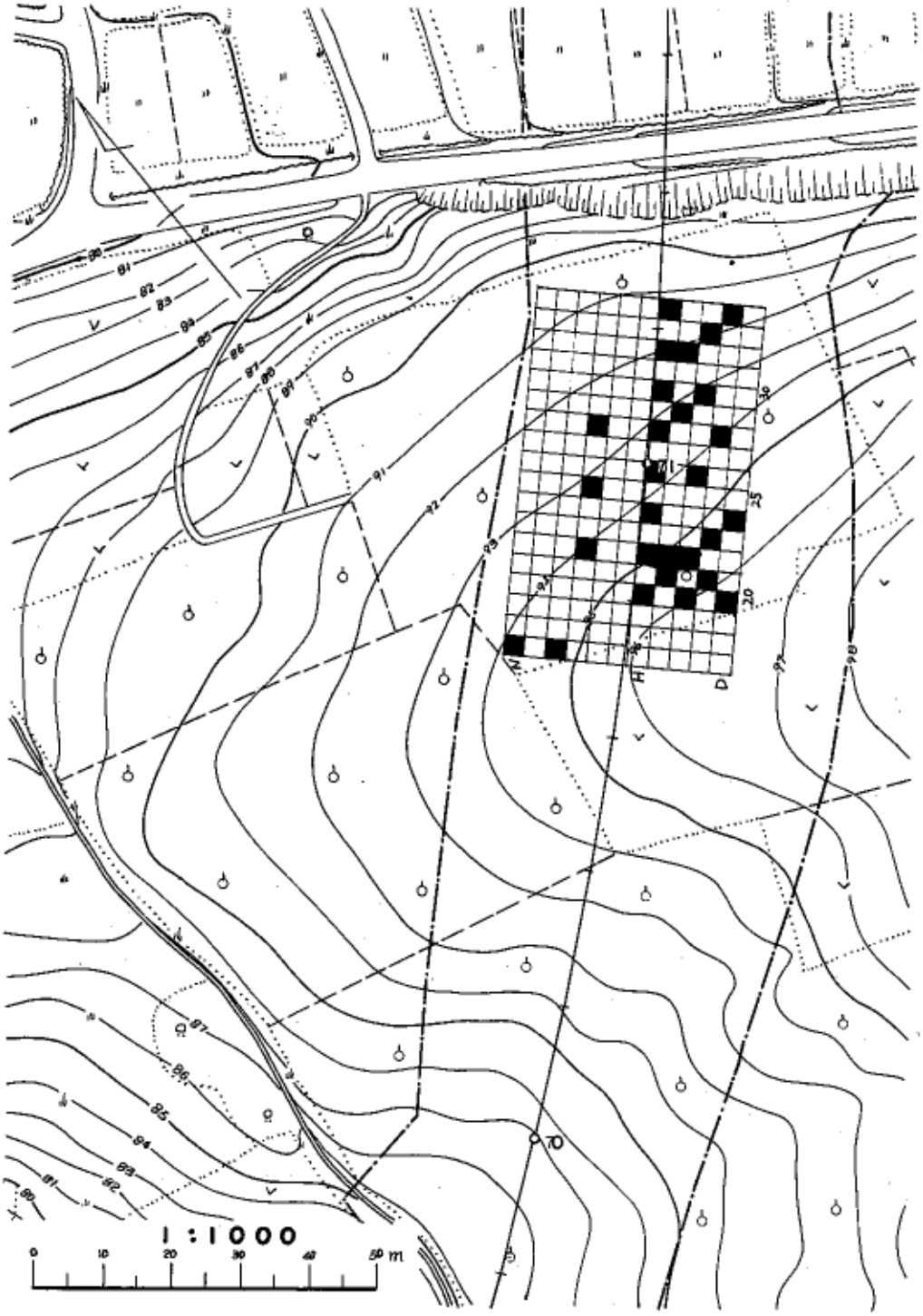
（3）出土した遺物のうち最も多い土師器甕・坏は、回転糸切りによってロクロから切り離し、手持ちのヘラケズリで外面を再調整した後、内面をヘラミガキ、黒色化したものが主体を占める。須恵器坏も切り離し方法については同様であるが、再調整を受けぬものが主体である。

（4）「万田」をはじめとする墨書土器が多量に出土したことが注目される。東山遺跡の

性格を究明する上で重要な手がかりになると思われる。また各種器形に墨書の認められることならびに筆跡鑑定の結果は、出土している土師器・須恵器が同一時期に使用されたことを裏づけている。

（5）黒笹90号窯式に属する灰釉陶器が出土していることは、東山遺跡の絶対年代を考える上で貴重な資料と言える。　（白　鳥　良　一）

（七）　大山（だいやま）遺跡



第30図　大山遺跡地形図

大　　山　　遺　　跡

１　遺跡所在地

宮城県刈田郡蔵王町塩沢字大山

２　調査期日

昭和45年9月1日～10日

３　調査主体者

宮城県教育委員会　日本道路公団

４　調査担当者

宮城県教育庁社会教育課　技術主査　志間泰治

技師　藤沼邦彦

嘱託　白鳥良一

５　調査参加者

東北大学文学部考古学研究室　　西脇俊郎・岩渕康治

６　調査の概要

（１）遺跡の立地

大山遺跡は、愛宕山丘陵から円田盆地へのびた一台地上にあり、両側を小さな谷にはさまれ、盆地へとゆるやかに傾斜する（第１図）。

土器片の散布は量的に多いとはいえないが西斜面を中心に範囲は広い。

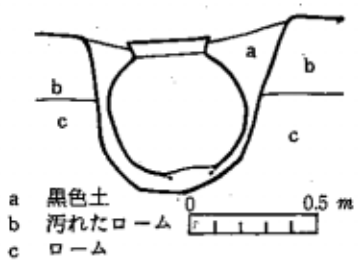
（２）調査の経過

道路敷は台地の頂部附近を南北に横断するので、頂部から北斜面にかけて48m×24mの範囲でグリッドを設定した（第30図）。

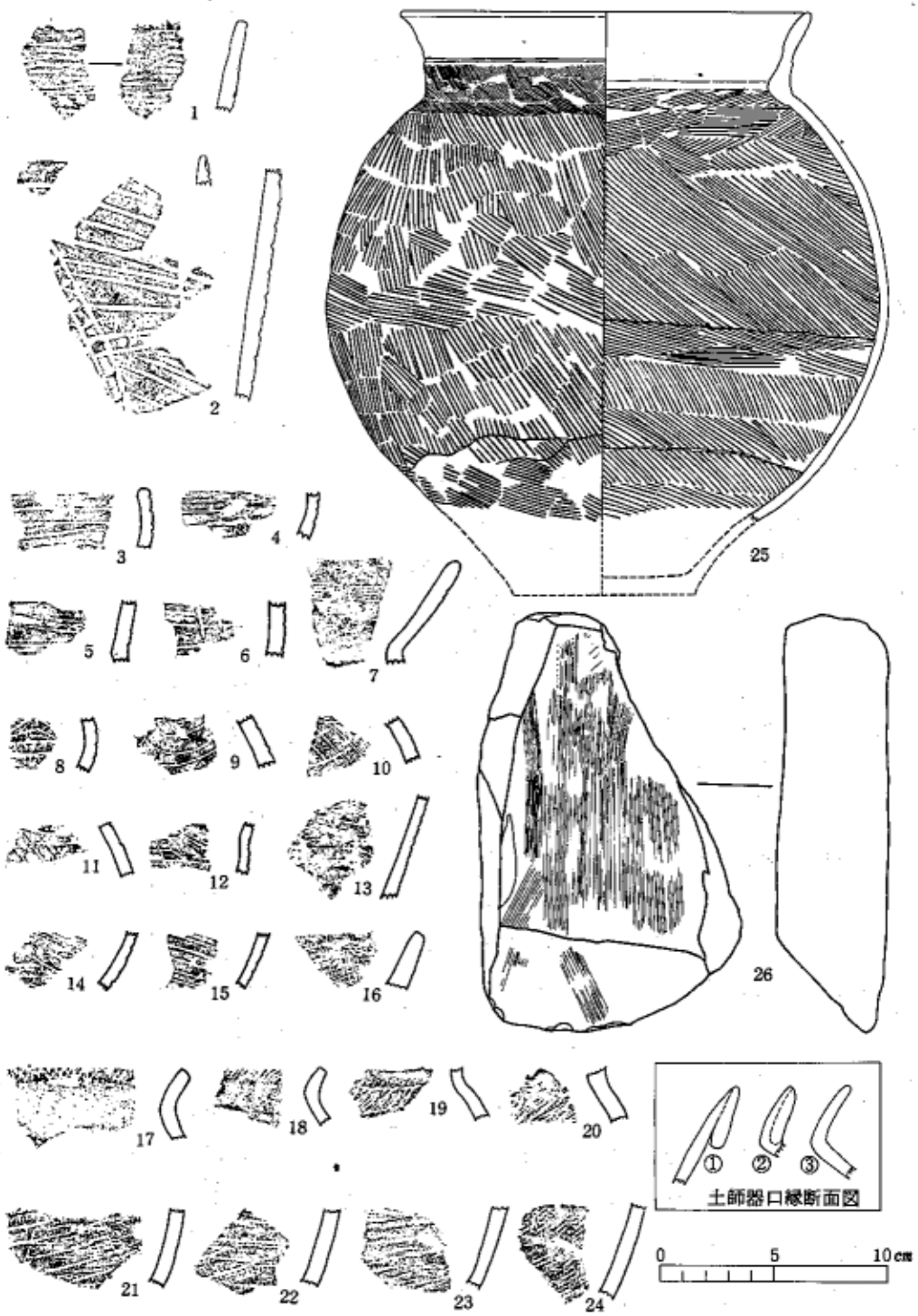
層位は表土、茶褐色土、ロームの順になるが、ロームまでの深さが約30～40cm前後で浅く、かつ果樹園であったため、果樹の根、消毒用パイプの埋設工事などで完全に攪乱されていた。

出土遺物も少く、土器はすべて細片で、良好な包含層はもとよりなかったと思われる。

遺構は土師器の埋甕があったのみである（第31図）。ロームに直径29～30cm、深さ27cmのピットが掘られ、その中に直立して埋められてあった。底部は欠損していた。



第31図　大山遺跡埋甕出土状況



第32図　大山遺跡出土品

1－2縄文式土器　25　土師器
3－24弥生式土器　26　砥　石

南斜面にも幾つかのグリッドをあけたが、遺物は殆んど出土しなかった。

（３）出土遺物（第32図）

遺物は量的に少ないが、土器、石鏃、玦状耳飾、砥石などが発見された。

縄文式土器（２点）

Ａ．貝殻条痕文土器　口唇部に刻目をもつ。内外面とも貝殻条痕文をもつ。外面には三角形のつきさし文がある。胎土には繊維をふくむ。早期末の素山上層式に相当する（第32図１）。

Ｂ．沈線文土器　口縁部をふくめ破片は数点あるが、同一個体に属する。口縁の破片が小さく果して平縁であるかわからない。平行沈線をいくつもかさね、三角形やＣ字形のつきさし文を配す。繊維の混入はない。田戸下層式に平行するものと思われる（第32図２）。

弥生式土器

すべて小破片で、文様、器形をみきわめにくいが、一応、壺形、鉢形、甕形、高坏形に分類できた。文様はすべて鋭い沈線によるのが特徴的である。

Ａ．壺形土器（第32図３～11）口縁部は形態により２つに分けられる。（ａ）口縁部が比較的短かく内彎し、平行沈線文と連弧文をもつ（３～５）。（ｂ）口縁部が盃状にひらき、細長い頸部となり、矩形文をもつ（６・７）。

体部上半の破片には、渦状文、重菱形文、などの文様がみられる（８～１）。

体部下半は撚糸文あるいは縄文が施されるが、他の器形の体部破片と区別するのはむずかしい。

Ｂ．鉢形土器（第32図12～15）口頸部の形態が推察できるものは１片だけである。体部と頸部の境に軽い屈曲を有している(12)。体部は連孤文ないし平行沈線文をもつものが多い(13～15)。口頸部が外反し、口唇部に縄文が施される、体部と頸部との境に綾絡文がめぐるものが多い（17～20）。体部は縄文或いは撚糸文が施されるのが普通である。また、肥厚する口縁部で大きくひらくものが一例あるがおそらく甕形土器のグループであろう（16）。

以上述べた他に、器形のわからない撚糸文或いは縄文だけの破片が多い。その比は約５：１で撚糸文の方がはるかに多い（21～24）。但し原体についてはもう少し観察と実験が必要である。

これら弥生式土器は文様、器形から弥生式時代後期の円田式に相当すると思われる。

土師器（第32図右下）

Ｇ22、Ｆ22区を中心に10数個体分の破片が出土したにすぎない、口縁部の特徴を知り

うるのは４例しかない。①外反する口縁部の外面に、貼りつけによる段をもつ、②肥厚する口縁部で、やや外反すると思われる。段の形成はないが、断面に貼りつけた痕跡が認められる。③外反する薄い口縁部で、貼りつけや段などはみとめられない。④外反する口頸部中央に浅い沈線がめぐるものとに分類される。

①は口縁部内外とも、ヘラミガキされるが、外面の段の下の頸部には細かな刷毛目がのこり、段の下までくいこんでいるのが観察される。おそらく、段の貼りつけ以前の刷毛目調整によるものであろう。壺形土器である。

②・③は口縁部の内外面ともヨコナデして仕上げている。外面にヨコナデ以前の刷毛目の痕跡が若干のこる。

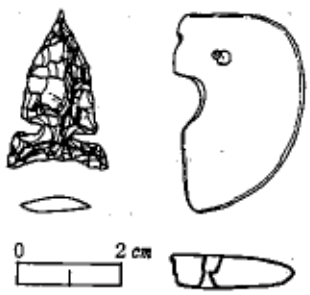
④は埋甕の土師器である。口縁部は内外ともヨコナデして仕上げているが、外面の沈線から頸部のつけ根にかけては細かな刷毛目で調整されている。体部はほぼ球形に近く内外とも刷毛目による調整である。底部を欠くがおそらく平底と思われる。外面に煤が附着している（第32図25）。

以上の壺、甕形土器以外にも朱塗の壺の体部、坏の底部と思われる破片がある。

これら土師器は、器形、成形技術などから、後述する大橋遺跡出土のものと同じであり、塩釜式期に相当する。

玦状耳飾（第33図）

乳白色を呈した堅い石質である。肩の部分が張り、脚の部分がまるみをおびる。断面は扁平である。肩に両面からの穿孔がある。半欠で、長さ3.9㎝、厚さ0.6㎝ある。形態的には縄文前期のものに近い。滑石製である。



第33図　大山遺跡出土
石鏃・玦状耳飾

石鏃（第33図）

基部に近い両側から、えぐりの入ったアメリカ式石鏃である。大形でつくりもよく、肩のあたりが張って将棋の駒の先端を思わせるような恰好になっている。長さ３㎝、幅２㎝、厚さ0.4㎝で弥生式土器に伴うものである。

砥石（第32図26）

緑泥片岩を利用したと思われる。表面が使用のためにまめつして、擦痕が認められる。土師器の時代のものであろうか。長さ18.5㎝。

7　まとめ

すべて断片的な資料であるが、次の様にまとめられる。

（1）道路敷内は遺跡の周辺部に相当し、中心部はその外の西斜面にあるのではないかと思われる。

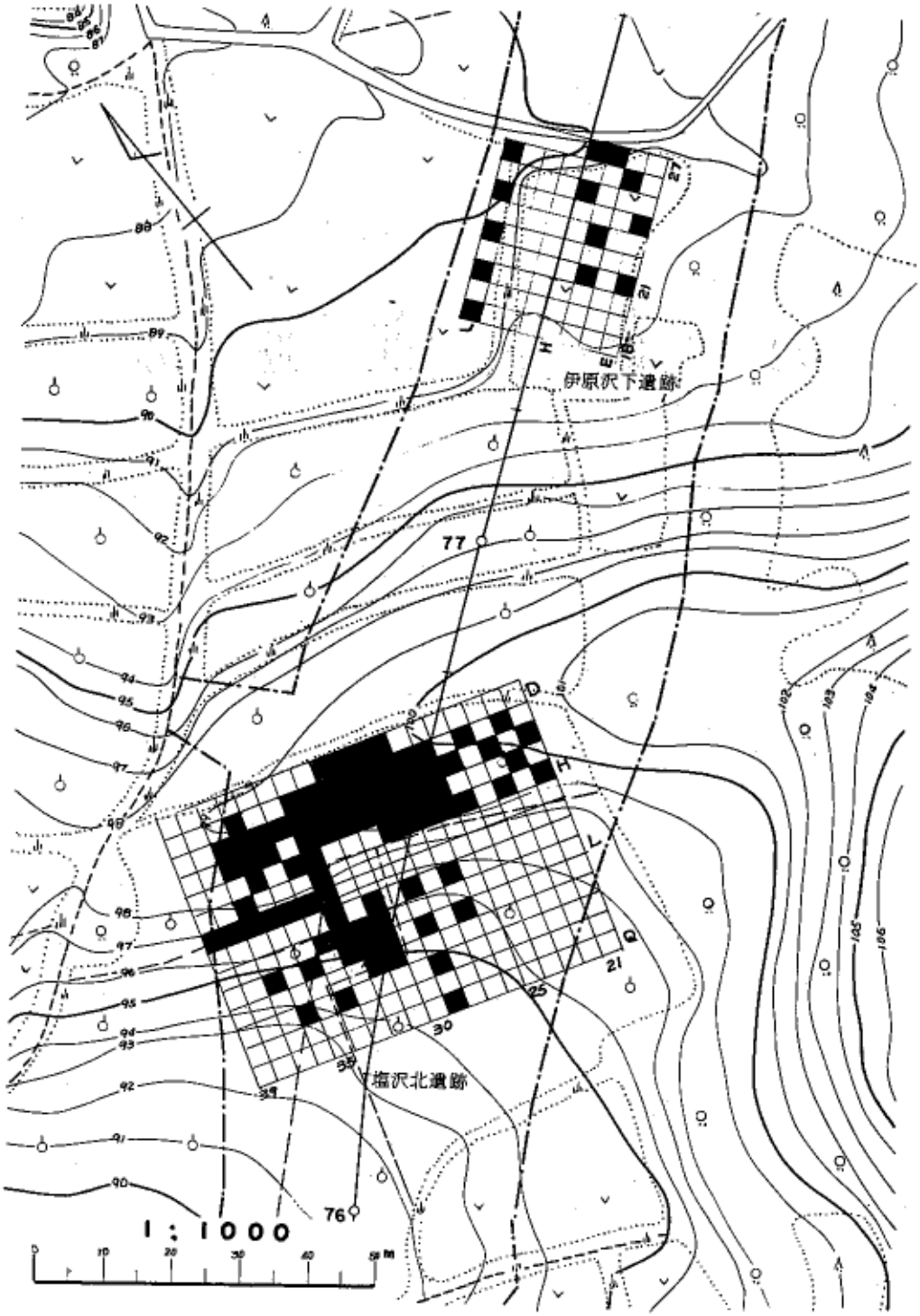
（2）縄文時代早期、弥生式時代後期（円田式）、古式土師器の時代に営まれたものである。

（3）玦状耳飾は、縄文式時代前期あたりのものと思われる。アメリカ式石鏃は弥生式時代後期（円田式）に、砥石は古式土師器の塩釜式期に相当すると思われるが、砥石については確証がない。

（4）埋甕の性格は不明である。住居跡などの遺構に伴うものではない。

（藤　沼　邦　彦）

(八)　塩沢北遺跡



第34図　塩沢北遺跡、伊原沢下遺跡地形図

塩　沢　北　遺　跡

１　遺跡所在地

宮城県刈田郡蔵王町円田字塩沢北

２　調査期日

昭和45年9月15日～10月9日

３　調査主体者

宮城県教育委員会　日本道路公団

４　調査担当者

宮城県教育庁社会教育課　技術主査　志間泰治
技師　藤沼邦彦
嘱託　白鳥良一

５　調査参加者

東北大学文学部考古学研究室　　西脇俊郎・佐藤庄一・高野芳宏

東北学院大学　　鈴木清
宮城教育大学考古学研究会　　土岐山武・太田昭夫
立正大学　　阿部恵

６　調査の概要

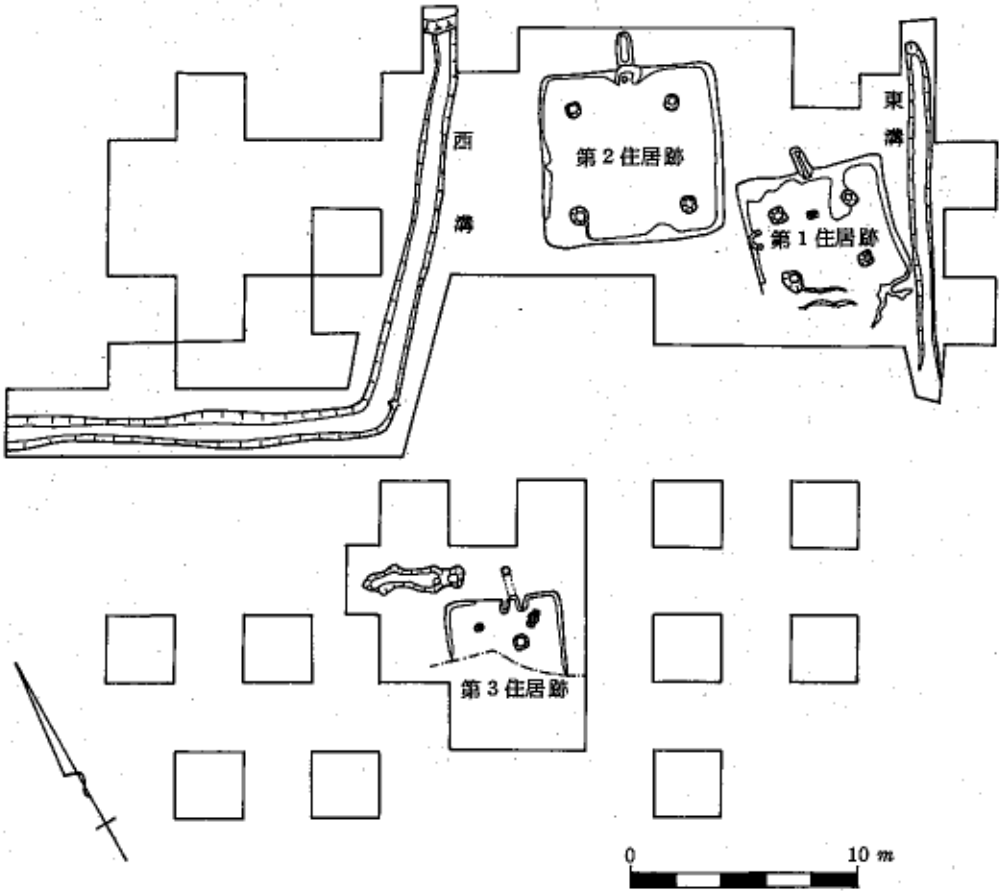
（１）遺跡の立地

塩沢北遺跡は愛宕山丘陵から西へつきでた舌状台地の平坦面から南斜面にかけて営まれた遺跡で、円田盆地の東麓に位置する（第１図）。遺跡の範囲は広く、道路敷地の西側の畑でも土師器、石製模造品が出土している。また附近には遺跡が多く、次に報告する伊原沢下遺跡は良好な包含層、遺構の発見はなかったが、この沢の奥にも土師器片の分布がみられる。北西の円田中学校庭の整地工事の際にも土師器が出土したという。更に西方の水田にのりだした低い台地にもやはり土師器を出土する塩沢台西遺跡がある。

（２）調査経過

塩沢北遺跡は道路敷地にかかる部分では、土師器の細片が数片表採できるにすぎなかった。しかし住居の立地条件に適すると思われたので台地上の平坦面と南斜面に東西57m×南北42mの範囲にグリットを設定し、738㎡を発掘調査した（第34図）。

その結果、古墳時代の遺物と竪穴住居跡、溝などの遺構を検出できた。台地の平坦部

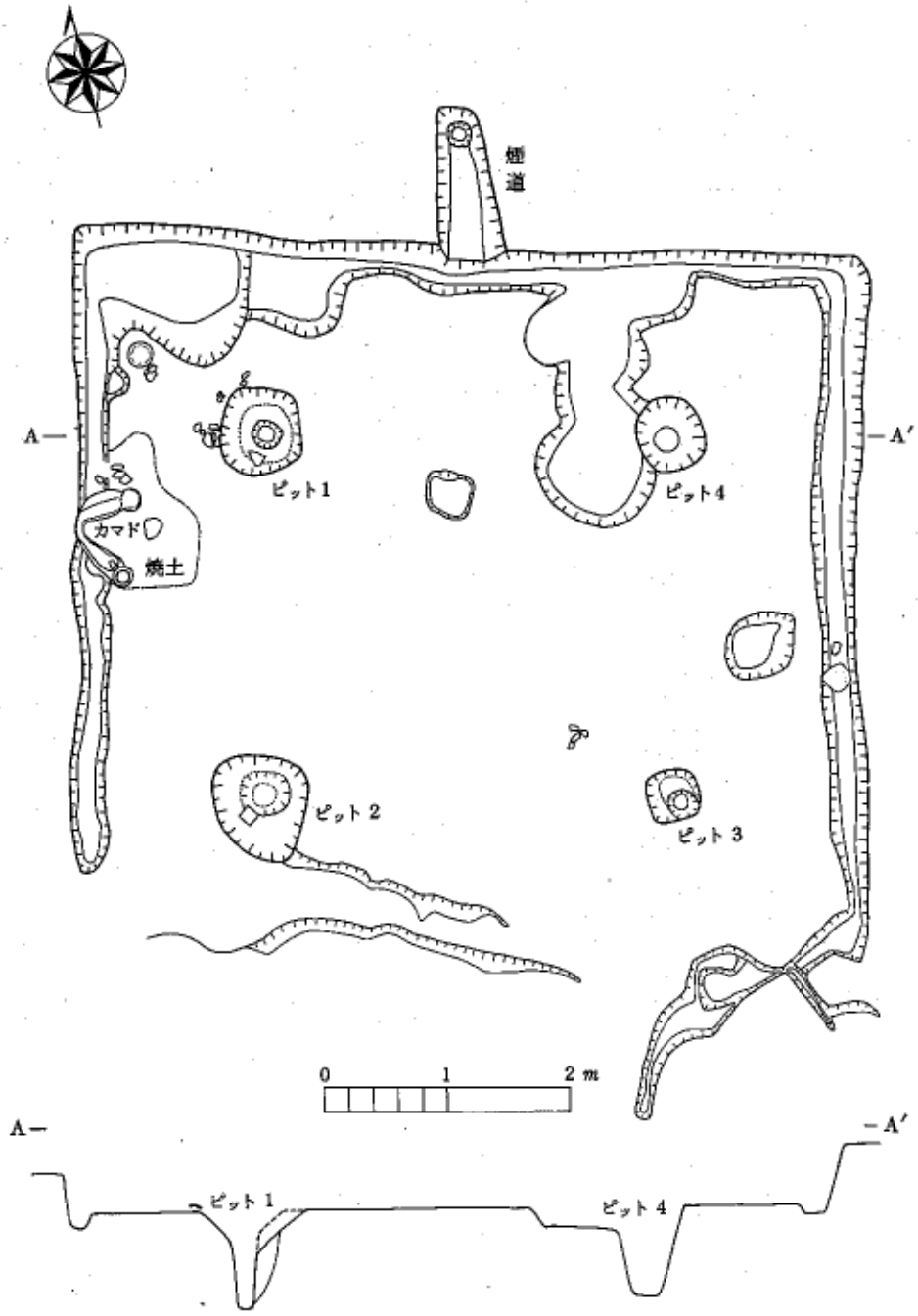


第35図　塩沢北遺跡平面図

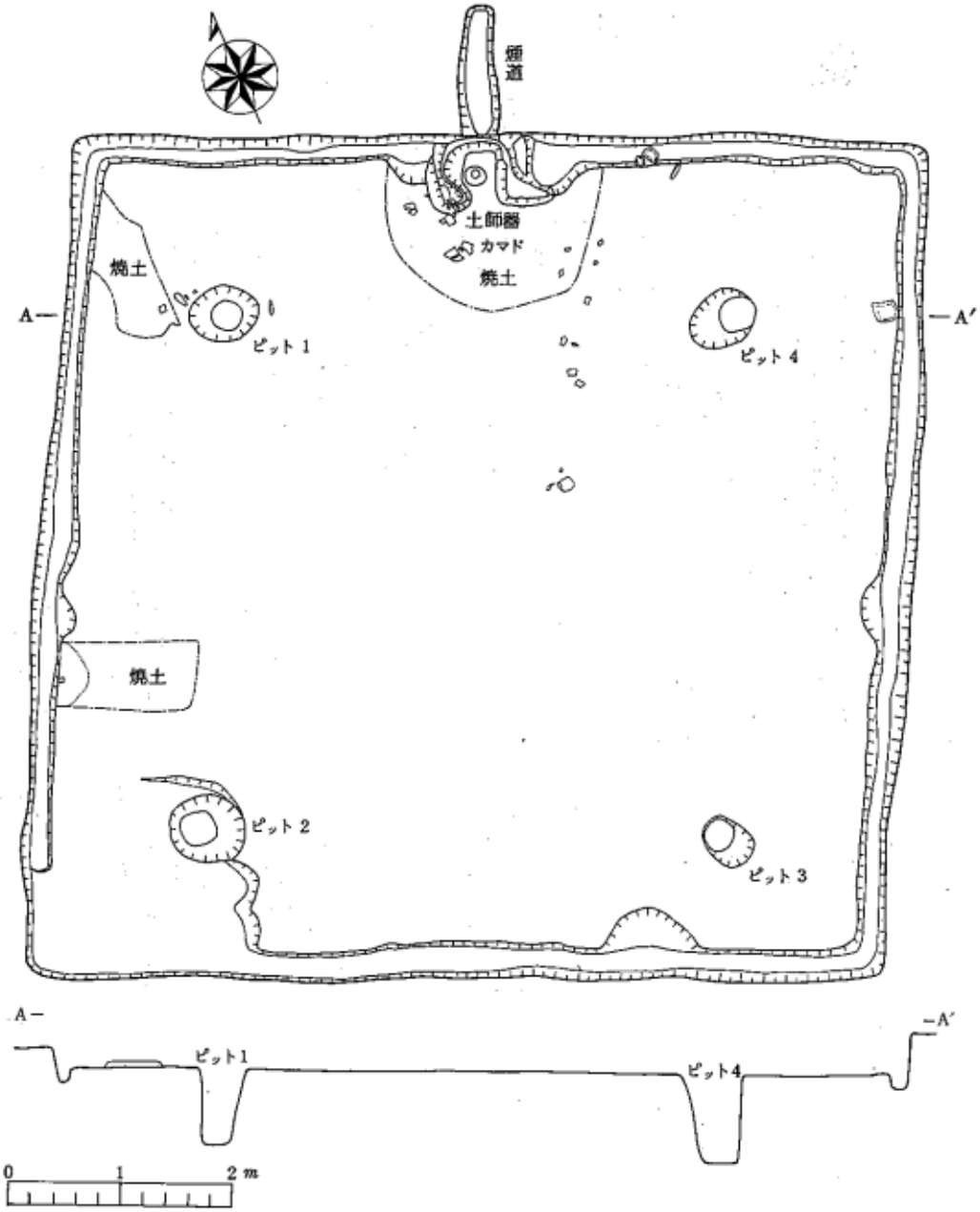
は表土が浅く20cm前後でローム層に達するが、斜面を下るにつれ覆土は厚くなる。遺構は表土直下のローム面に掘りこまれていたので、比較的検出が容易であった。遺構以外の地点では遺物はあまり出土しなかった。

（３）発見遺構

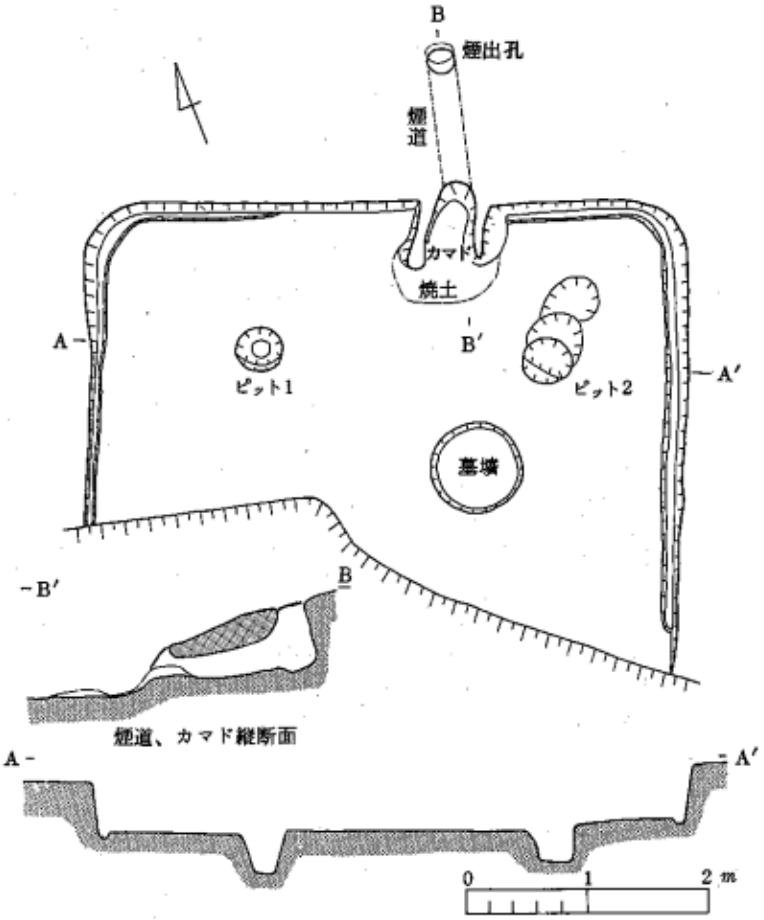
住居跡は台地上の平坦面に２軒（東から第１号、第２号とする）、一段低い南斜面に１軒（第３号）を検出できた（第35図）。溝は第１号住居跡の東に１本、第２号住居跡の西に１本検出できた。また第３号住居跡の近くにも溝状の落ちこみがある。但し東溝については、サクサクとした柔らかい腐植土が落ちこみ、出土遺物もなく後世のものと考えられた。



第36図　塩沢北遺跡第1号住居跡



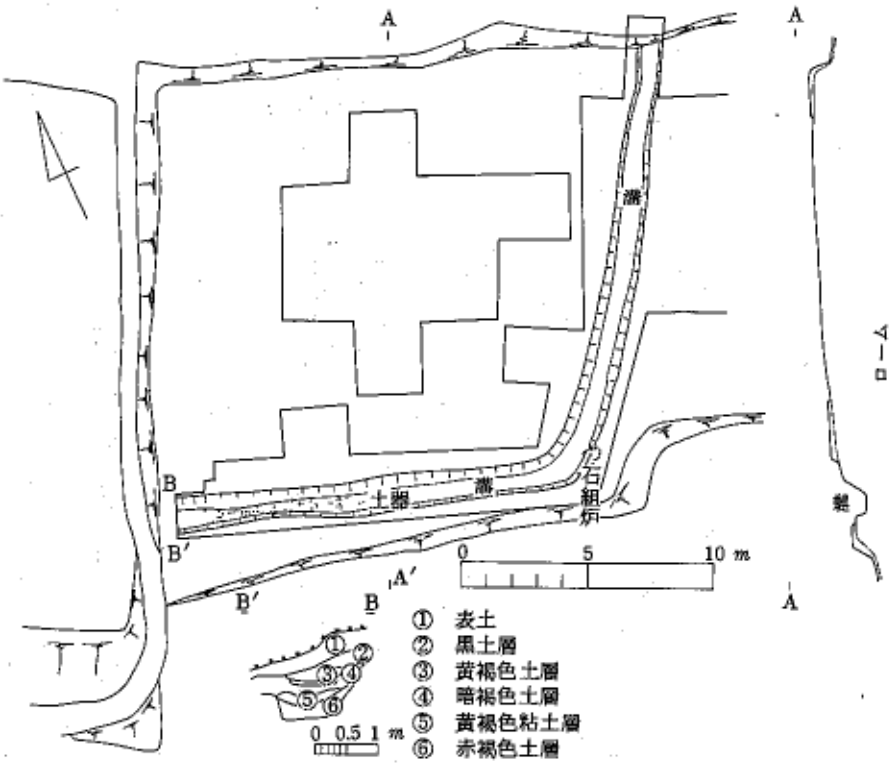
第37図　塩沢北遺跡第2号住居跡



第38図　塩沢北遺跡第３号住居跡

第１号住居跡（第36図、図版30）

北壁の長さ6.5m、東壁の現在長5.7mの方形プランを呈する住居である。ゆるい傾斜地のため南壁に近い所では耕作のため削られていた。表土を剥ぐとすぐロームで容易に遺構面を検出できた。遺構確認面より床面までの高さ（確認できる壁の高さ）は北壁で50～60cmある。床面はロームで、黒土が混っているが固くしまっている。柱穴は４個（ピット１～４）ある。そのうちピット１では掘り方と本来の柱穴との区別が確認できた。ピット２も区別がつきそうであったが中心杭があるため確認できなかった。柱穴の床面からの深さは66～72cmである。壁の内側には巾15cm、深さ５～10cmの周溝がめぐるが、南側の部分は削平されていて確認できなかった。



第39図　塩沢北遺跡西溝

北壁の中央に焼土の分布がみられたがカマドはすでになく、長さ1.1mの煙道のみが壁の外にのこっていた。西壁中央附近にも焼土が分布し、粘土でカマドがつくられていた。カマドの両裾には甕形が倒立しておかれてあった。カマド焚口の補強と思われる。煙道はない。カマドの下に周溝があるので、周溝がつくられたのちに構築されたものである。カマドの北脇には土器の破片が多かった。

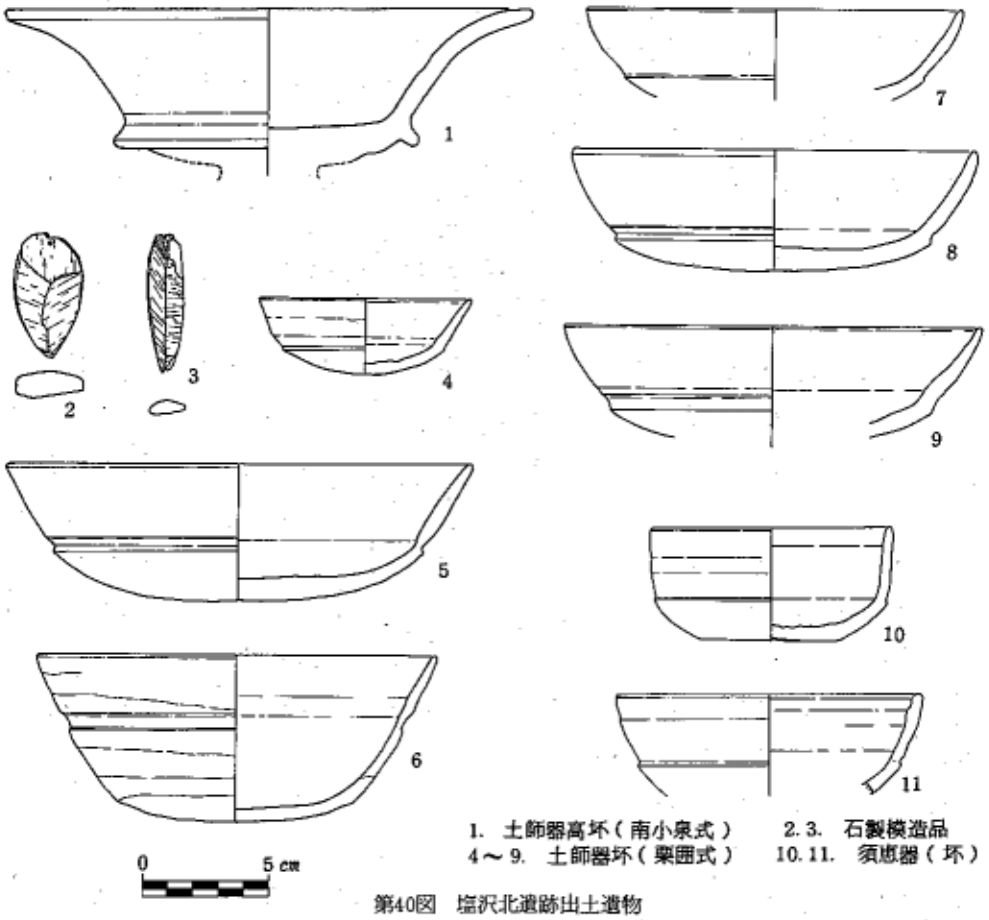
使用年代はカマド周辺から出土した土師器によって栗囲式期に相当すると思われる。

埋土、床面からは土師器の甕や坏に混って須恵器の坏が２点出土した。

第２号住居跡（第37図、図版31）

東西7.6m×南北7.4mの方形プランである。表土をはぐとすぐ遺構面であった。現存の壁の床からの高さは北壁で30～40cm、南壁で５～16cmしかない。壁はほぼ垂直で保存がよかった。

床面はロームで堅くしまっていたが、周辺では軟弱な部分もあった。柱穴は４個（ピット１～４）あり、住居跡の隅を結んだ対角線上にほぼ位置する。黒褐色土のやわらかい土が埋没していて検出は容易であったが、掘り方と本来の柱穴との区別はできなかっ



第40図　塩沢北遺跡出土遺物

た。深さは床面から64～110cmである。壁の内側には幅15～18cm、深さ10～14cmの周溝がめぐるが、南西隅に近い所では一部とぎれる。

北壁中央からやや西によった所に、粘土構築のカマドがある。残存する基部は幅96cm長さ70cmあり、馬蹄形をなし、長さ120cmの煙道をもつ。カマド内部には甕形土器が１個倒立して出土したが、これは煮沸の際に甕をささえる支脚の役割を果したものと思われる。カマドの下には周溝があり、周溝のつくられたあとに構築されたことを示す。周辺には焼土の堆積や土器片が多かった。

埋土、床面からの出土遺物には土師器（坏・甕）、鉄製刀子、石製模造品などがある使用年代はカマド周辺出土の土器から栗囲式期に相当すると思われる。

第１号住居跡と第２号住居跡とは、ほんの僅かしか離れていないので両者の軒先は接触する可能性がつよく、同時に存在したとは思われないが、先後関係については不明である。

第３号住居跡（第38図、図版32上）

北壁の長さ4.7m、東壁の現存長2.5mで隅丸方形のプランを呈すると思われる。傾斜地のため、南の約1/3が削られて消失している。表土をはぐと、すぐ遺構面で、北壁の床面からの高さは約65cmである。床はローム面で全体的によくしまっていた。柱穴は２個検出したが、他は削平のため不明である。深さは各々36cm、28cmある。掘り方との関係はつかめなかった。壁の下には幅10cm、深さ５～10cmの周溝がめぐるが、北壁のカマドの西半では周溝は見られない。

カマドは北壁のほぼ中央にある。長さ46cm、幅86cmの馬蹄形の基部が残っており、長さ120cmの煙道を通じて煙出し孔に続く。煙道の天井部はよく保存されていた。

出土遺物は少なく、カマド周辺の床面に少量の土師器があったにすぎない。それによると他の住居跡同様に栗囲式期に属する。

また床面検出の際に、直径74cm、床面からの深さ10cmのピットがあらわれ、手づくねの小形土製品と宋銭が出土したが、どの面から掘りこまれていたのか確認できなかった。宋銭は７枚あるが、おそらく六道銭と思われ、このピットは近世の墓壙と推定された。

この第３号住居跡の北西には長さ4.5m、幅１mの溝状おちこみがあり、栗囲式の坏と甕が出土している。性格は不明である。

西溝（第39図、図版29下）

第２号住居跡の東側に幅1.3～1.5m、深さ0.5～1mのＬ字形の溝状遺構が検出された。北は後世につくられた段のため消滅しているが、西は道路敷外までのびているようである。発掘できた範囲での溝の長さは33mある。曲り角の外側東側に石組炉と思れるものがあり炭、焼土の分布がみられた。この炉が溝と直接関係があるのか不明である。溝の埋土からは多くの土師器破片が出土した（図版29下）。高坏が最も多いのが注目されたが坏、甕の破片も少量みられた。これらの時期は南小泉式に相当する。

第１号、第２号住居跡の位置する平坦面は西に道路敷をこえてのび、その地点でも南小泉式土器の破片や石製模造品が発見されている。従って、台地西部に南小泉式期の集落があって、検出された溝はそれを画する周溝の一部ではないかと考えられる。

（４）出土遺物（第40図、図版32下）

多数の土師器（坏、甕）を中心に、須恵器（坏）、鉄製刀子、石製模造品が出土した。これらの整理はほとんどなされていないので、代表的なものを図示して概略を述べるにとどめたいと思う。（第40図）

土師器は大きく南小泉式と栗囲式に分けることができる。南小泉式は第１号住居跡の埋土

などからも数片出土したが、西溝の埋土からでたものが大部分である。器形では高坏が多く坏、甕も少量出土した。高坏（第40図１）は特徴的で、坏部の口縁が大きく外反し、坏底部と口縁部の境の屈折部に稜線がつくものが多い。脚部は円筒状あるいは中ぶくらみの形状を示し、やや開く裾部がつく。坏部の内外面および脚部の外面は丹念にヘラミガキされるが脚部内面は粘土紐巻き上げ痕やシボリメなどが残されている。これらの高坏は後にのべる円錐台状で３～６個の円窓のつく脚部を有する大橋遺跡のものとは明確に異なる。栗囲式は各住居跡の埋土、床面（特にカマド周辺）から多数出土した。甕と坏が大部分で、壺や高坏などはみられないようである。甕形土器は形態に変化が多く、未だ観察が不充分であるので省略する。坏（第40図４～９）は口縁が内弯ぎみにひらき、底部との境に段が形成される。内面は丹念にヘラミガキが行われ、更に多くは黒色化されるがそうでないものもある。体部外面はヘラその他でヨコナデ調整を受ける。底部はヘラケズリによって広い平底に近い丸底を呈するのが大部分である。また第１号住居跡では須恵器坏が共伴している（第40図10・11）。口縁部はロクロで調整され、底部との境に段をもつ。底部（段から下）はひとつはヘラケズリされているがもうひとつは明瞭でない。これは栗囲式のものととらえてよさそうである。

石製模造品は剣形２個（第40図２、３）、小玉１個発見された。小玉は表土からであるが、剣形は第２号住居跡の埋土と床面から各々１点づつ出土した。このことから少くとも剣形は栗囲式に共伴したと考えられるが、この地点は床面といっても傾斜地のため、埋土層のうすい所であるから南小泉式に伴うものが混入した可能性もある。今後の類例をまちたい。

7　まとめ

①古墳時代中期（南小泉式期）の溝状遺構と後期栗囲期の竪穴住居跡３軒を検出した。これらは住居跡・集落跡研究にとって重要な資料となりうる。

②竪穴住居跡および、溝状遺構から多数の土器が出土した。この組合せを整理することによって、古墳時代の土師器、須恵器編年に寄与しうると思れる。

（藤　沼　邦　彦）

（九）　伊原沢下遺跡

伊　原　沢　下　遺　跡

１　遺跡所在地

宮城県刈田郡蔵王町円田字伊原沢下

２　調査期日

昭和45年9月10日～20日

３　調査主体者

宮城県教育委員会　日本道路公団

４　調査担当者

宮城県教育庁社会教育課　技術主査　志間泰治

技術　藤沼邦彦

嘱託　白鳥良一

５　調査参加者

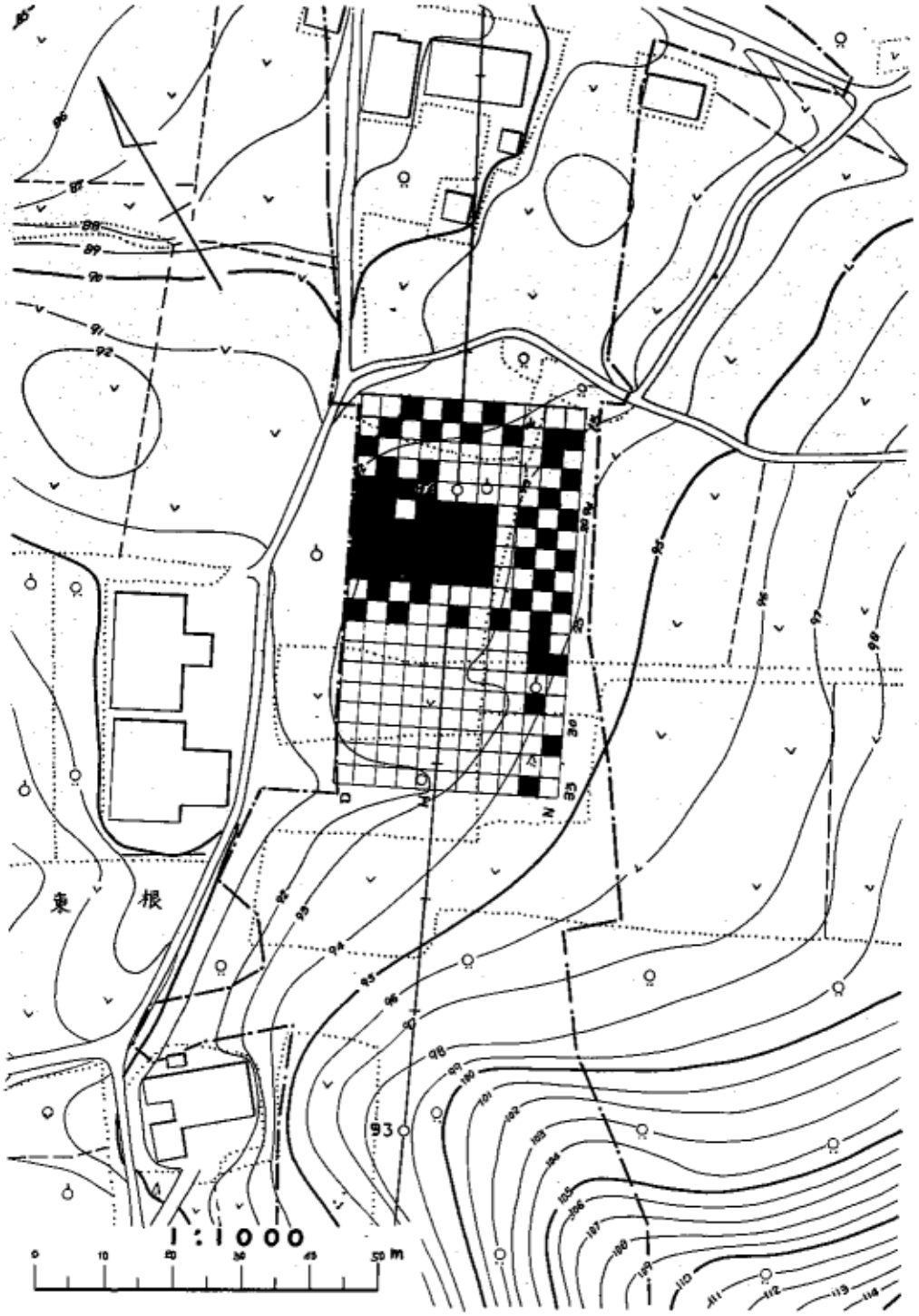
東北大学考古学研究室　　福田友之

６　調査の概要

伊原沢下遺跡は、塩沢北遺跡のある台地の北斜面下方の平坦な畑地にある（第１図）。東西24m×南北30mの範囲で、グリットを設定し、117㎡を発掘調査した。しかし、良好な包含層、遺構の発見はなかった。内黒ロクロ坏・高坏脚部などの若干の土師器の細片と北宋銭（元豊通宝）一枚が発見されたにすぎない。

（藤　沼　邦　彦）

（十）　大（おお）　橋（はし）　遺　跡



第41図　大橋遺跡地形図

大　　橋　　遺　　跡

1　遺跡所在地

宮城県刈田郡蔵王町円田字大橋

2　調査期日

昭和45年11月20日～12月20日

3　調査主体者

宮城県教育委員会　日本道路公団

4　調査担当者

宮城県教育庁社会教育課　技術主査　志間泰治

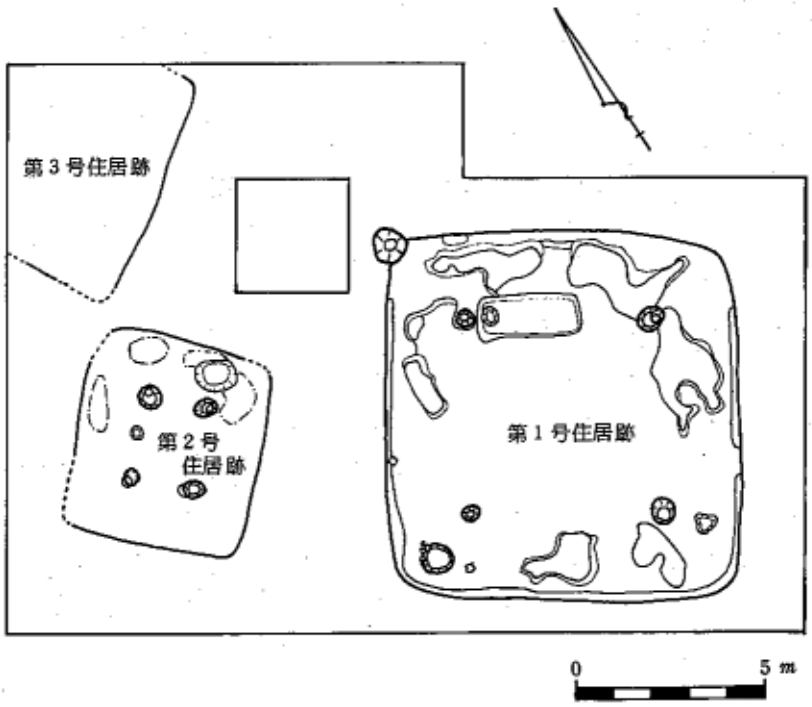
技師　藤沼邦彦

嘱託　白鳥良一

5　調査参加者

東北大学考古学研究室　　西脇俊郎・岩渕康治

宮城教育大学考古学研究会　　高橋守克・土岐山武・太田昭夫



第42図　大橋遺跡平面図

６　調査の概要

（１）遺跡の立地

大橋遺跡は、愛宕山丘陵から円田盆地にひらけた谷合いに北面するゆるい傾斜地にある（第１図）。遺跡と盆地の水田面との比高は12～60mであるが、住居跡の発見された地点では約９mである。

遺跡としての広がりは大きく、ゆるやかな斜面一帯に40m×80mの範囲で、弥生式土器および古式土師器の散布がみられる。

また、沢をはさんだ向かいの南斜面には、次に報告のある弥生式土器片、内黒ロクロを出す赤鬼上遺跡があり、北西350mの所には、薮川の土手の改修工事で、多量の古式土師器を出土した都囲遺跡がある。

（２）調査経過

道路敷内の最も平坦な地区に33m×57mの範囲でグリットを設定し、そのうち592㎡を発掘調査した（第41図）。その結果、遺構としては、古墳時代の竪穴住居跡３軒を検出した。遺物も主として竪穴住居跡の埋土や床面から出土したものである。住居跡は検出した順に各々１号、２号、３号住居跡とした（第42図）。

（３）検出遺構（竪穴住居跡）

三軒とも古式土師器を伴う竪穴住居跡である。県内の古墳時代の住居跡では最古のものである。

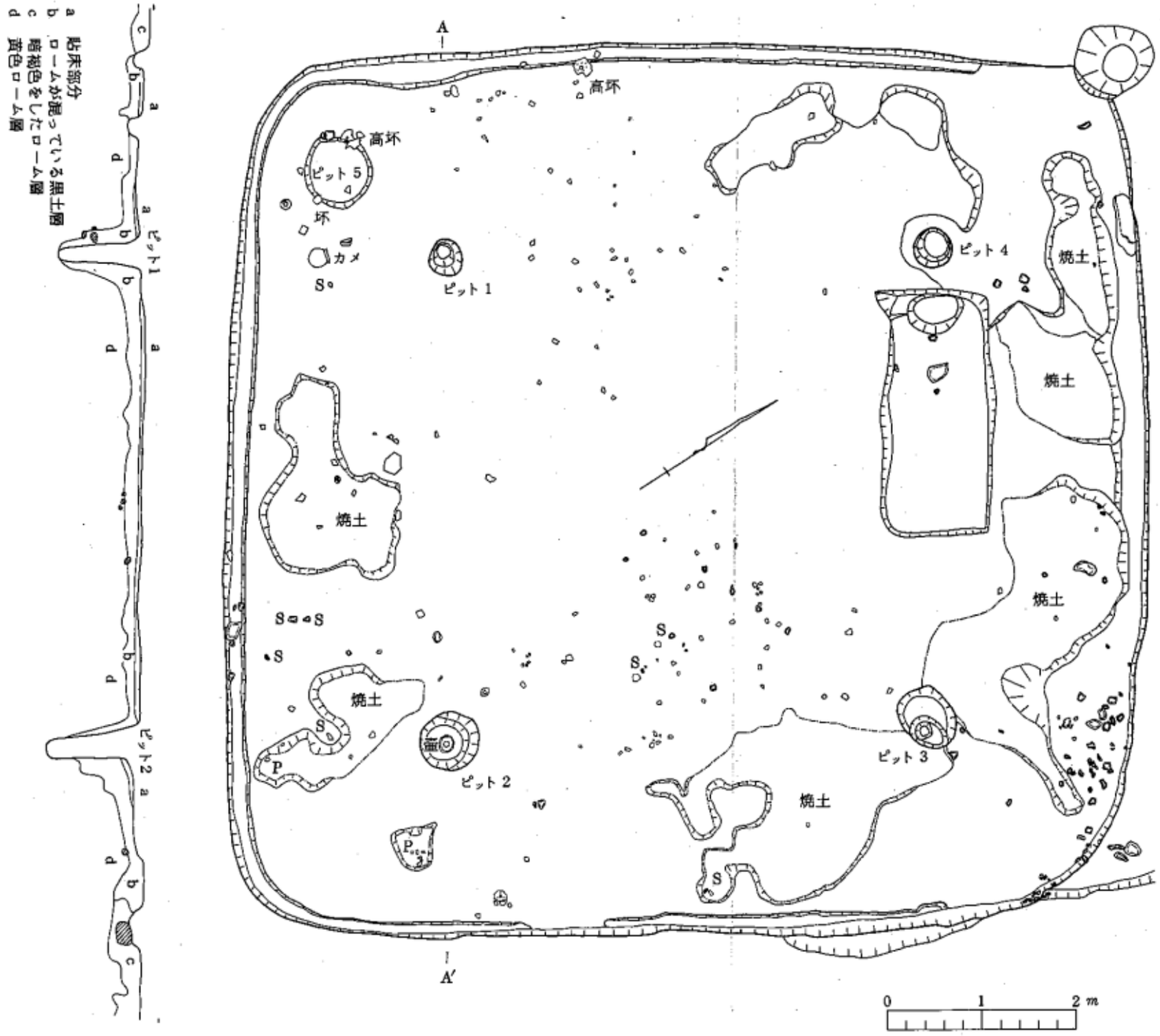
ａ　第１号住居跡（第43図、図版33下）

東西9.4m×南北9.8mのほぼ方形のプランを呈する大規模な住居跡である。三軒の中で最も大きい。但し、東北隅はまるみを帯び、北西隅では後世の掘りこみがあって、コーナーの正確な形は確認できない。

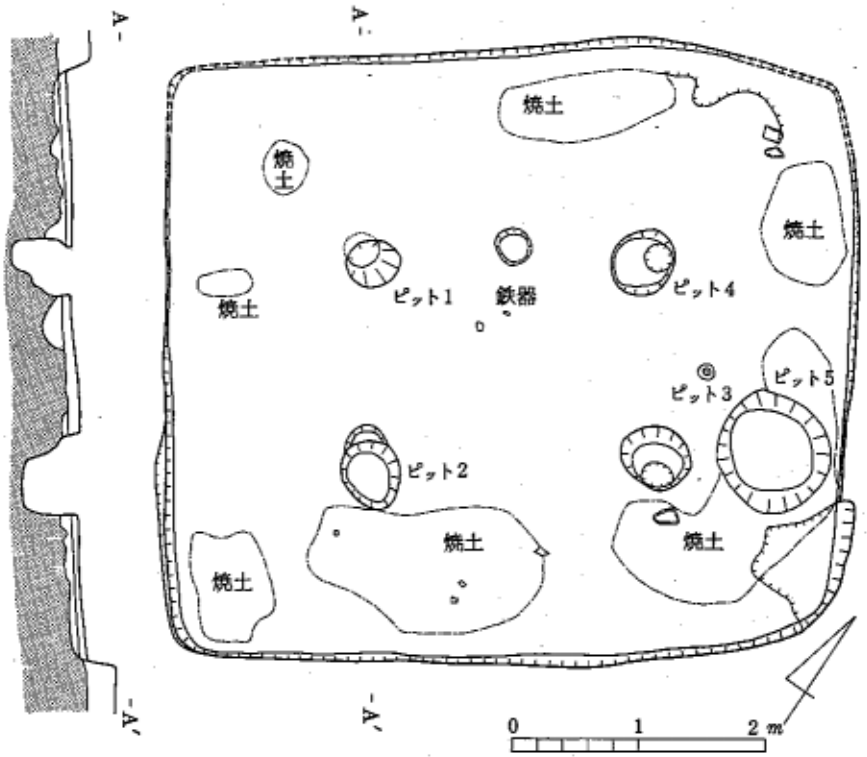
竪穴住居跡がどの面から掘りこまれたかは不明で、東壁ではローム面で、西壁では茶褐色土層ではじめて遺構面が確認できたにすぎない。遺構確認面より床面までの深さ（現存の壁の高さ）は東壁で25cm、西壁で20cmである。

ローム混りの床面は中央部が固くしまり、周辺にいくに従って軟かくなるが、土器の散布する面でもかなりよく確認できた。

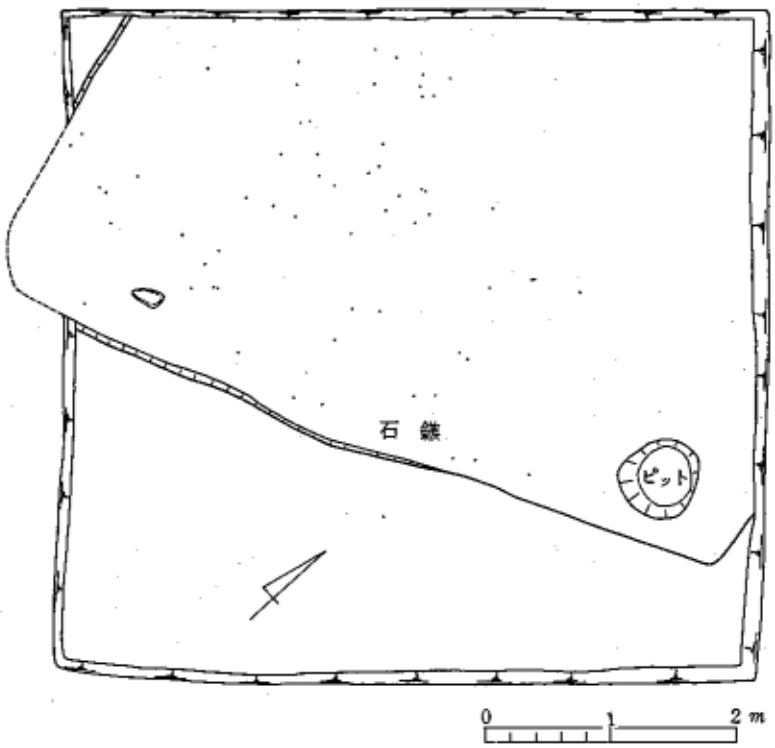
柱穴は４個（ピット１～４）ある。掘り方と本来の柱穴とは上からは区別できなかったが断面を見るとピットの埋土と掘り方を埋めた土（黒土色）とが区別された。従って、住居跡の柱が立てられたのちに床が貼られたと思れる。



第43図　大橋遺跡第1号住居跡



第44図　大橋遺跡第２号住居跡



第45図　大橋遺跡第３号住居跡

壁の下には、巾10㎝、深さ10㎝の周溝がめぐっていた。

また周溝の内側に沿って多量の焼土の分布が見られた。この焼土は、床面との間に黒土層をはさみ、しかも焼土自体、中央部にむかって傾斜した層となっているので、本住居跡の火災などによって生じたものでなく、住居が廃棄されて、しばらく時間を経たのちに、外側から投げこまれたものと思われる。

カマドや炉の施設が作られた痕跡はない。西南隅に近い所に直径70㎝、深さ50㎝のピット５があって、内部から高坏などの破片が出土した。これは貯蔵穴かも知れない。

床面下に床面と同型式の土師器片を含む黒土層やピットが存在する。これは、本住居の構築方法および複合、拡張などの問題を提起するが、充分吟味できていない。また、住居の年代は、床面やピット５出土の高坏、坏、甕によって、塩釜式期に位置づけられる。

第２号住居跡（第44図、図版34上）

西南部の一部を掘りすぎたが、東西4.9m×南北5.5mの、ほぼ隅丸長方形のプランを呈する住居跡である。茶色味を帯びた暗褐色土層を掘りこんで作られているが、どの面から掘りこみが始まったかは確認できなかった。現存の壁の高さは約12㎝である。

床面は黒土まじりの汚れた黄色ロームが貼られている。中央周辺の床面は固く、壁に近づくにつれ軟かくなる。第１号住居跡と同様に床面の下に黒土層がある。

柱穴は４本（ピット１～４）ある。掘り方と本来の柱穴とは断面でも区別がつかなかった。柱穴の深さは45㎝～53㎝である。

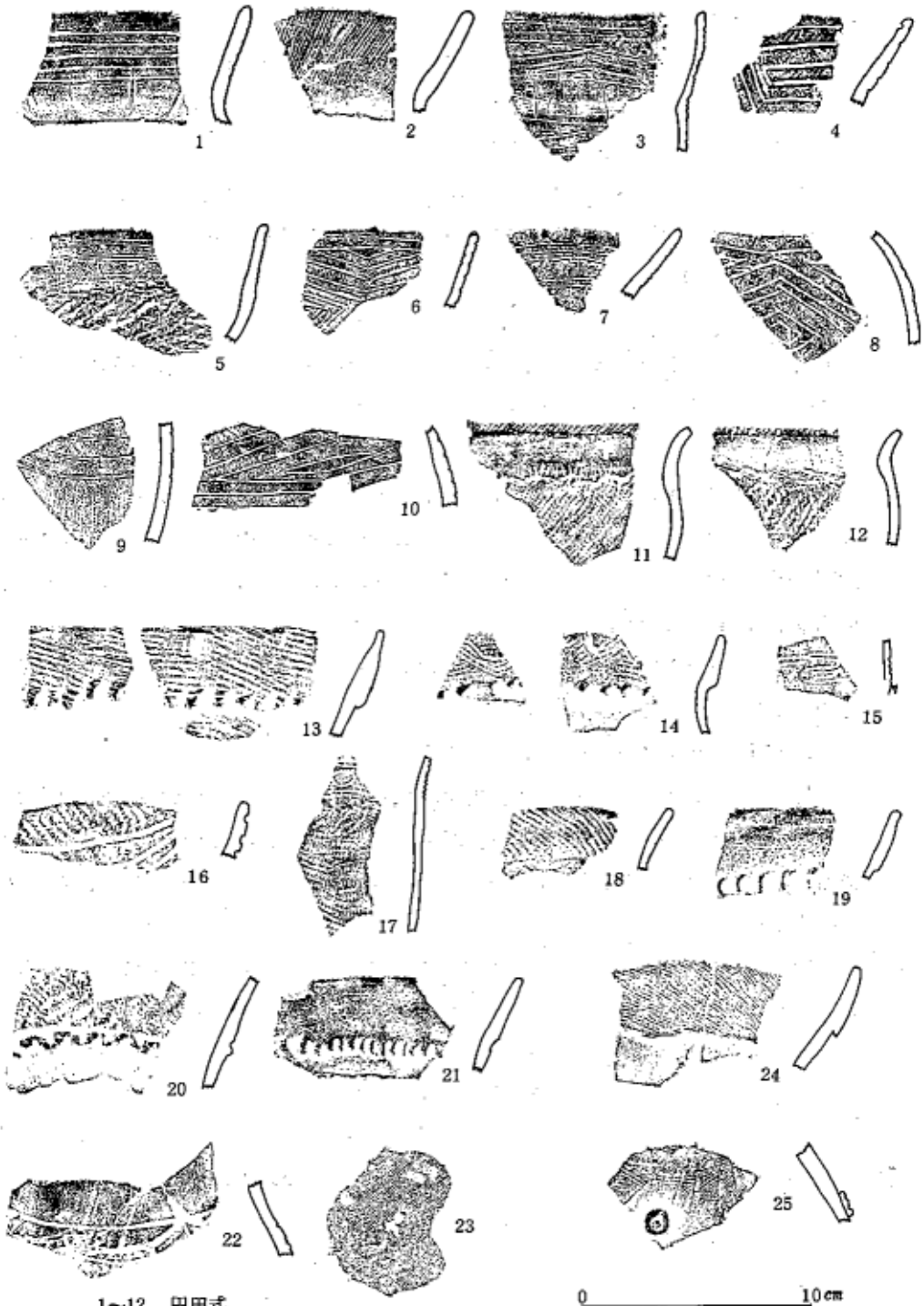
周壁に沿って、大量の焼土が分布していた。この焼土も、床面との間に黒土層をはさみ、住居跡の中心に向って傾斜しているので、第１号住居跡の場合と同様に、住居跡が廃棄されて、ある程度の時間を経過したのちに、外側から投げこまれたものであろう。

周溝はない。炉、カマドの設備も認められなかったが、東壁の中央から南によった附近の床面が赤く酸化しているので、ここに簡単な火の設備があった可能性はある。貯蔵穴はない。ピット５は後世の掘りこみである。

住居跡の埋土、床面から弥生式土器片、土師器、鉄器が出土した。また住居跡の年代は、床面出土の器台等によって、塩釜式期に位置づけられる。

第３住居跡（45図第）

土器が平らに出土する面で、はじめて住居遺構であることに気がついた。半分は道路敷外になるので完掘はできなかった。全体をすでに床面近くまで掘ったため、壁も明瞭に把えることは困難であったが、ほぼ方形（或は長方形）のプランを呈する住居跡であ



1～12　円田式
13～22　天王山式
23　布痕土器（底部）
24・25　古式土師器？

第46図　大橋遺跡弥生式土器、土師器拓本

ることを推察できた。

床面はまったくの黒土で、中央部が非常に固くしまり、壁の周辺は軟かい。

柱穴は検出できず、ピット１個を発見したのみである。このピットからは赤彩された土師器の坏が出土した。貯蔵穴であろうか。

遺物には、弥生式土器片、土師器、石鏃があり、主にうめ土、床面から出土した。

住居跡の年代は床面ピットおよび坏（第48図２）、徳利形壺（第48図５）、によって、塩釜式期に位置づけられる。

（4）出土遺物

大橋遺跡の出土遺物には、古式土師器（復元可能なもの15点）、弥生式土器片、石鏃（2点）、紡錘車（１点）、鉄製品（１点）がある。

Ａ、弥生式時代の遺物（第46図）

弥生式土器は、数は少ないが後期のものとしてはまとまった良好な資料である。大きく、円田式と天王山式に分れるが、なかには弥生終末期のものなのか、あるいは古式土師器に属するのか区別しにくいものもある。観察が不充分なので、ここでは各々の型式の拓本を示すにとどめた。

石鏃は２点あり頁岩製である。第３住居跡のうめ土と床面から出土した。有茎のものと無茎のものとがある。（第48図12）

Ｂ、古墳時代の遺物（第47、48図、図版34下、35）

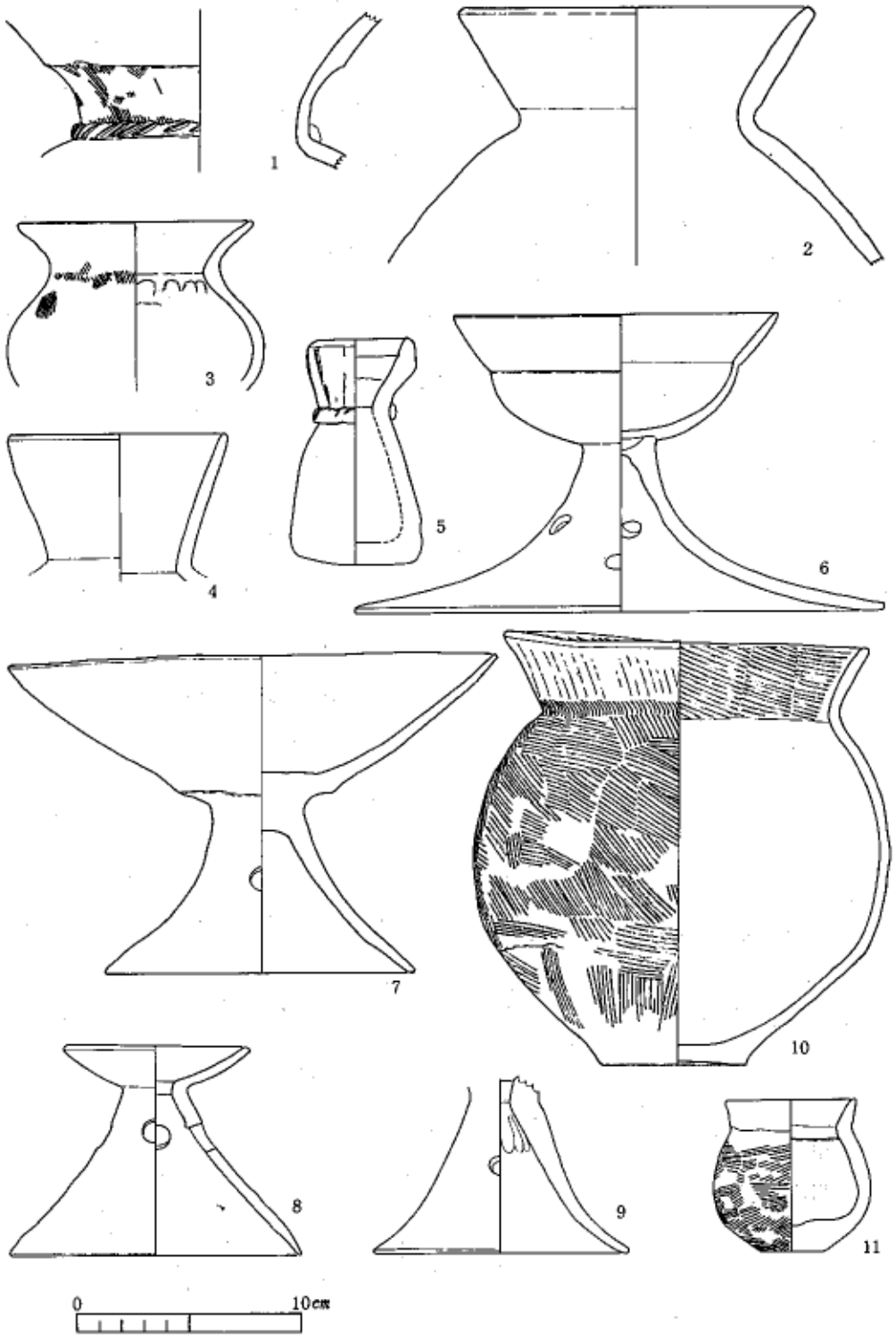
三軒の住居跡の土師器はすべて同一型式に属し、器形や製作時の調整技術によって、土師器編年の第１様式（塩釜式）に相当する。ここでは、各住居跡の土師器を一括して概略を述べることにする。器形によって、壺・甕・高坏・器台・坏に分類できる。

壺形土器

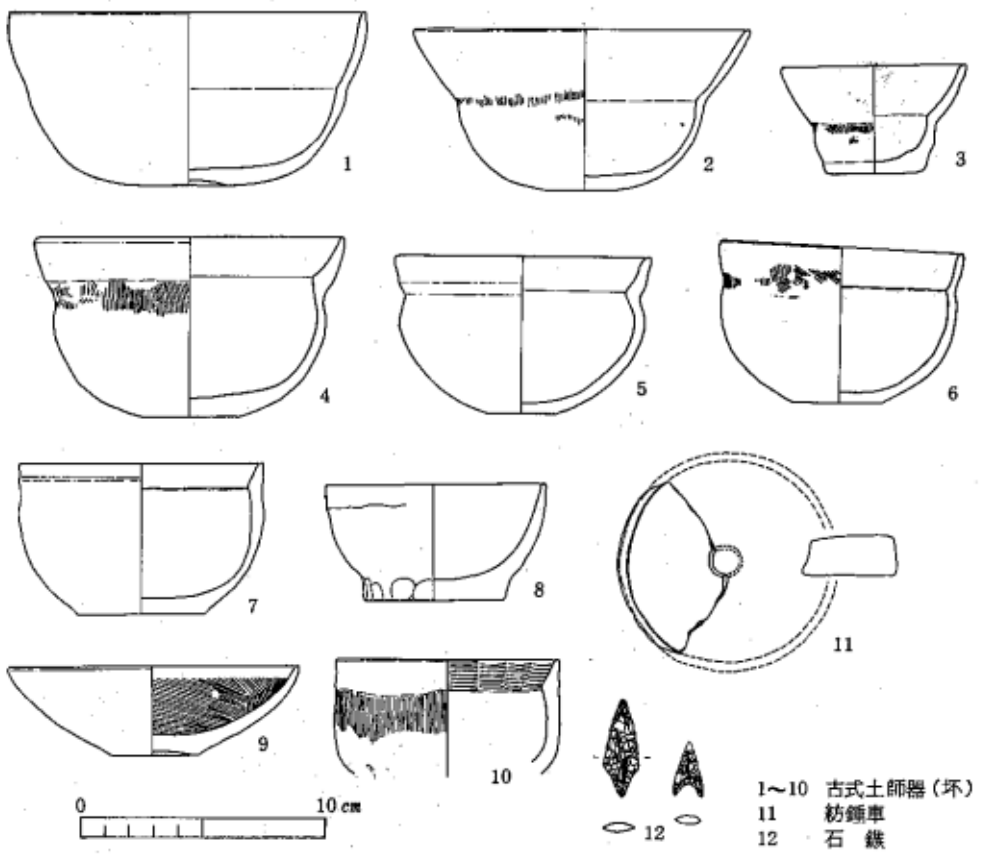
形態に色々と変化があり、細分の必要があるが一括しておく。口縁部は、外面に段のあるもの（二重口縁）とないものとに大別される。多くの土器は刷毛目調整をしたあとに、ヘラミガキ或はヨコナデ調整が行われたらしく、頚部附近に部分的に刷毛目を残すものが認められる。一般に、外面の作りは丁寧である。体部全面に赤彩をほどこされた破片もある。

第47図１は二重口縁で、頚部のつけ根に刻目ある隆帯がめぐっている。第47図５は特殊な器形で徳利形をしているが、頚部には、やはり刻目がある。隆帯がめぐっているのが特徴である。

そのほか、二重口縁の段の部分に撚糸文がつき、赤彩されているものや、同心円のボタンを貼りつけた体部破片がある。この２点は弥生式末期のものか、或はその影響を残



第47図　大橋遺跡出土古式土師器



第48図　大橋遺跡出土遺物

した土師器なのか区別しにくいが、古式土師器である可能性がつよい。

甕形土器

個体数は各器形の中で最も数が多いと思れるが、完形品は２個しかない。体部は内外面とも刷毛目調整が目立つが、口縁はヨコナデ調整を受ける。底部は平底となる。外面は火を受けて赤くなっているものや煤が附着しているものがあって、煮沸につかわれたことを示す。第47図11は小形土器で果して甕形としてよいか疑問であるが、一応ここに分類しておく。

高坏形土器

破片はかなりあるが、坏部と脚部の関係がわかるものは２点しかない。坏部の内外面および脚部の外面はヘラミガキで丁寧に仕上げているものが多い。脚部の内面は刷毛目やナデ調整痕が残っている。坏部の形態は、口縁部がくの字形に外反し、体部がまるみ

をもつもの（第47図６）と口縁部が外側にまっすぐにのび、坏部の底部との境に屈折を有するもの（47図７）とに分れる。数の上では後者が多いようである。脚部の形態は円錘台状を呈し、３～６個の円窓をもつのが一般的である。

第47図６は、口縁部の内外面から脚部外面にいたるまで赤彩がほどこされ、脚部の裾が横に広がるのが特徴的である。脚部の円窓も６個あり、「飾られた土器」という印象が強い。

器台

坏部と脚部が接合した姿を示すものは一点しかない。坏部は小さくて浅い皿形を呈しており、底部から脚部内側に通じる貫通孔がある。脚部は円錘台形で、３個の内窓をもち高坏の脚部と区別がつかない。受部内外面および脚部外面は丁寧にヘラミガキされるが脚内面は刷毛目、ナデの痕跡が残される。この点で高坏の器面調整と共通する。なかには赤彩されるものもある。

坏形土器

形態に色々の変化がある。大きく、（１）口縁部が外反し、体部がまるみを帯び、小さな平底或は軽いあげ底となるもの（埦の形態に近い）、（２）口縁部がやや直上し、頚部と胴部が区別が瞭明でないもの、（３）口縁部が外側にまっすぐにのびるものに分けられる。器面調整として、まず全体に刷毛目あるいはナデによる調整が行われ、そのあとヘラミガキや口縁部でのヨコナデ調整がなされる。従ってヘラミガキがあるものでも、頚部は附近に刷毛目が部分的に残されるものが多いし、またヘラミガキの手順を一切はぶいたものもある（第48図８）。

第48図１は（１）と（２）の中間的な形態を示す。内外とも丁寧にヘラミガキされ、全面に赤彩されている。第48図５も体部内面と底部を除いて赤彩されている。第48図９は外面は丁寧にヘラミガキされるが、内面は刷毛目調整そのままである。

鉄製品

一点しかない。第２住居跡の床面に密着して出土した。断片であると思れるが、割れ目がはっきりつかめない。用途は不明である。この時期の鉄器普及を考える上で、貴重な資料である。

土製紡錘車（第48図）

厚さ1.5㎝、復原すれば直径９㎝となる大形品である。断面は台形に近い。上面は軽くヘラミガキされるが、下面と縁部はナデの痕跡のみである。第１号住居跡の埋土から出土したものであるが、土師器に伴うものとみてよさそうである。

7　まとめ

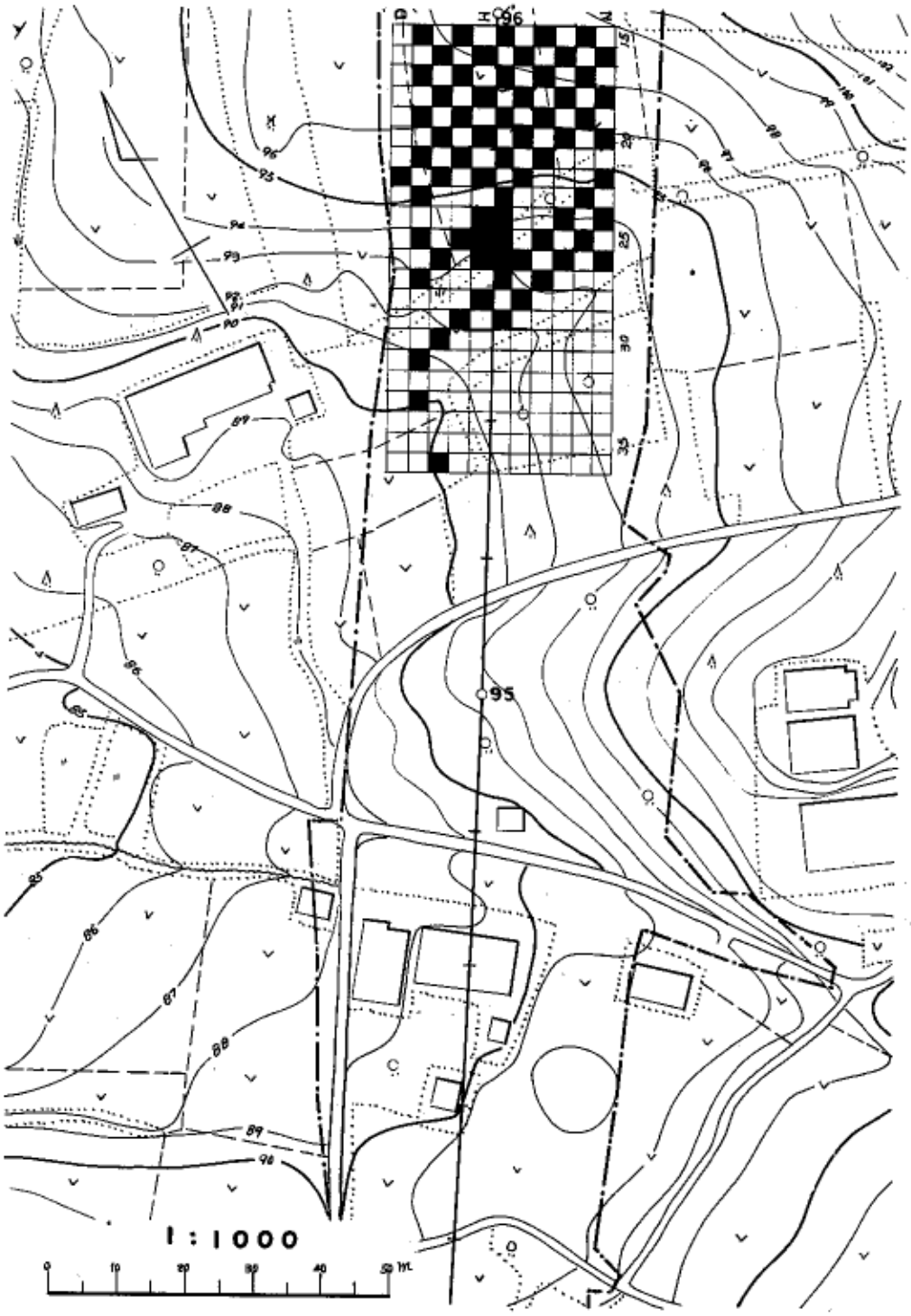
1　大橋遺跡は弥生式時代後期から古墳時代前期にかけての集落遺跡である。

2　弥生式時代後期の円田式および天王山式土器の資料が量的には少ないがまとまっているので、この時期の研究では好資料となりうる。また、弥生式終末期の土器から古式土師器への変遷過程についても大きな問題を提起するものとなろう。

3　住居跡出土の古式土師器は、第１様式に属し、実年代は４世紀後半から５世紀初頭になると思われ、東北地方の古墳時代文化では最も古い位置を占める。しかも器形の組合せが揃っているので、古式土師器編年の標準資料になりうる。

4　住居跡の発見は、東北地方の初期古墳文化の中での庶民の生活の場を明らかにしたものであり、土師器・紡錘車・鉄製品も当時の日常生活の一部を物語るものである。特に鉄製品は用途は不明であるが、この時期の鉄器の普及という問題を考える上で重要である。　　（藤　沼　邦　彦）

（十一）　赤鬼上（あかぎかみ）遺跡



第49図　赤鬼上遺跡地形図

赤　鬼　上　遺　跡

１　遺跡所在地

宮城県刈田郡蔵王町平沢字赤鬼上

２　調査期日

昭和45年12月2日～22日

３　調査主体者

宮城県教育委員会　日本道路公団

４　調査担当者

宮城県教育庁社会教育課　技術主査　志間泰治

技師　藤沼邦彦

嘱託　白鳥良一

５　調査参加者

東北大学文学部考古学研究室　　西脇俊郎、岩渕康治

宮城教育大学考古学研究会　　高橋守克・佐藤好一・土岐山武

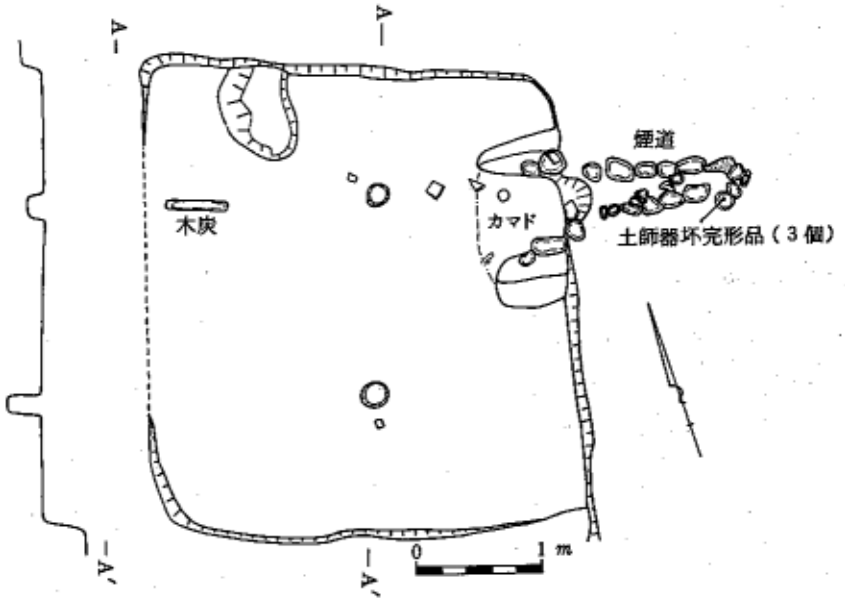
６　調査の概要

（１）遺跡の立地

赤鬼上遺跡は愛宕山丘陵から西に突き出している舌状台地の突端部に位置している（第１図）。遺跡はこの舌状台地の南緩斜面に形成され、台地中腹から裾部にかけての畑地に弥生式土器や土師器、須恵器の破片が散布している。台地の裾部には浅い埋没谷が台地に添つて走つている。遺跡の立地する台地とその西に開けている円田盆地の水田面との比高は約15mである（第49図）。

（２）調査経過

調査は道路敷の中心杭を基準に東西33m、南北66mの範囲にグリッドを設定して行なつた。まず台地裾部の埋没谷の部分から発掘を開始し、市松状に掘り進んで順次台地上部に発掘区を拡げていつた。層は埋没谷付近で３層認められるが、特に良好な遺物包含層はなく、表土から第３層にかけて弥生式土器や土師器、須恵器などの破片が断片的に出土する程度であつた。しかしG25区付近では石組みのカマドと煙道をもつ竪穴住居跡が１軒検出されたため、付近の区を更に拡張して他の遺構の検出に努めた。住居跡が検出された区より北側の高い地域は畑に開墾された際、大規模な土砂の移動がなされたらしく、薄い表土の下はすぐ地山で遺構は見られず、遺物も殆んど出土しなかつた。



第50図　赤鬼上遺跡住居跡

今回の調査における発掘面積は69区621㎡である。

（３）発見遺構

検出された遺構は竪穴住居跡１軒だけである（第50図、図版36下、37上）。

住居跡の規模は東西3.3～3.5m、南北は現長約3.7mでほぼ方形プランを呈すると思わる。地山が北から南へ４～５°傾斜しているため南と西の壁は残つていない。特に南側ではロームが床面より１段低く下がつており、このロームの下がる部分が住居跡床の南限と考えられた。北壁の現存する壁の高さは約32cmである。床面はロームで非常にかたくしまつている。床面には径15cm、深さ10～15cmの小さなピットが２個検出されたが、これが柱穴であるかどうかは不明である。周溝は認められない。東壁のやや北寄りにカマドと煙道がある。カマドは両側に河原石をおき、そのまわりを粘土で固めたものでカマド内部には約10cmの厚さで焼土が堆積していた。煙道は河原石を整然と並べて構築されてあり、長さ約1.5m、幅約40cmである。煙道末端部の南側からは土師器の内黒ロクロ坏の完形品が３個重ねられたままの状態で発見された。他に住居跡床面直上付近から土師器や須恵器・鉄鏃などが発見された。

（４）出土遺物

弥生式土器　出土数80点ほどである。いずれも小破片で、主として埋没谷の地域から出土した。口縁部破片から見ると、口縁部は外に大きくひらき、頚部でしまり、体部へ移行するに従ってややふくらみを持つ甕形土器が多い。口唇部と体部に細かい縄文ない

し撚糸文が施文され、頚部は無文のものが多いようである。また頚部と体部の境目に綾絡文がめぐるものもある。体部に細く鋭い沈線で渦状文や平行沈線文が施される壺形土器も少数見られる。底部には布痕のついたものが２点見られた。

これらの土器はいずれも弥生式時代後期の円田式に相当するものと思われる。

土師器　住居跡煙道脇から重なつた状態で発見された３個の坏以外はすべて小破片なのでこの３個の坏について観察すると次のようになる。

坏１（図版37－１）口径14.1㎝、器高5.2～5.4㎝、底部の径6.9㎝。底部から口縁部にかけてやや丸味をおびながらたちあがり、口唇部は内側が軽くそがれている。底部は回転糸切り手法によりロクロから切離した後、ヘラケズリの再調整を加えており、一部に糸切り痕が残っている。体部下端にもヘラケズリのなされた痕跡が認められる。内面はヘラミガキで黒色処理がなされている。内面底部のヘラミガキは放射状を呈す。胎土に多量の雲母を含み、焼成はあまり良くない。

坏２（図版37－２）口径13.9㎝、器高4.7㎝、底部の径5.8㎝。器形は坏１とほぼ同じである。底部はヘラケズリが全面になされ、糸切痕は見られない。内面にヘラミガキと黒色処理がなされている。内面底部は放射状にヘラミガキをした後、さらにその周囲をヘラミガキしている。体部外面に倒立した２字からなる墨書が見られる。上の字は『本』と読取れるがもう一字は欠損しているため判読できない。胎土焼成ともにあまり良くない

坏３（図版37－３）口径139㎝器高５㎝．底部の径５㎝。器形は坏１とほぼ同じである。全体的に表面がガサガサした感じで糸切り痕やヘラケズリの痕も見られない。内面は、ヘラミガキ、黒色化がなされているが、大部分は茶色に変色している。内面底部のヘラミガキは坏２の方法と同じである。体部外面に籾痕が見られる。胎土、焼成ともに不良である。

住居跡およびその他の区から出土した坏もこれら３点の坏とほぼ類似している。甕は長胴形のもののようであるが数が少なく詳細は不明な点が多い。

須恵器　叩き目、青海波文の見られる大甕、壺、台付坏などが見られるが、いずれも小破片で良好な資料はない。

7　まとめ

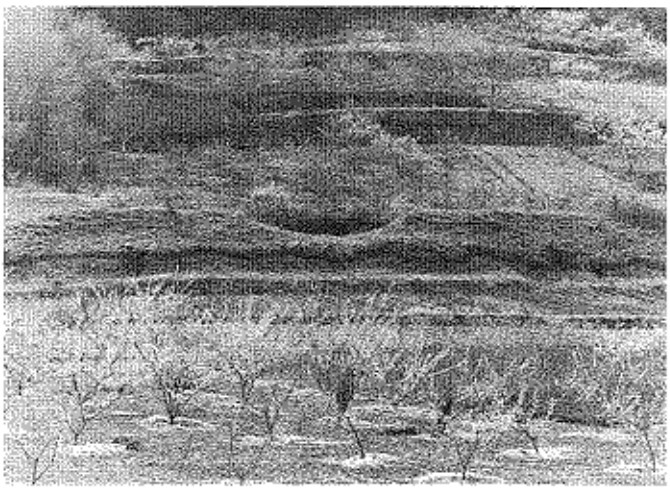
赤鬼上遺跡は大部分が開墾の際すでに破壊されていた。しかし破壊をまぬがれた台地裾部では土師器、須恵器を伴う歴史時代の竪穴住居跡が検出され、この台地一帯が歴史時代の集落であつた可能性も考えらる。住居跡煙道脇から重なつて発見された土師器などから見て住居の営なまれた時代は平安時代頃であろう。

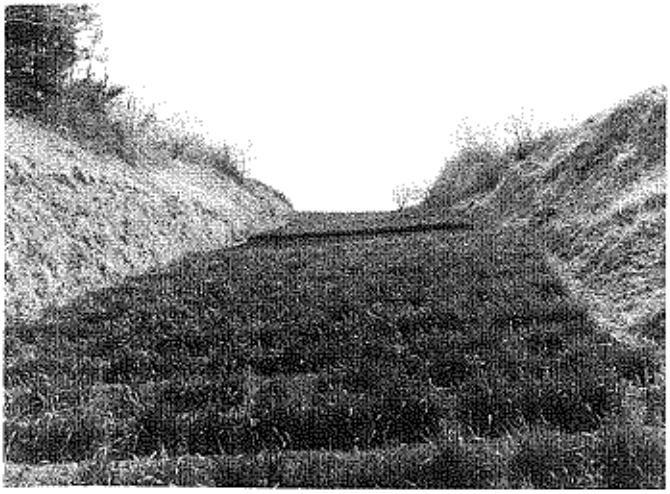
また埋没谷の地域からは時代的にまとまりを持つ弥生式時代後期の土器が採集された。

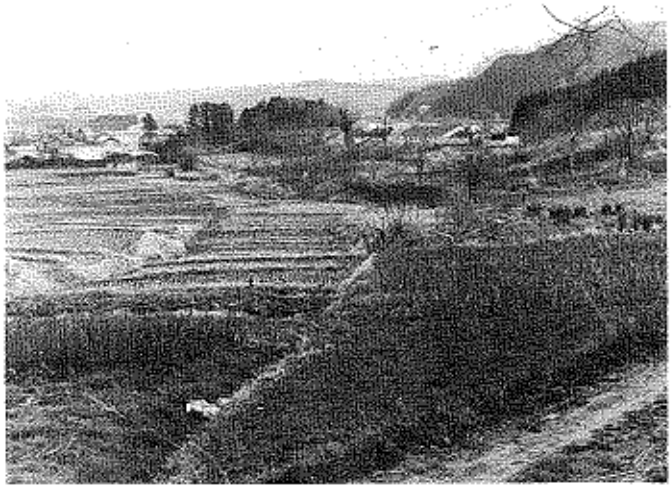
（白　鳥　良　一）

図　　版

図版 1.　宮　城　館　跡
上．西土塁断面、空堀から内域をみる
下．西土塁および空堀

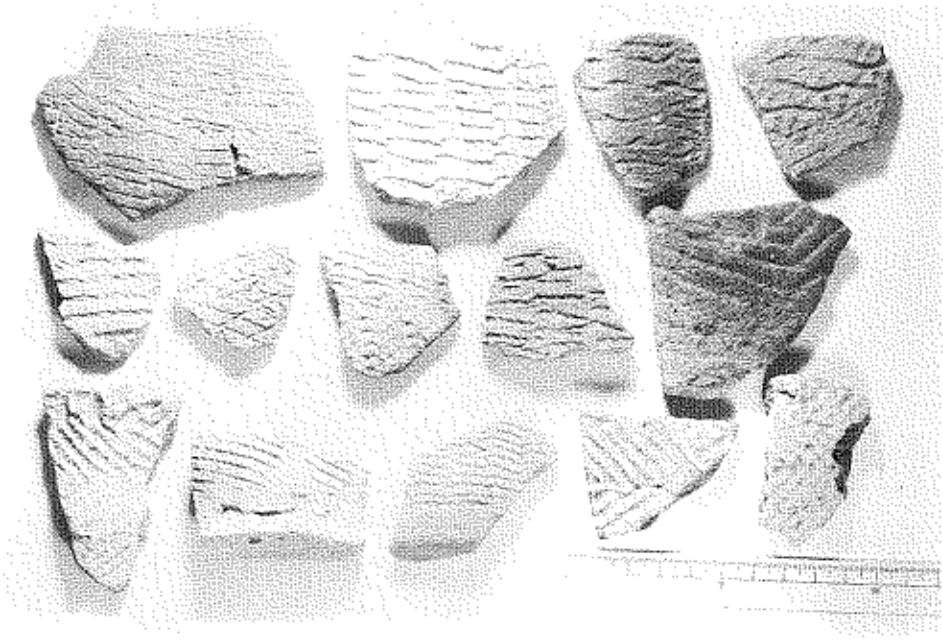


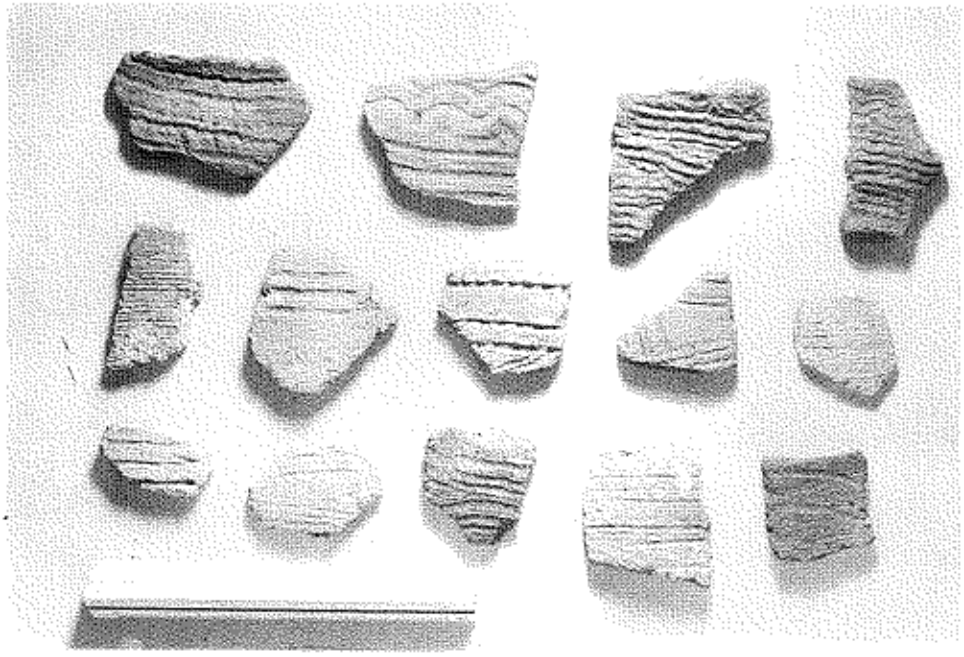




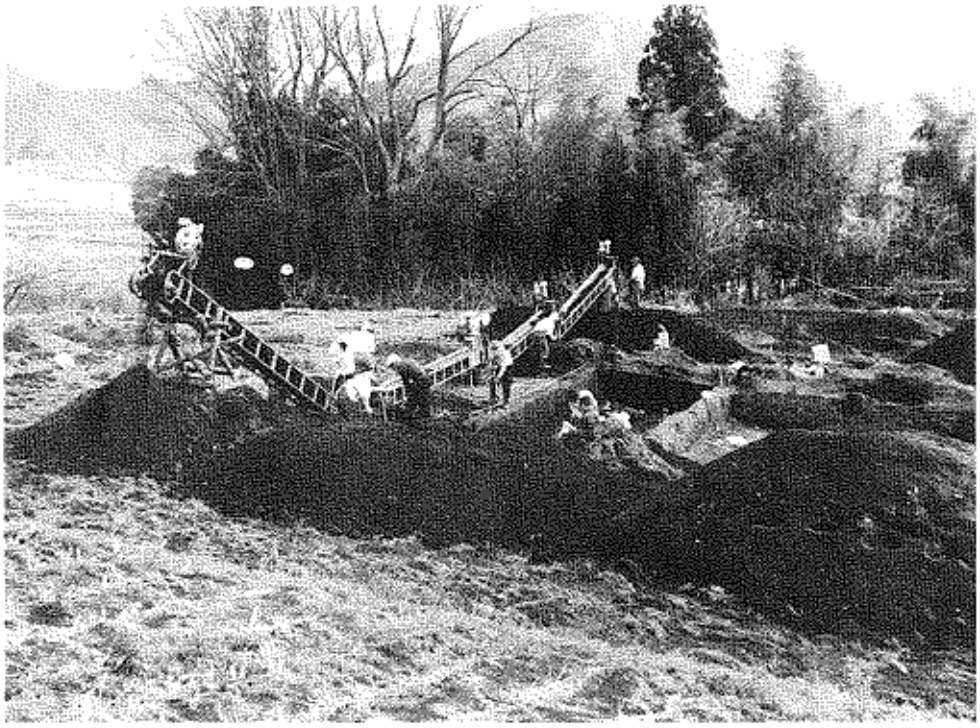
図版 2.　宮 城 館 跡　　中．西空堀
上．内部から西土塁をみる　　下．北空堀（一段低い水田列が堀）

図版 3. 欠　遺　跡
上．遺跡全景
下．溝およびピット

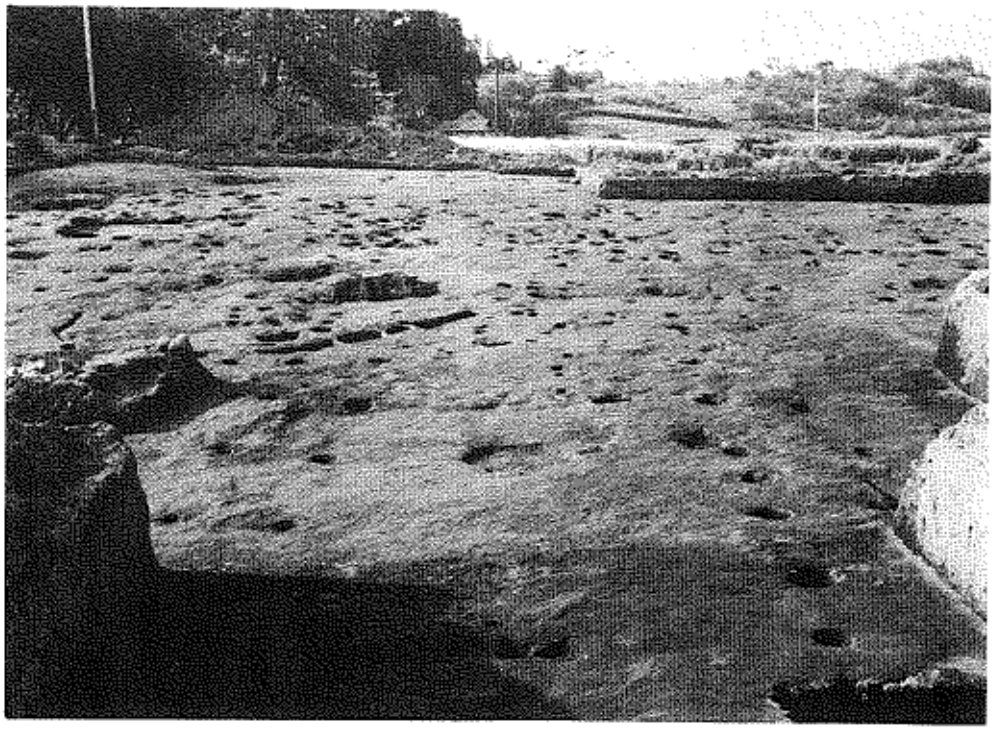




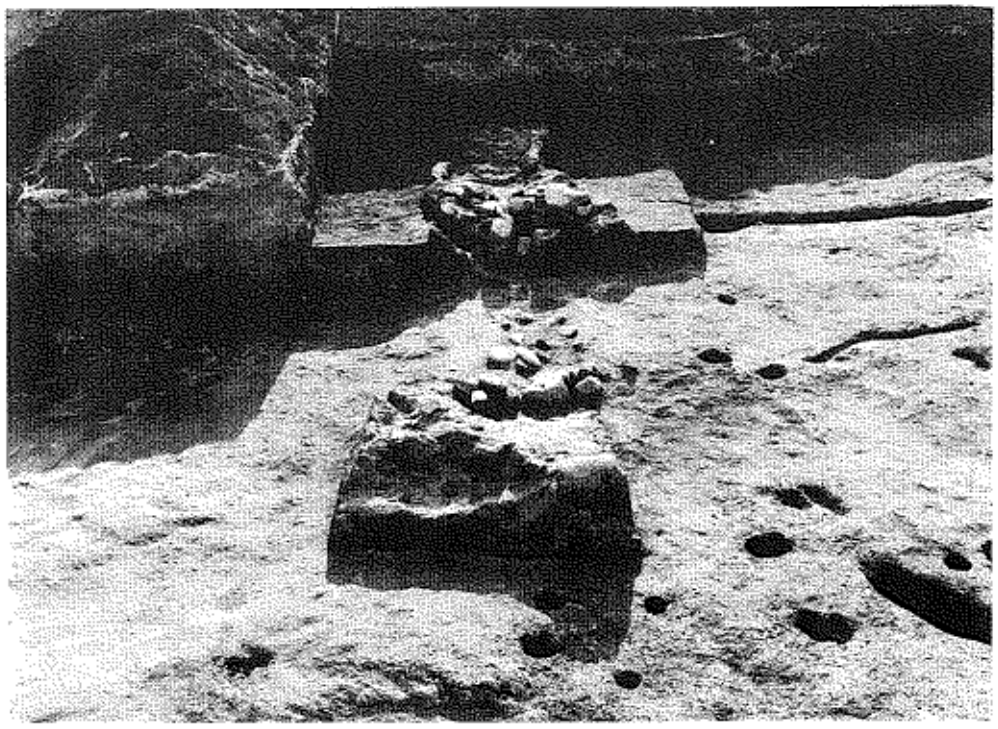
図版 4.　欠　遺　跡
縄文時代前期土器片（大木２Ａ式）

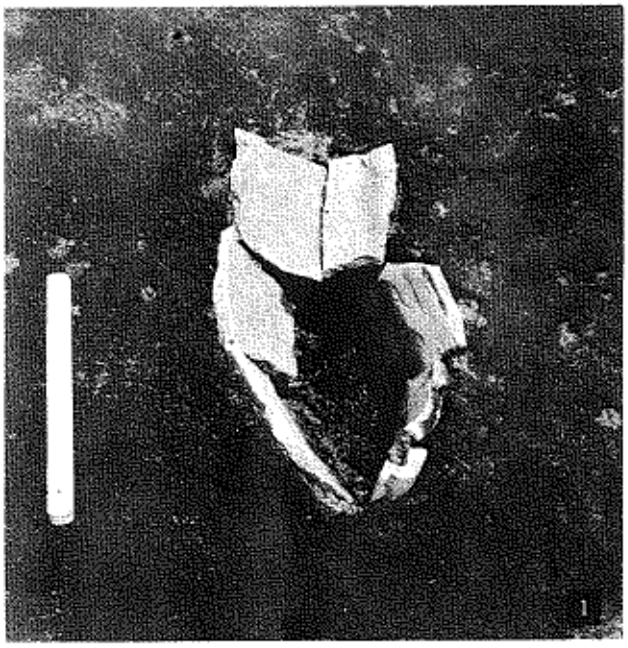


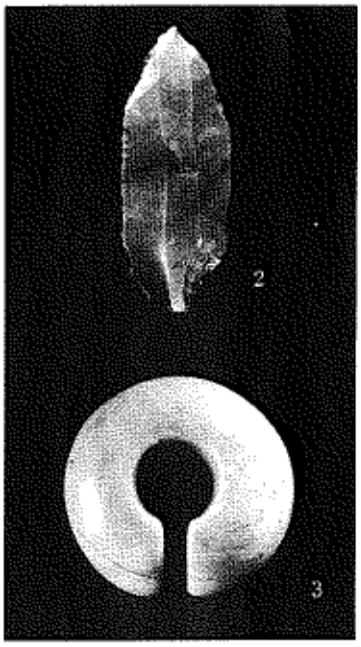
図版 5.　持長地遺跡
上．遺跡遠景
下．発掘風景



図版 6.　持長地遺跡
上．第 1 号建物跡（南からみる）
下．第 2，3，4 号建物跡（東からみる）

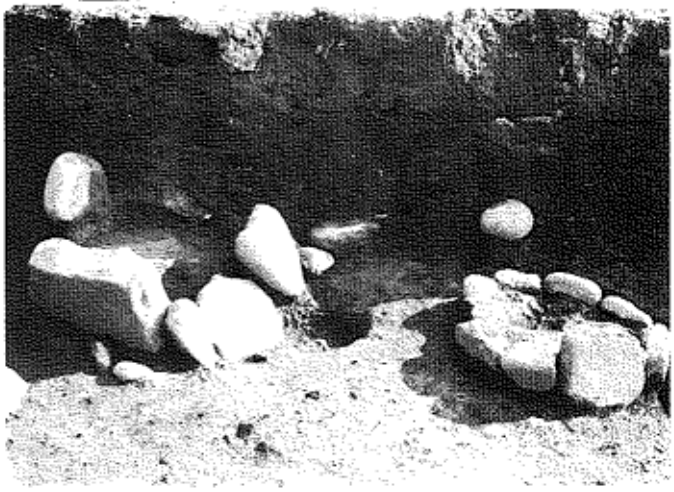


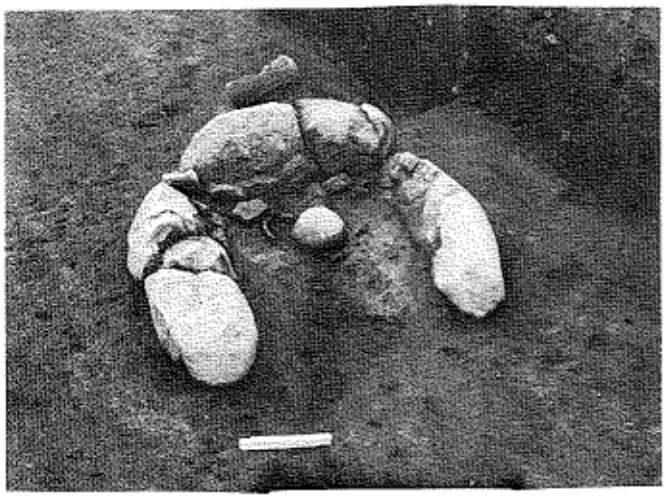




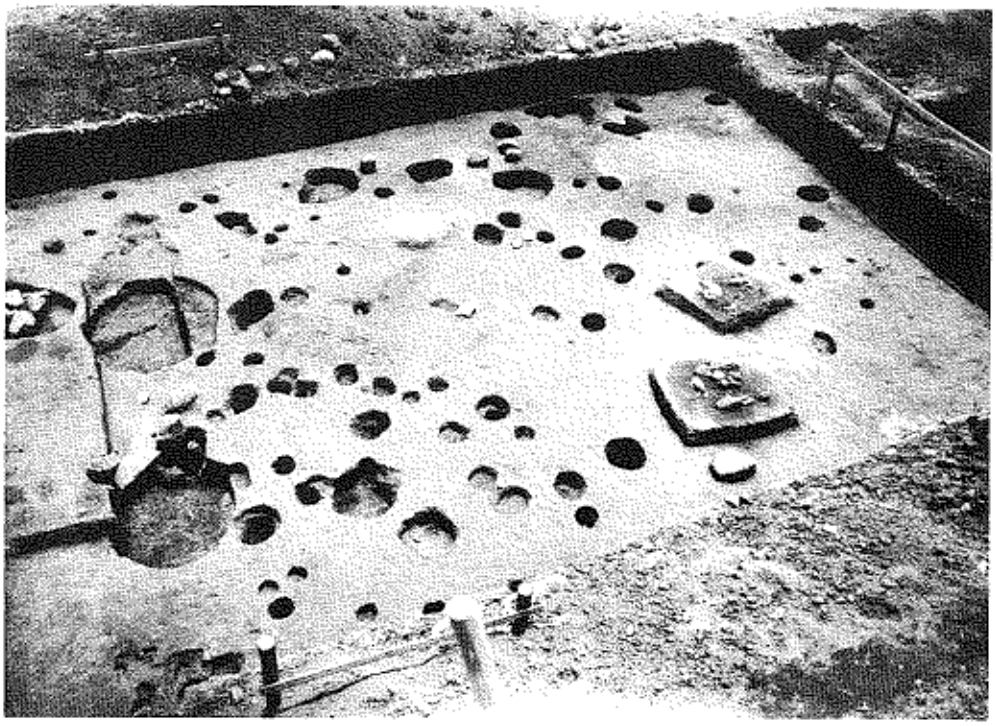
図版 7.　持長地遺跡　　下.　1. 常滑系土器出土状況（下から柱穴が検出）
上.　酸化鉄堆積状況　　2. ナイフ形石器　　3. 玦状耳飾

図版 8.　二屋敷遺跡
上．第 7 号竪穴住居跡全景　中．第 6 号竪穴住居跡全景
下．炉　　跡（その一）

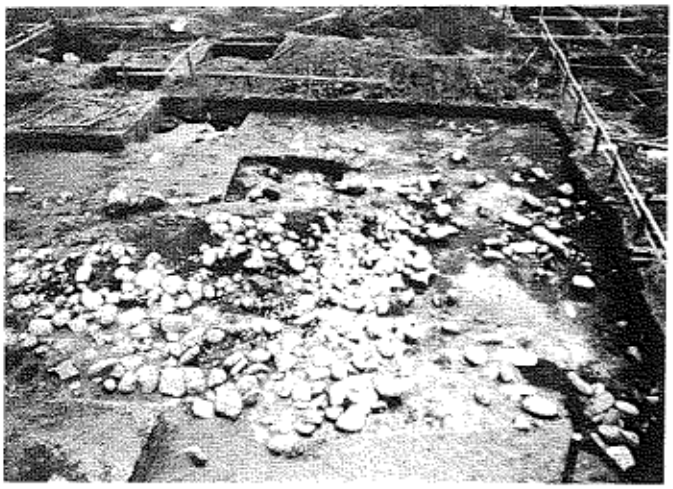


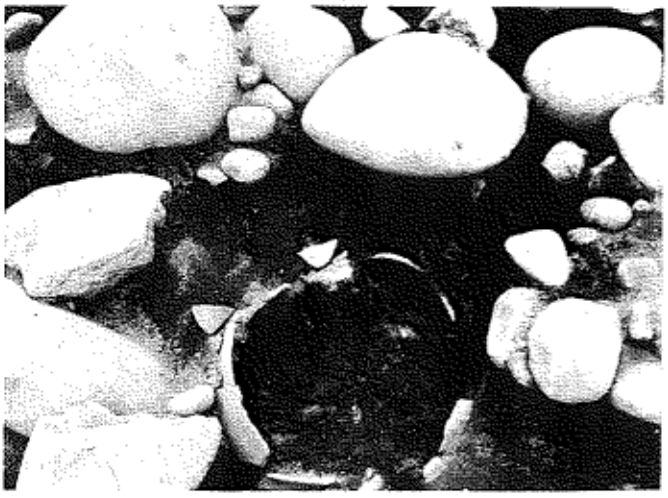


図版 9.　二屋敷遺跡
上．炉跡群の出土状況。下から第７住居跡が検出される　中．炉　跡（その二）
下．炉　跡（その三）

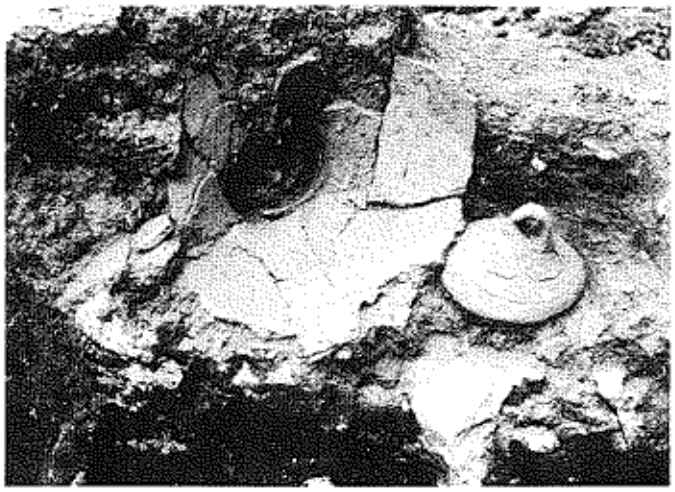


図版10.　二屋敷遺跡
上．炉跡とピット群
下．石組を伴うピット

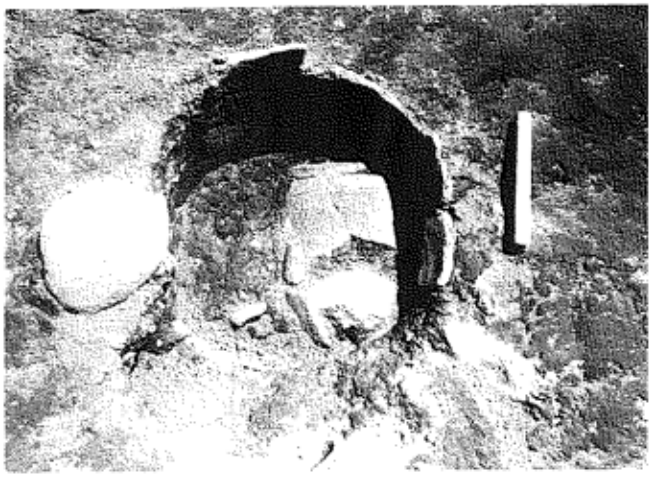




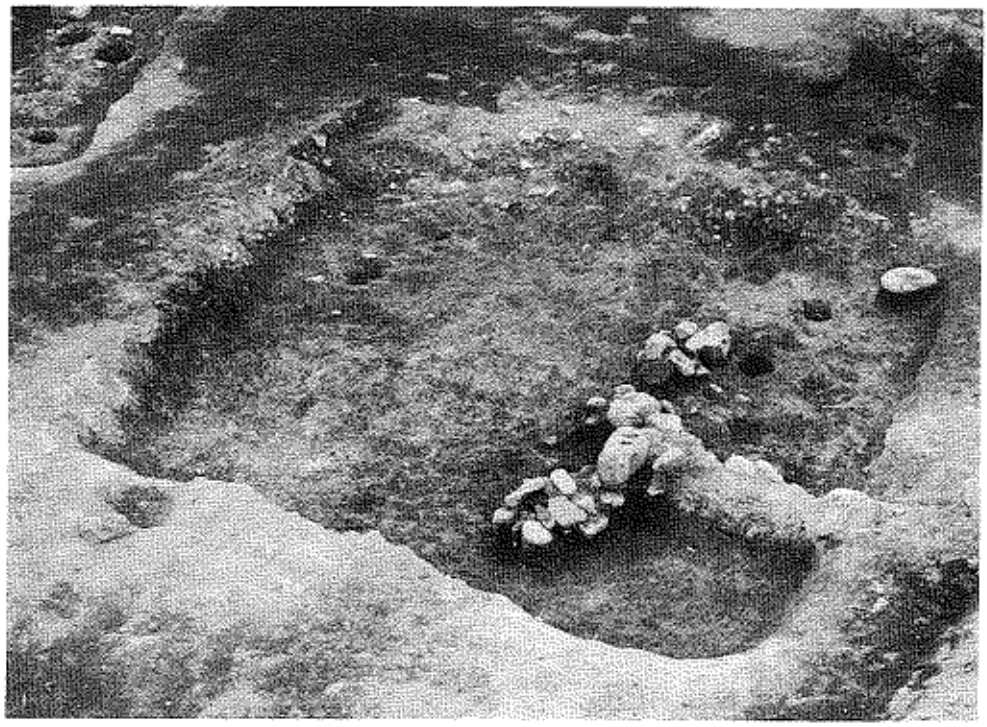
図版11.　二屋敷遺跡
上．中央部の石組遺構全景（西からみる）　中．石組遺構細部
下．石組遺構内埋甕出土状況

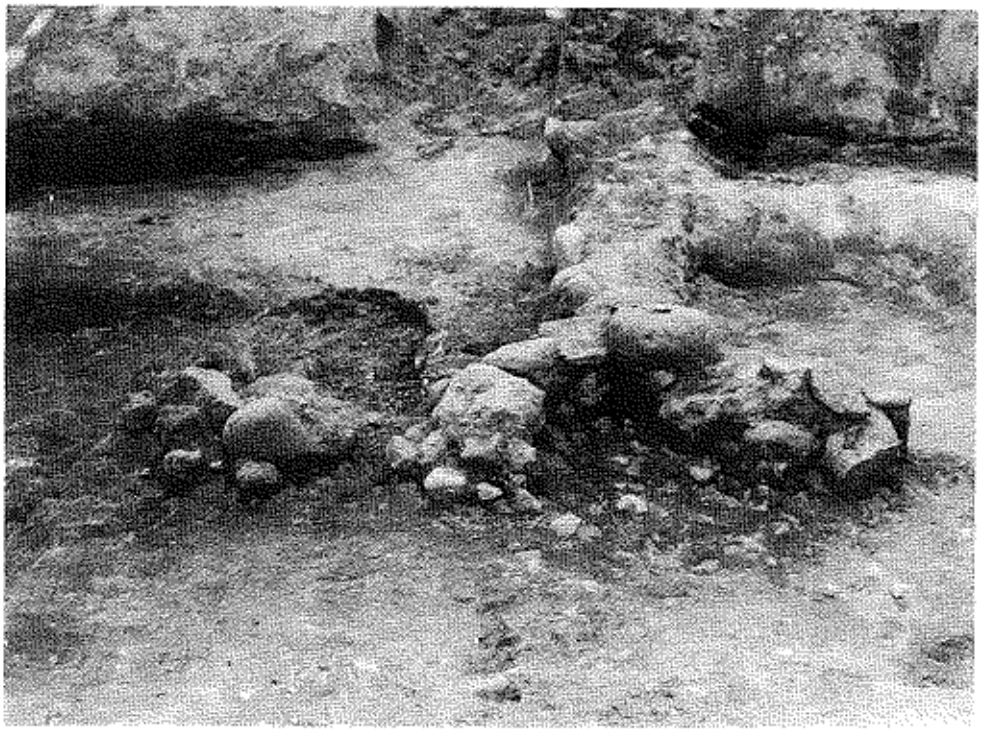


図版12.　二屋敷遺跡　　中．同、細部
上．西南斜面遺物出土状況　　下．同、細部



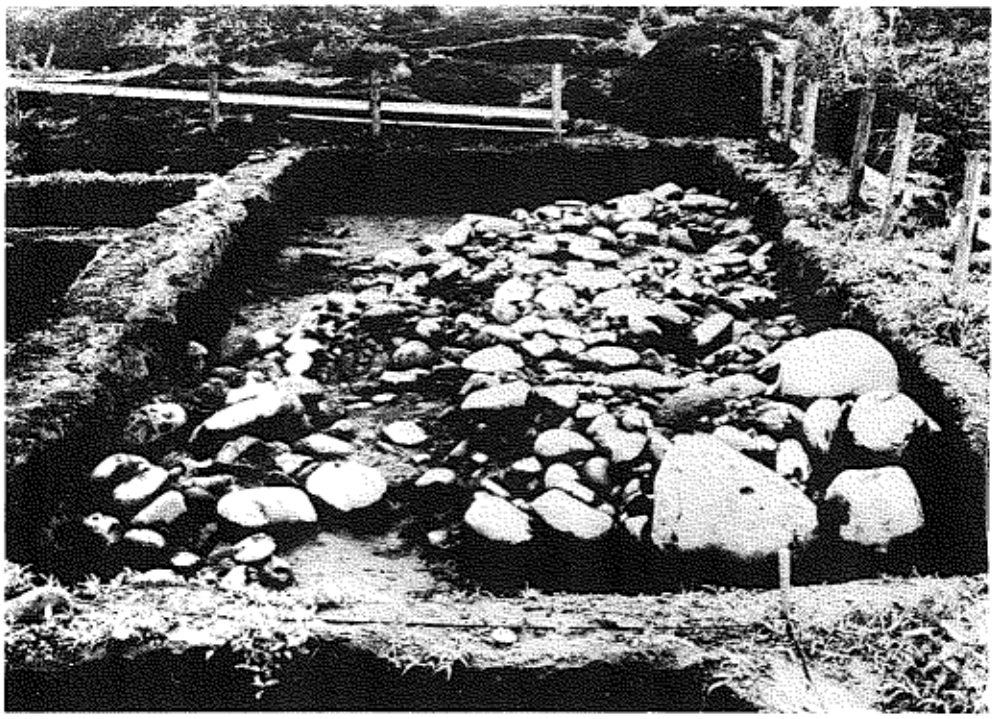
図版13.　二屋敷遺跡
上．埋甕出土状況 その1　（底部に穿孔あり）
中．埋甕出土状況　その2
下．埋甕出土状況　その3

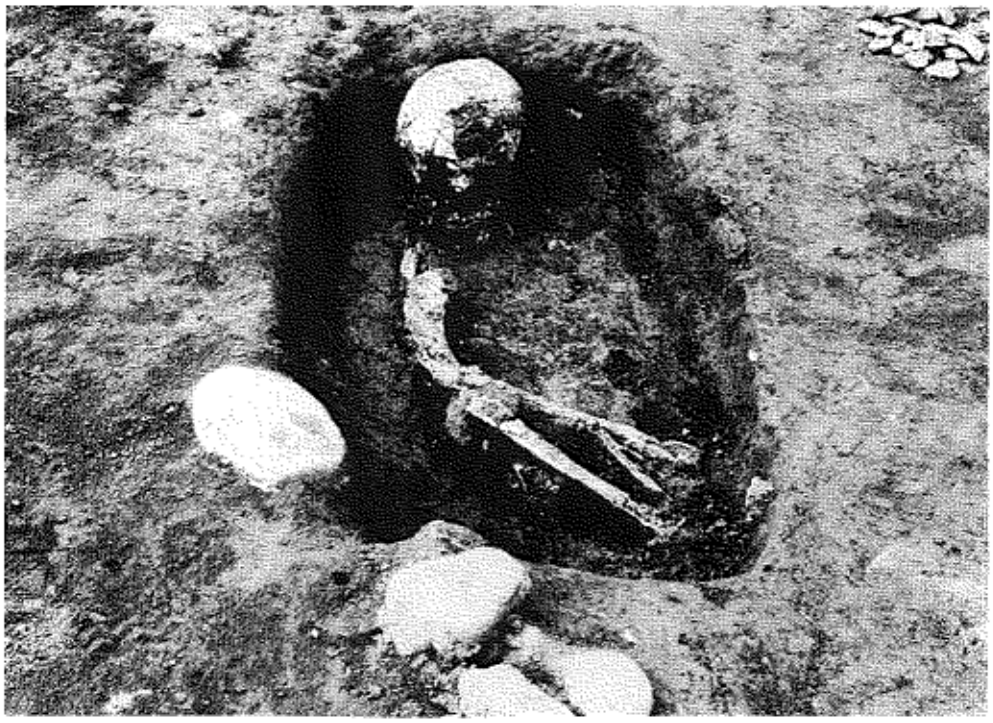




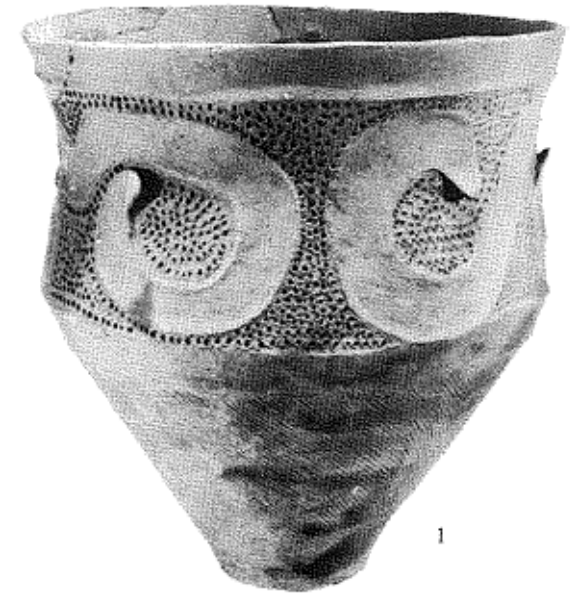
図版14. 二屋敷遺跡
上. 第3号竪穴住居跡全景
下. 同、カマド付近

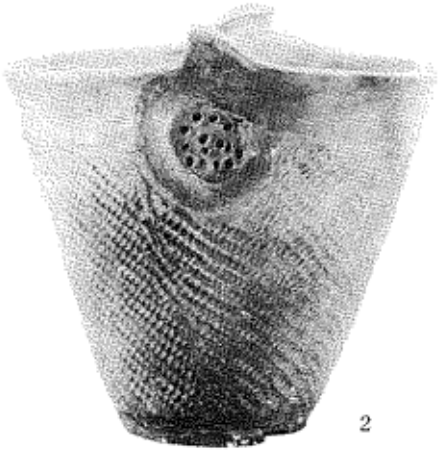
図版15. 二屋敷遺跡
上．第5号竪穴住居跡全景
下．同、カマド付近

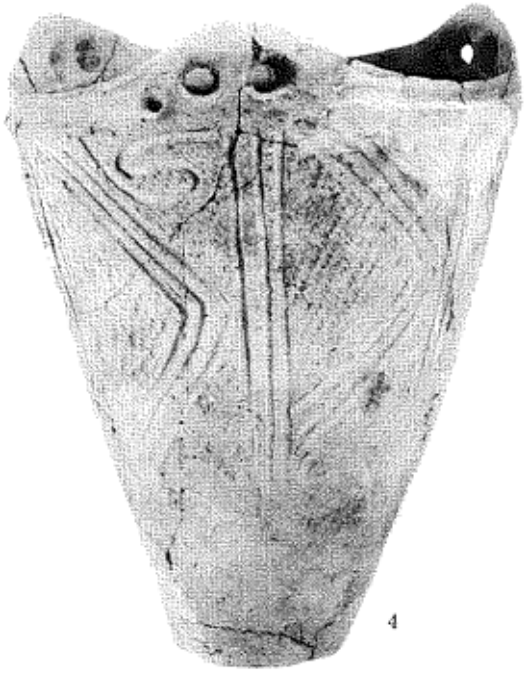


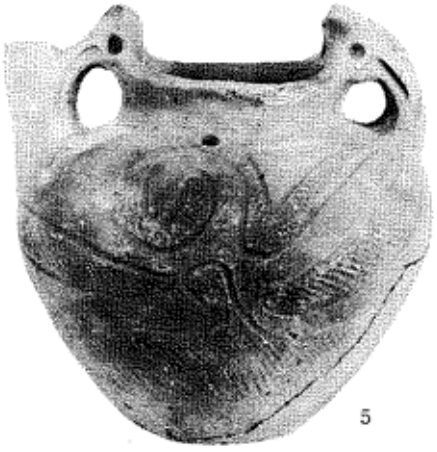


図版16.　二屋敷遺跡
上．近世と思われる配石群
下．配石群の下の墓壙

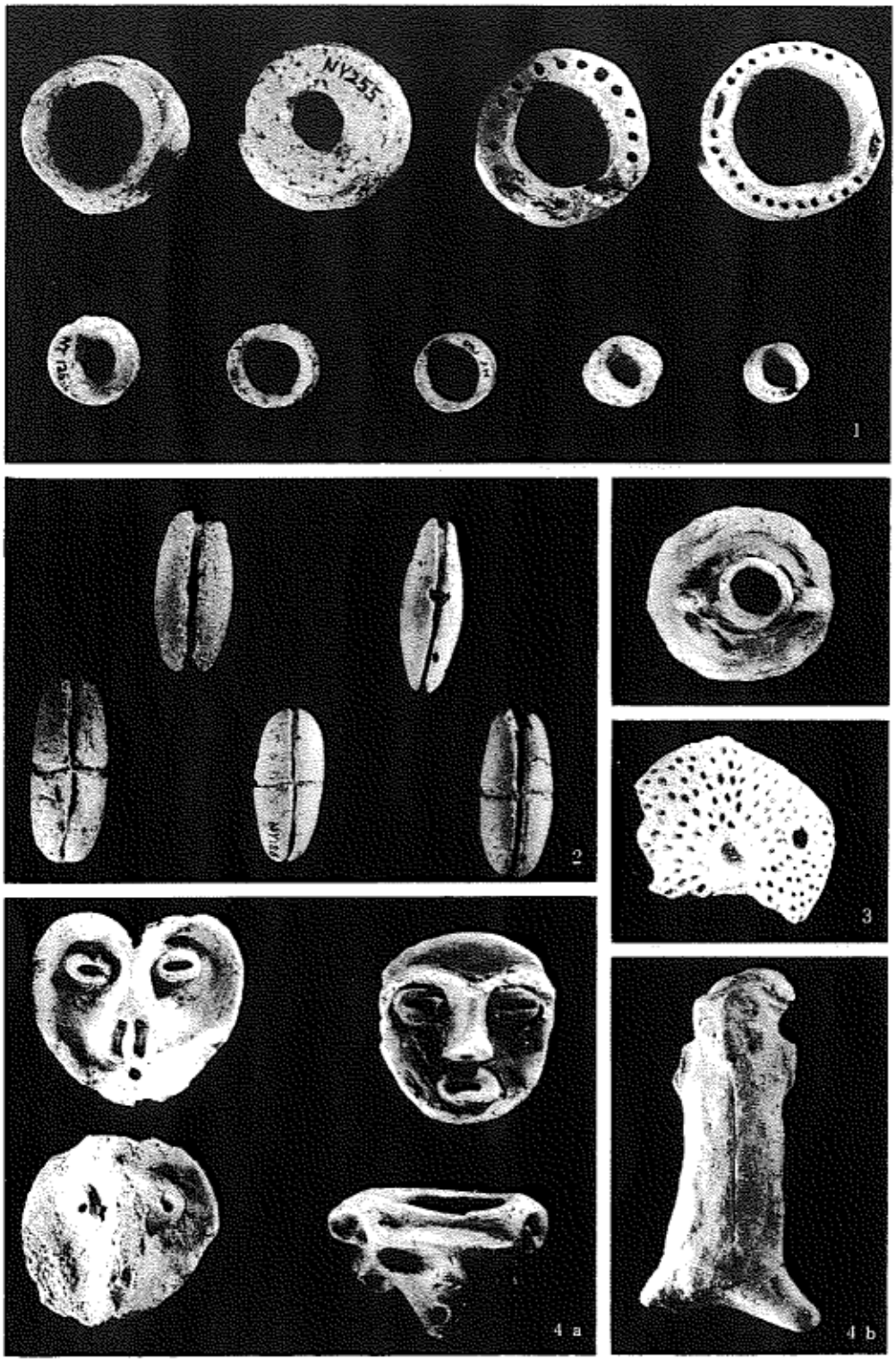




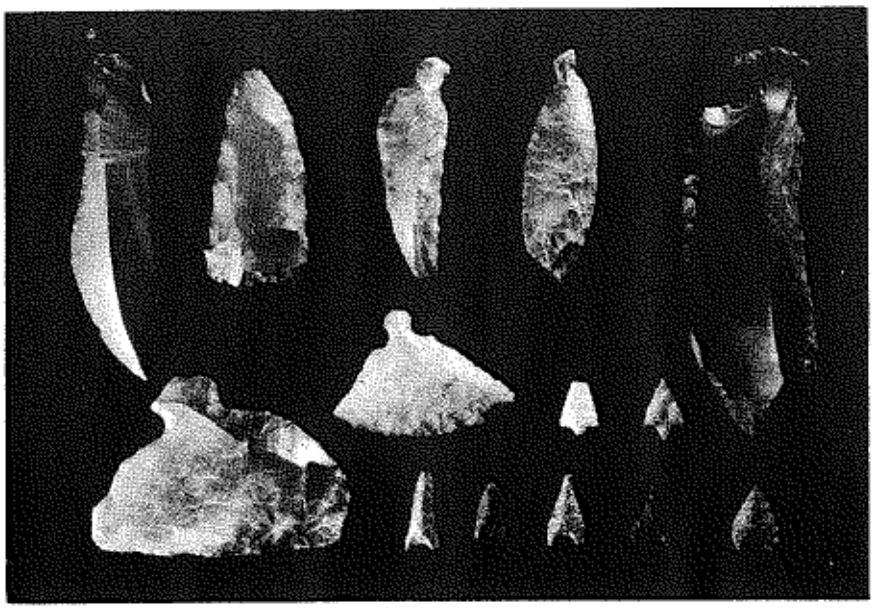




図版17. 二屋敷遺跡　縄文式土器（中期末～後期初頭）



図版18. 二屋敷遺跡
1. 耳飾り
2. 土錘
3. 蓋
4. 土偶



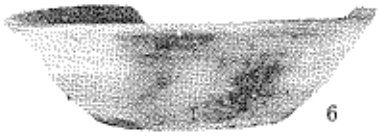
1

2

3

4

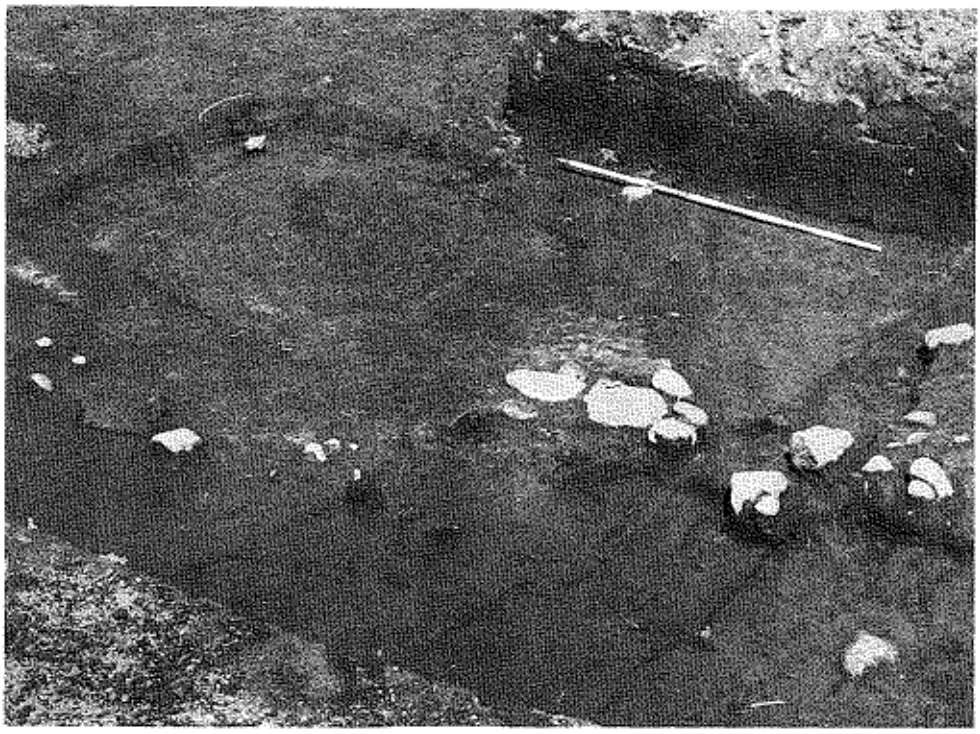
5



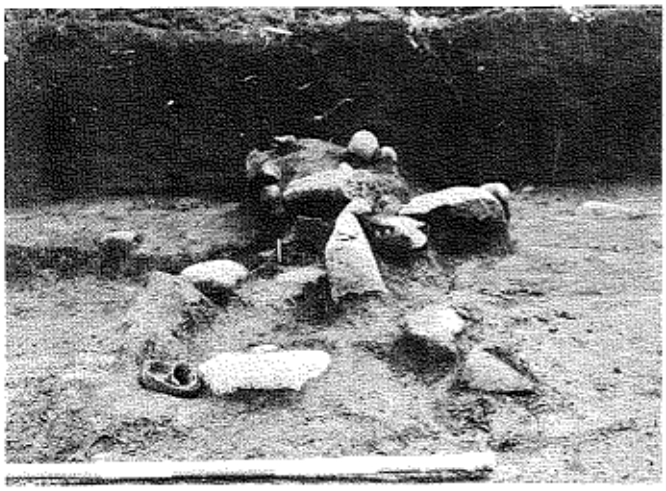
6

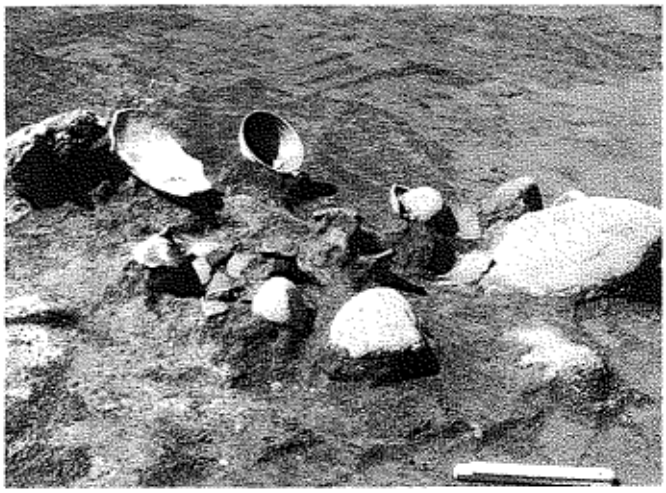
7

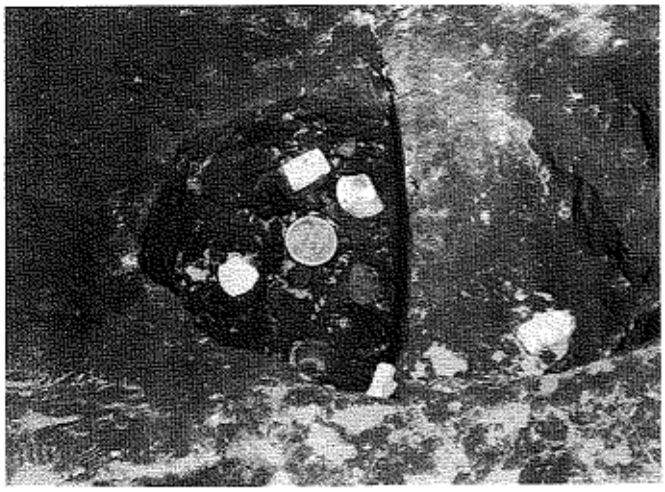
図版19.　二昼敷遺跡
上．縄文時代石器（石　，石鏃，石刀。異形品）　　下．平安時代　土師器坏，甕
装身具（硬玉製ペンダント）



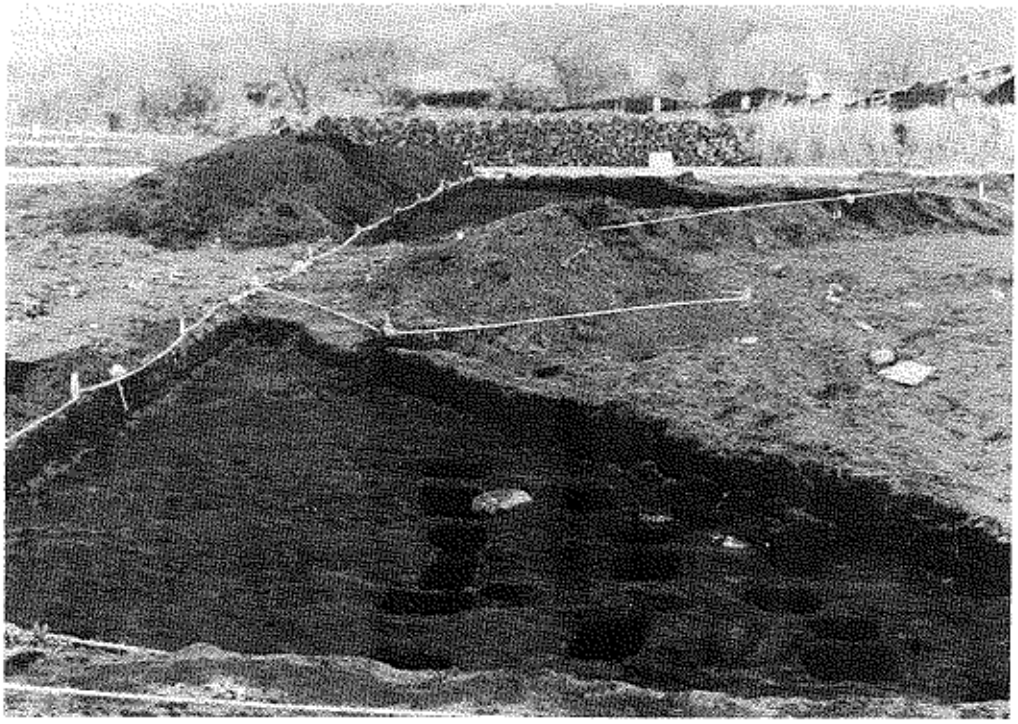
図版20. 下原田遺跡
上. 遺跡全景（西からみる）
下. 第4号住居跡

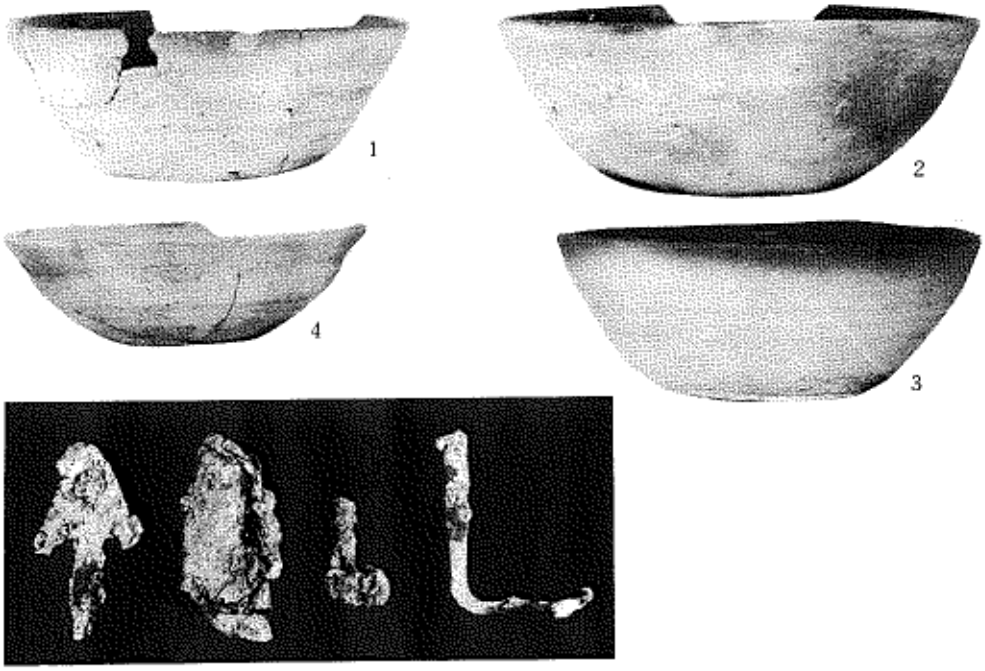






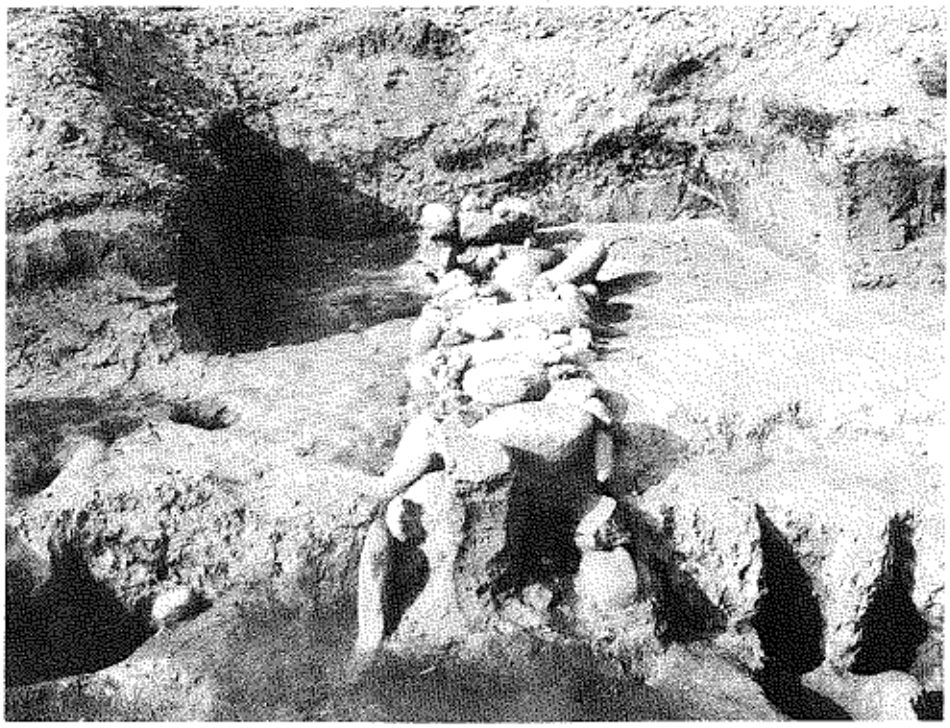
図版 21. 下 原 田 遺 跡
上．第4号住居跡カマド付近
中．第4トレンチ炉跡（或はカマド）
下．第3号住居跡カマド脇ピット内の遺物出土状況



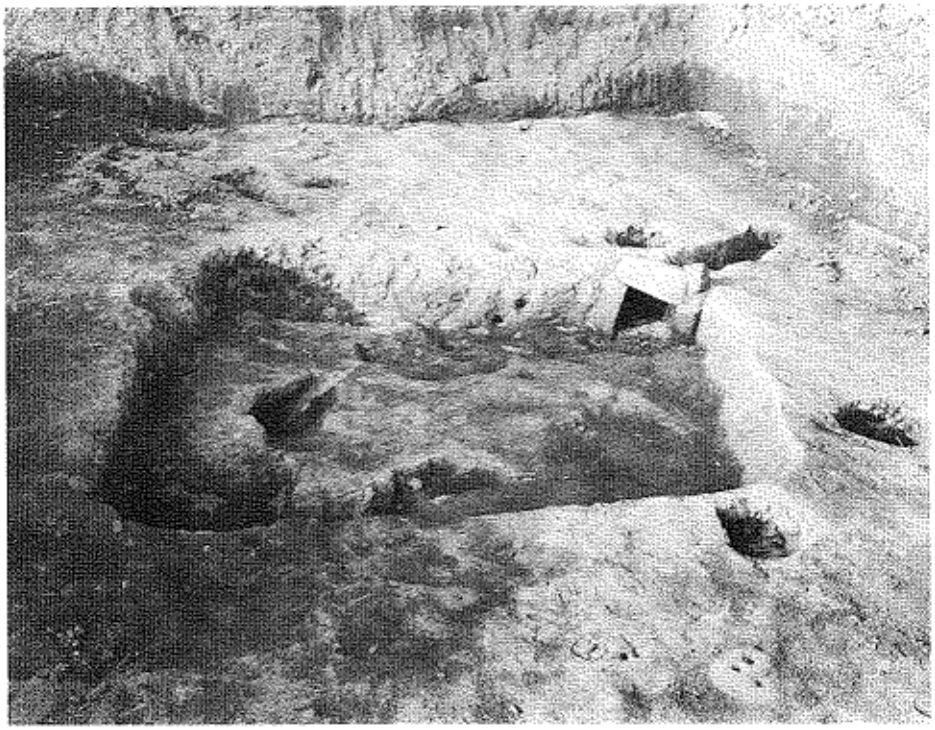


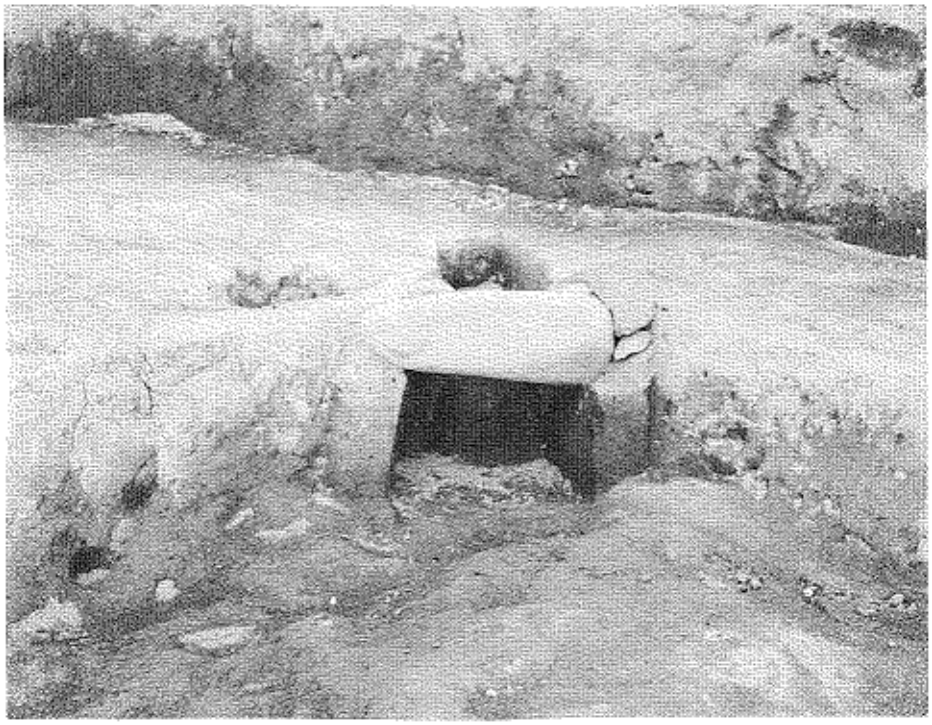
図版22. 下原田遺跡　　中。土師器坏
上. 柵列状ピット群　　下. 鉄製品

図版23.　東山遺跡
上．遺跡遠景（南からみる）
下．土師器坏の出土状況

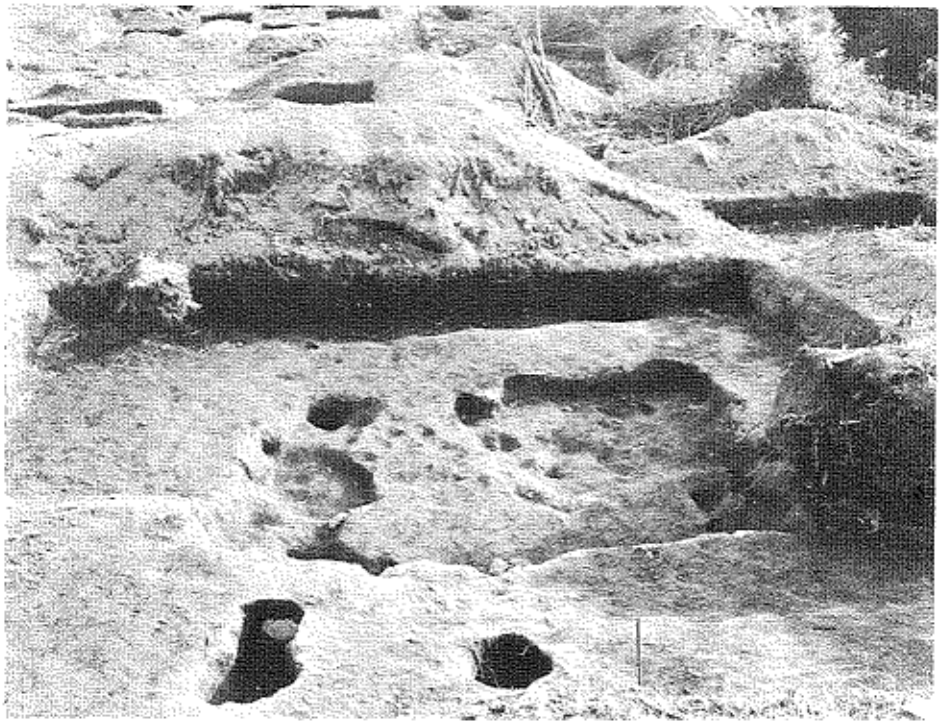


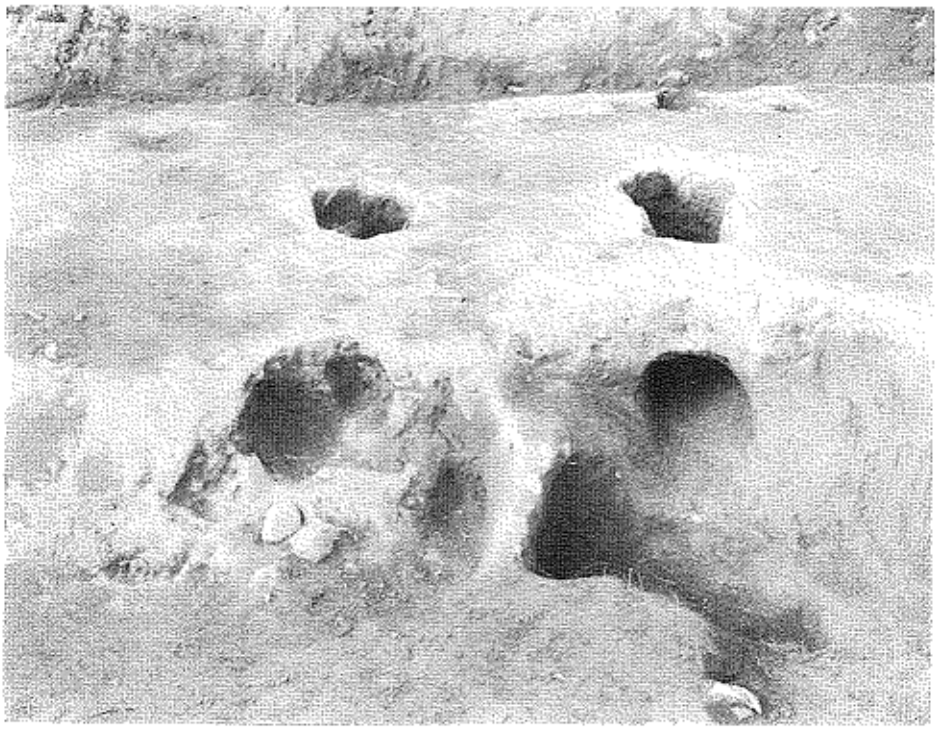
図版24. 東山遺跡
上. 第1号住居跡全景
下. 同、カマド付近



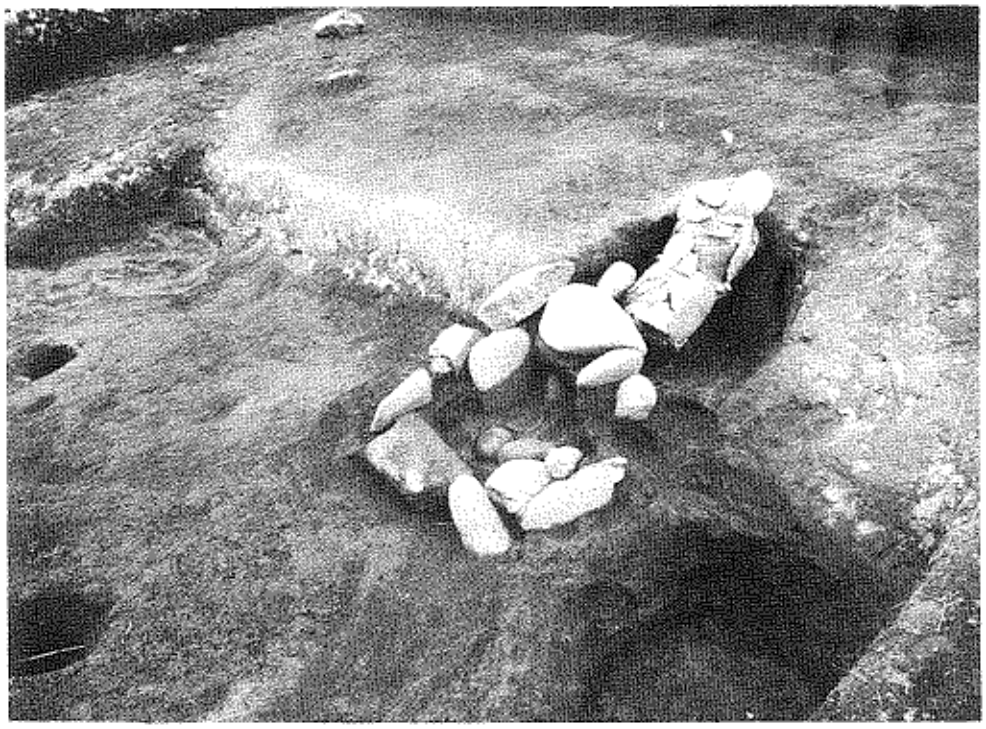


図版25. 東山遺跡
上．第2号住居跡全景
下．同、カマド付近

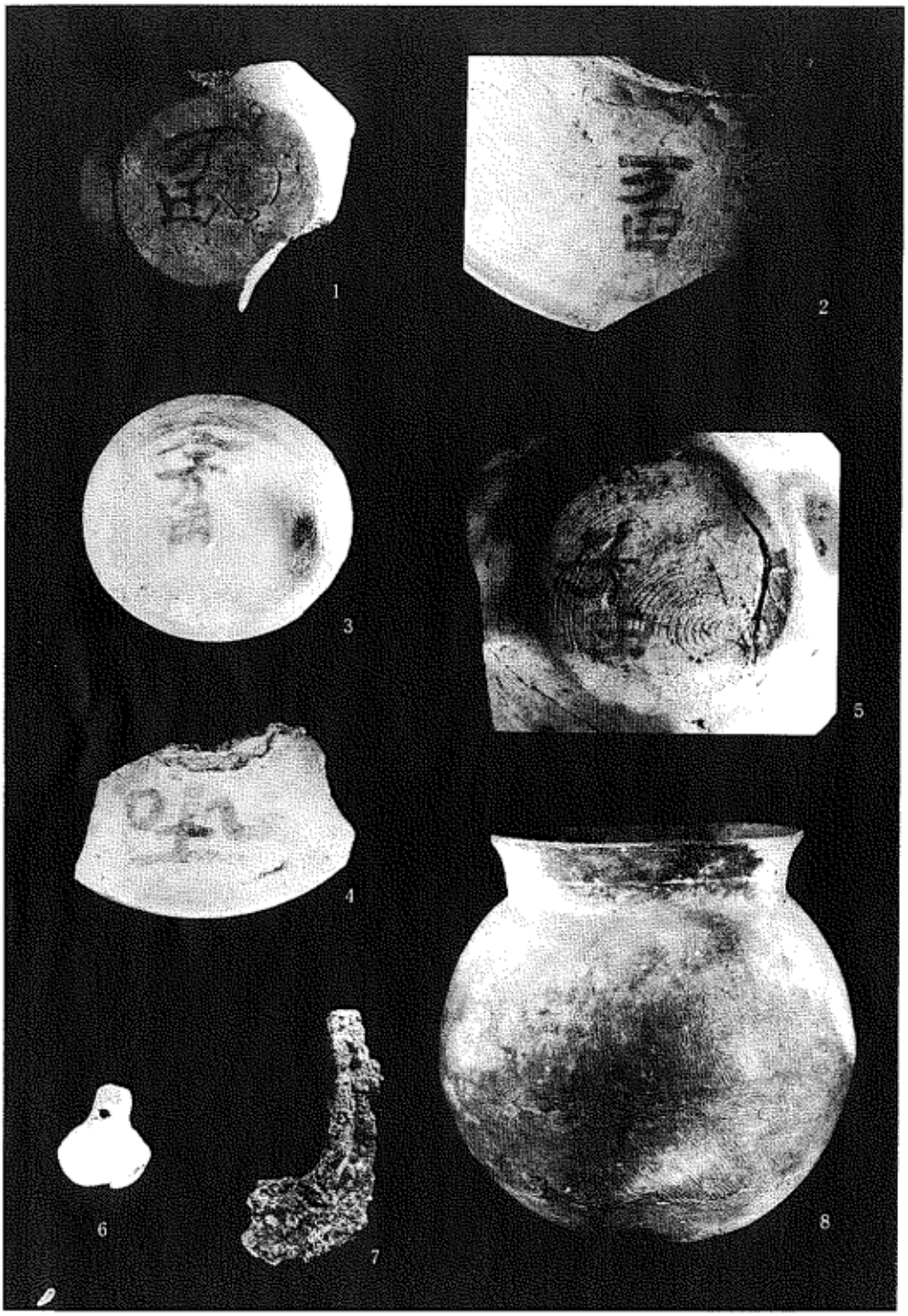




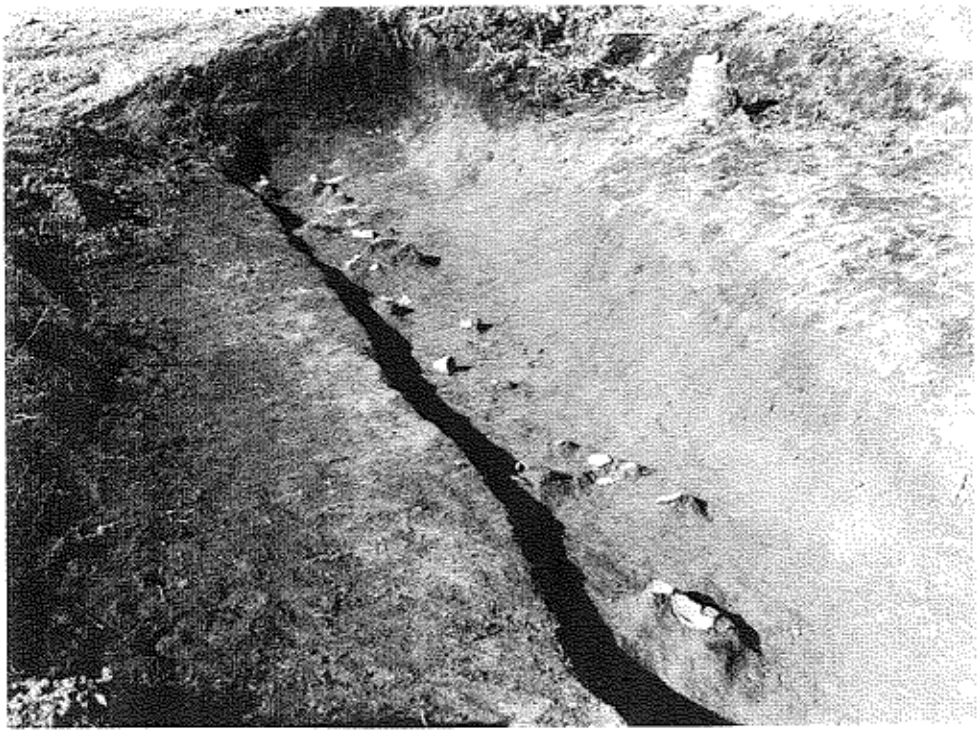
図版26. 東山遺跡
上. 第3号住居跡全景
下. 同、カマド付近



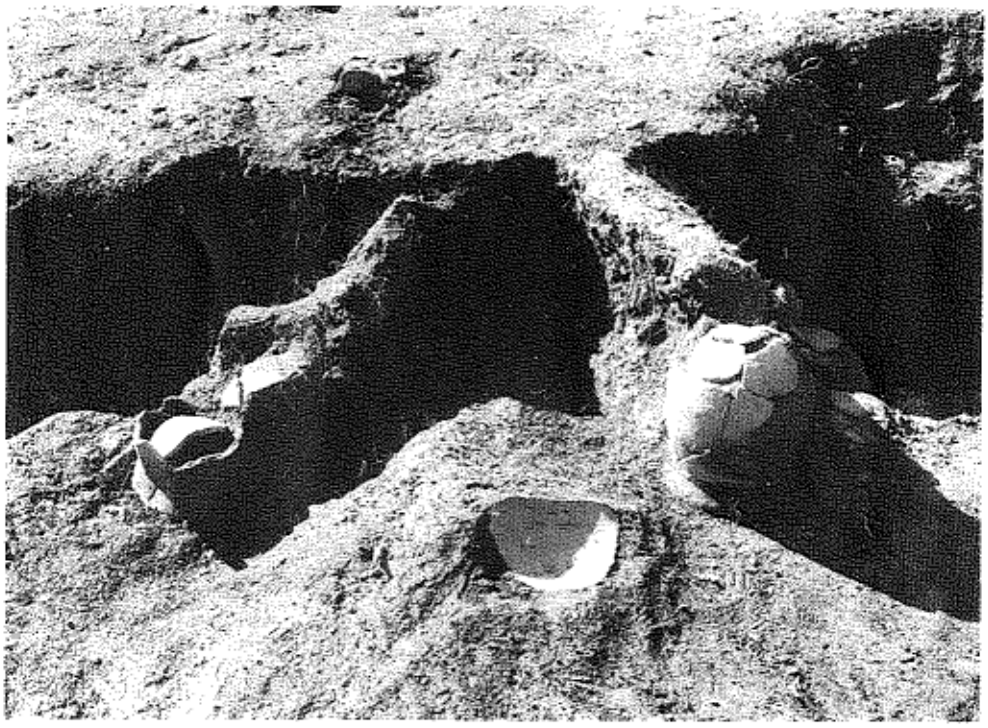
図版27. 東山遺跡
上．第4号住居跡全景
下．同、カマド付近



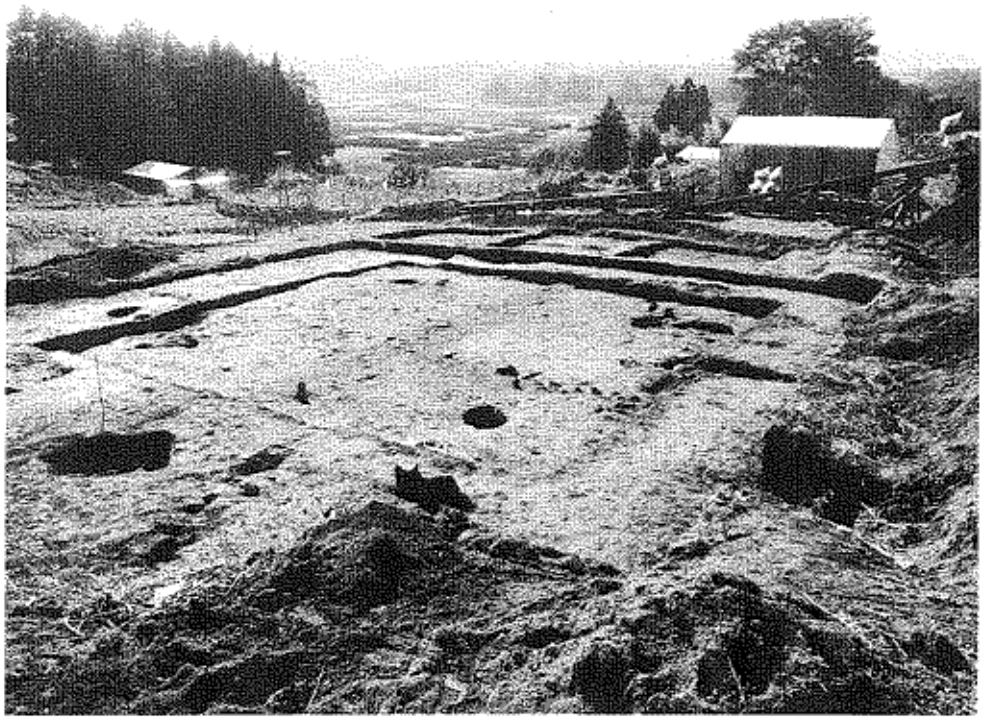
図版 28. 東山遺跡（１～７）、大山遺跡（８）出土品
１～５　墨書　　6. 土製鈴　　7. 鉄製鋤　　8. 土師器甕（大山遺跡）

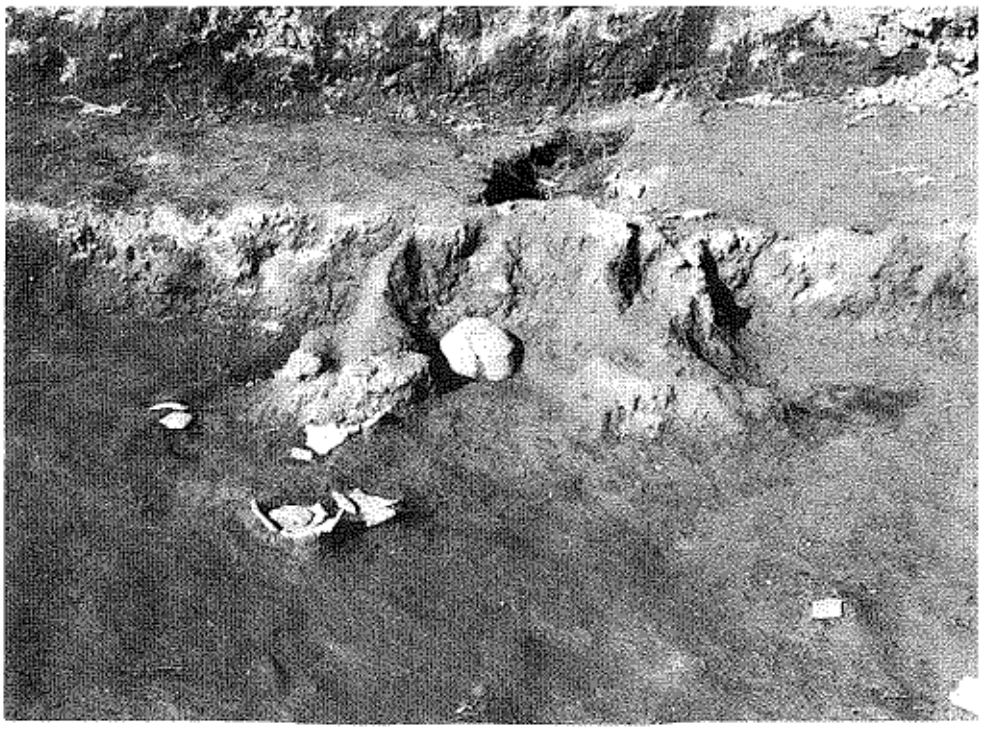


図版29. 塩沢北遺跡
上．遺跡遠景
下．東溝内の土師器出土状況

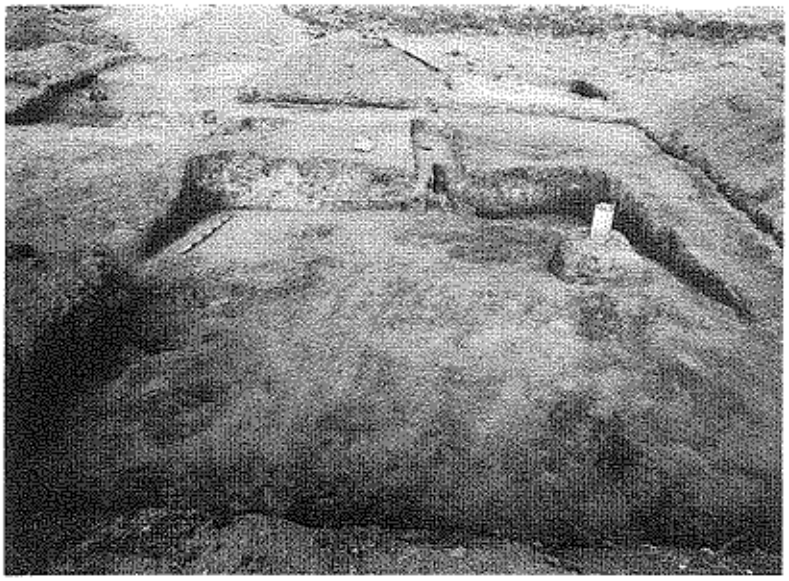


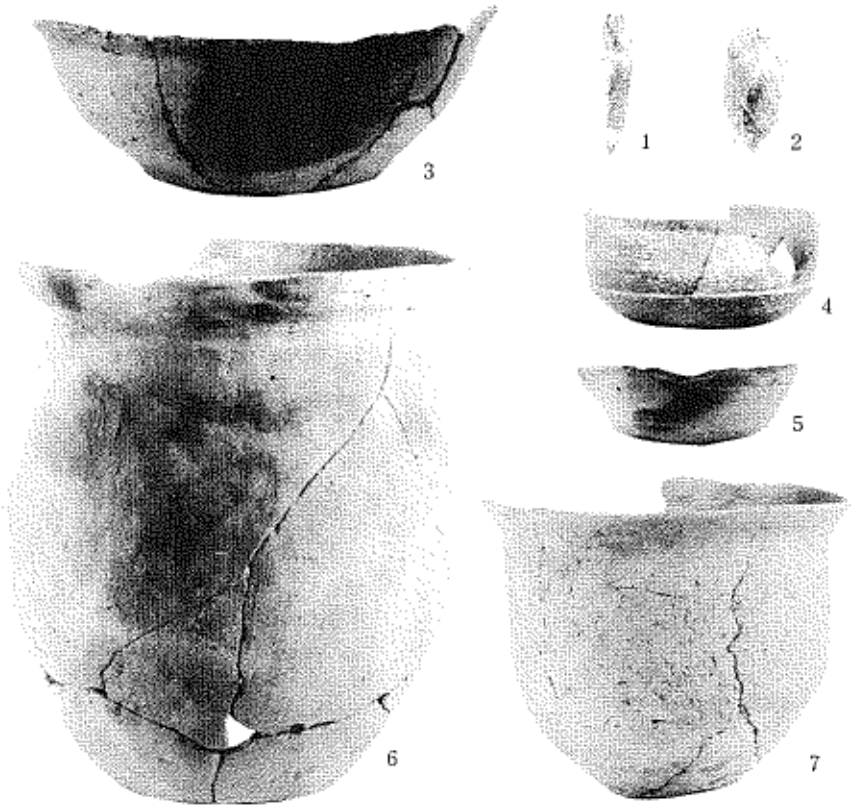
図版30. 塩沢北遺跡
上. 第1号住居跡全景
下. 同、カマド付近



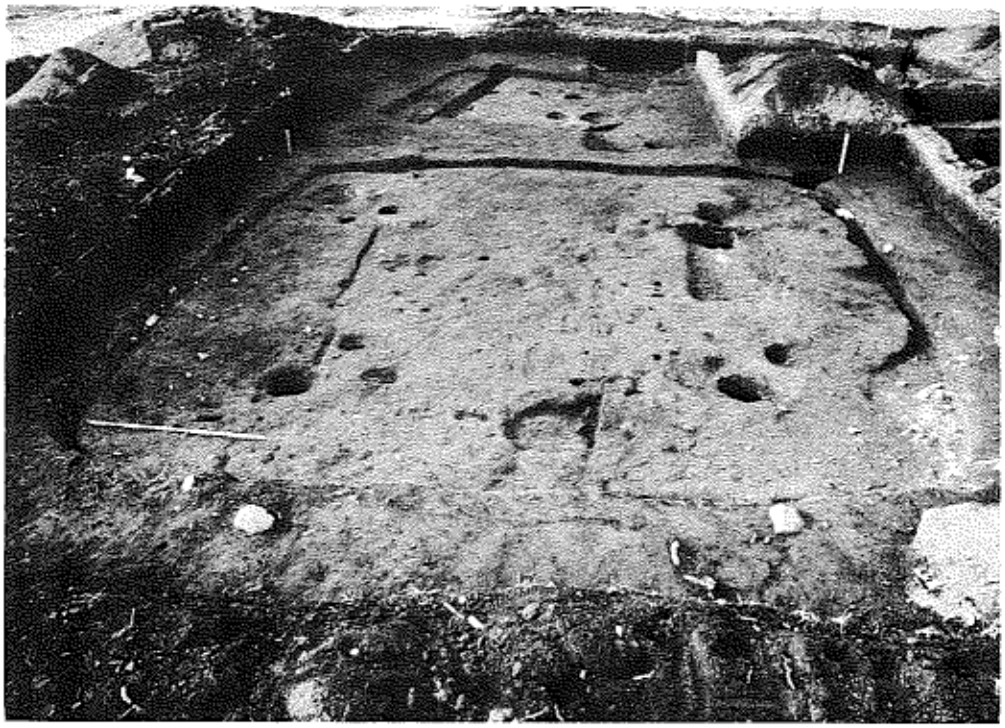


図版31. 塩沢北遺跡
上．第2号住居跡全景
下．同、カマド付近

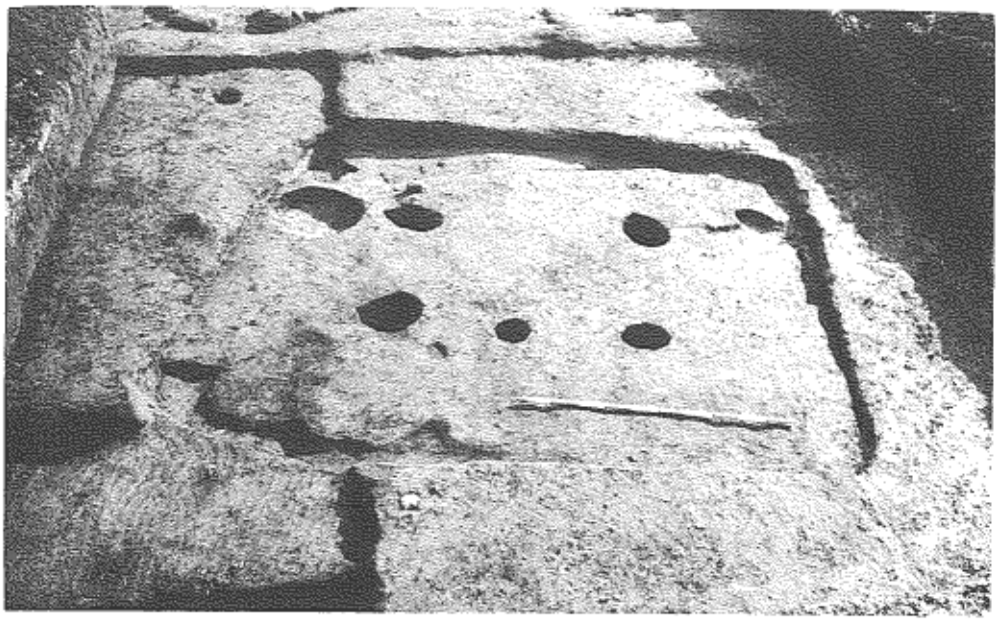




図版32. 塩沢北遺跡
上. 第3号住居跡全景
下. 出土遺物
1.2 石製模造品　3. 土師器坏（南小泉式）　4. 須恵器坏
5. 土師器坏（栗囲式）　6.7. 土師器甕（栗囲式）

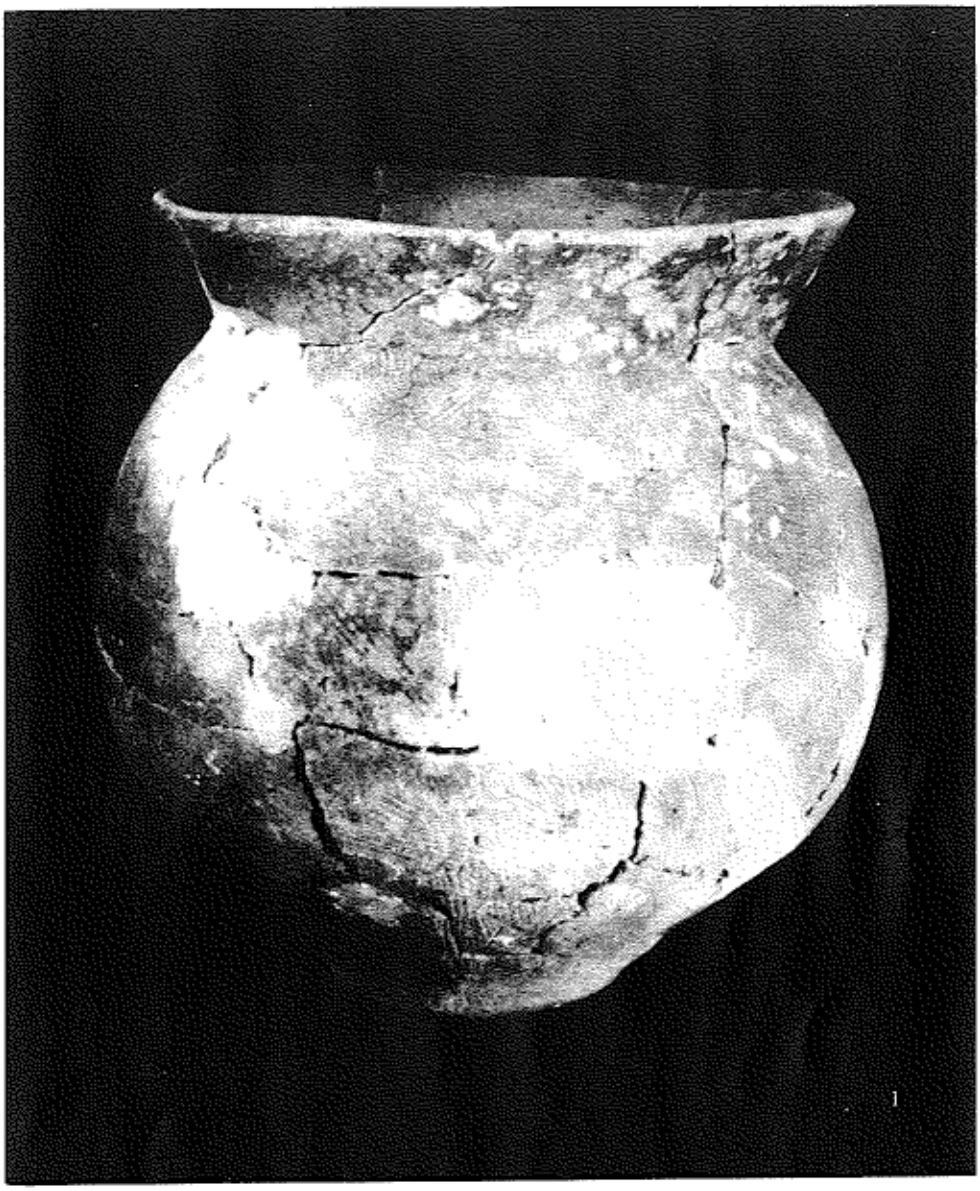


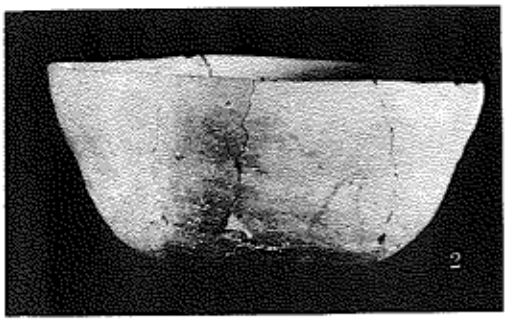
図版33. 大橋遺跡
上. 遺跡遠景
下. 第1号住居跡全景



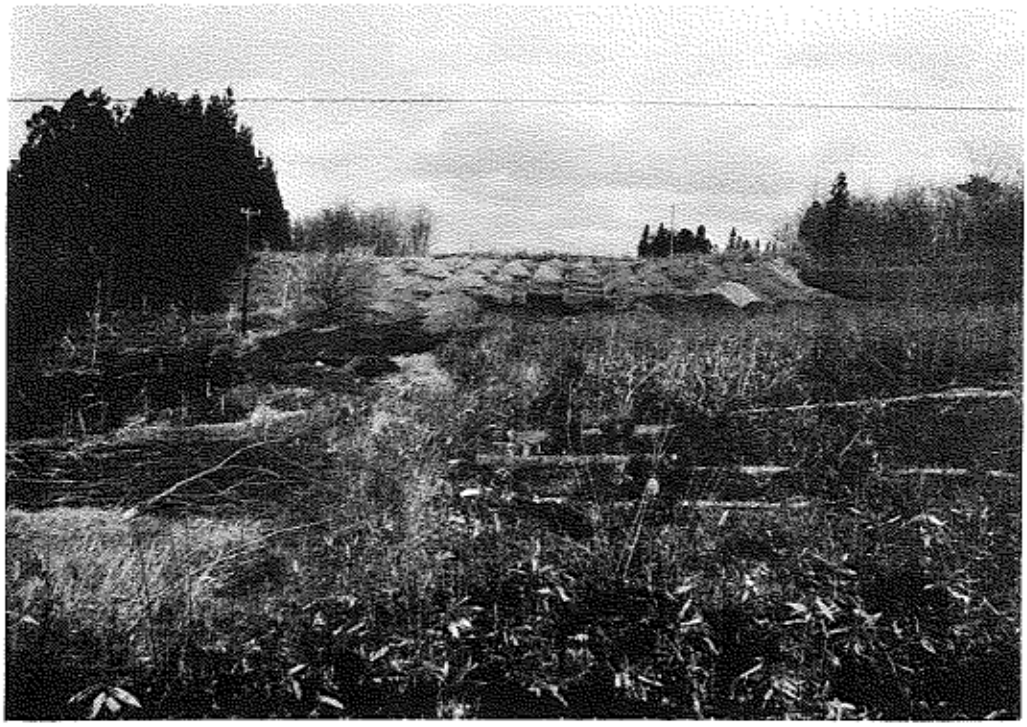
図版34. 大橋遺跡
上．第2住居跡全景
下．土器師

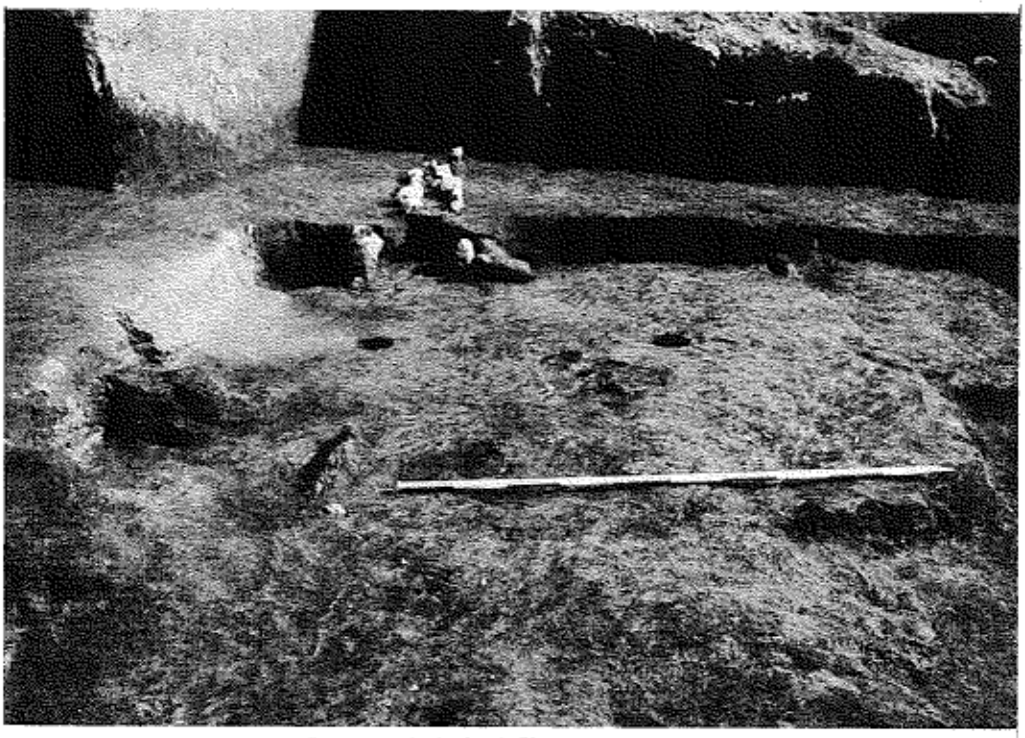
1. 2. 高坏
3. 器台 4. 坏



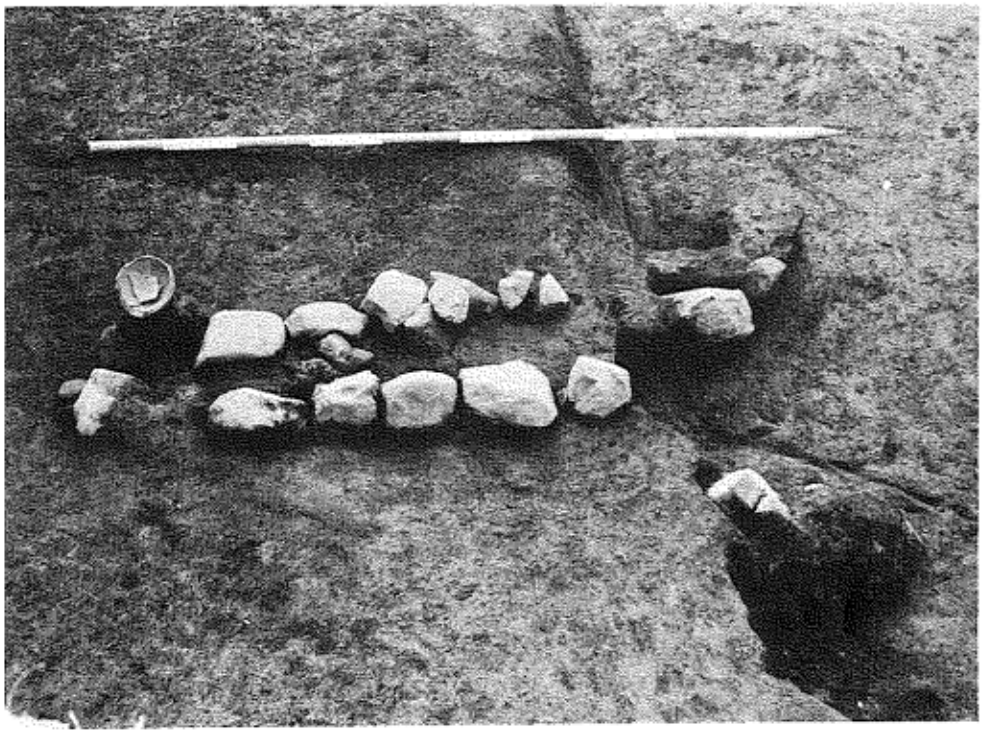


図版35. 大橋遺跡
出土遺物 1. 甕 2. 3. 坏





図版36.　赤鬼上遺跡
上．遺跡全景（大橋遺跡よりみる）
下．住居跡全景



1

2

3

図版37. 赤鬼上遺跡
上. カマド付近
下. 出土遺物 、土師器坏